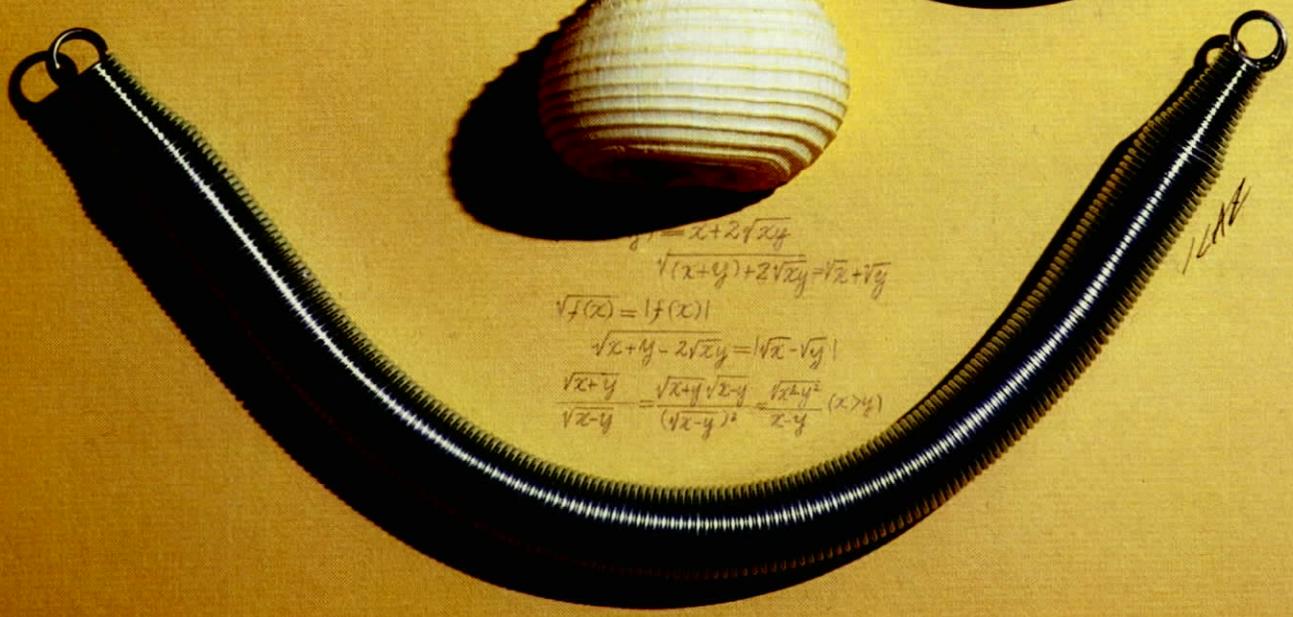


21世紀フォーラム

第11号

迷路	
特集	



$$\begin{aligned} & \sqrt{x+y} = \sqrt{x+2\sqrt{xy}} \\ & \sqrt{(x+y)+2\sqrt{xy}} = \sqrt{x+y} \\ \sqrt{x} &= \sqrt{x+y} \\ \sqrt{x+y} - 2\sqrt{xy} &= \sqrt{x-y} \\ \frac{\sqrt{x+y}}{\sqrt{x-y}} &= \frac{\sqrt{x+y}\sqrt{x-y}}{(x-y)} = \frac{\sqrt{x^2-y^2}}{x-y} \quad (x>y) \end{aligned}$$

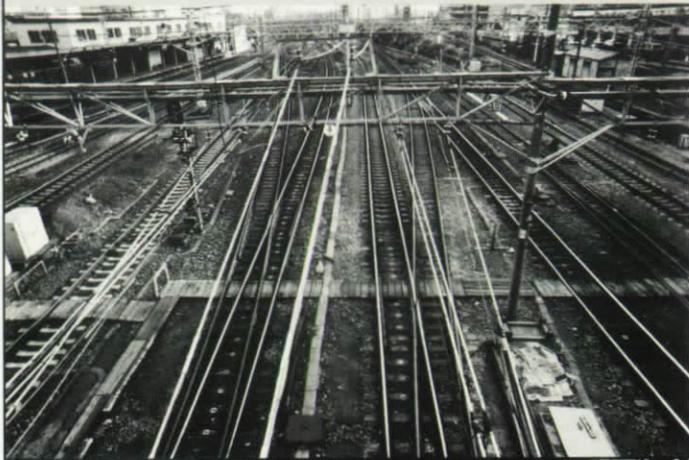
1/24

■ ゆきずりの迷路 ■

▶ 都内・サンシャインシティ



◀ 都内・新宿駅南口



◀ 都内・北の丸公園



▶ 都内・池袋付近



◀ 都内・銀座四丁目付近



日本的技術の推進

稲葉秀三

(財)産業研究所理事長/茅誠司部長

二十一世紀にむかって、われわれ日本人が世界を考えながら、これからのように自らの道を進んでいかねばならないか。この問題を考えるとき、私が自分の過去の人生、とくに戦後エコノミストとして歩んできた体験から申し上げたいのは、多少場ちがいと思われる節があるかもしれないが、「日本の技術をこれからどう発展させていくか」が一番大きな鍵だということだ。

簡単にその根拠を申し上げてみたい。ここ数年私は「日本はこれからは第三の道を進んでいかねばならない」ということを強調している。このことは過去において第一の道、第二の道があったことを示すものだが、私自身もこの二つの道には、直接、間接かかわりあった。

第一の道とは何か。これは終戦直後の昭和二十年代に日本が進んできた道だ。たとえば新しい憲法の生まれた昭和二十二年では、わが人口は七千三百万、昭和

十年頃の二三%アップ、しかも一人当りの国民生活はその頃の五五%にすぎなかった。食糧難とインフレに喘ぎ、多くの人は住む家もなく、失業者は街にあふれていた。こういう状況にたいし、「数年後に人口増加をまかなって、国民一人当りの生活をせめて戦前なみにすること、また政治的独立の前提として経済の自立(国際収支の自主均衡)を達成すること」。

それにむかつて各種の産業活動をどう大きくしていくか。これがわれわれの目標であった。そしてこの目標は実現したのである。

第二の道とは何か。それは昭和三十年代からはじまった。ここで日本は経済先進国、とくにアメリカ、ヨーロッパから技術を導入し、資本を一部調達し、それらの国々の先進的産業、とくに基礎的重化学工業、種々の機械工業、二次的化学工業を発達させていったのである。併せていえばエネルギーの基礎を水力、石炭

から石油に転換し、この上に雇用を増大させ、さらに流通、サービス、貿易活動を大きく伸ばしていった。いわゆる日本の高度成長時代がこれに当る。

もつと詳述しなければならぬけれども、それらの道、すなわち経済戦略によって、昭和二十二年には「アメリカの二十十分の一、ヨーロッパの十分の一」にすぎなかった私たち日本人の国民生活は昭和四十年代の半ばには、ヨーロッパとは同じ水準に、またアメリカに対しても実質七〇%ぐらいのところまでを立ち直らすことができるという奇跡を実現したのである。

さて私が、わが日本は第三の道、第三の経済戦略を、それこそこれからは本格的に検討し実行していかねばならないと主張しているのは、つぎのような理由からだ。

①昭和三十年代になって日本は、多元的意識決定の社会に入っている。つまり従来のな経済第一主義ではもはややっていけないとききている。いうなれば社会、環境福祉、国際関係などを多元的に考慮しながら自らの道を進んでいかねばならないようになってきている。経済も高度成長から低成長に移っている。

②石油やエネルギー問題の深刻さはたとえば最近の基礎的素材産業に見られる

ように、日本はこれらの産業を縮小せねばならない段階にきているのだ。また多くの発展途上国からの追い上げを日本は覚悟して受けていかねばならない。またこれからはもつと積極的に海外にむかつて経済協力していかねばならない。

③日本の高度成長期には多くの先進国が日本に技術を供してくれた。また私たちはそれらの技術を消化し、活用する素質と才能をもっていた。それが日本を今日のように大きく発展させたのだ。しかし、日本に技術を提供することを経済先進国は警戒しつつある。このことはご承知のとおりであろう。従ってさきの日本のあり方を考えると、基礎的技術、応用技術その双方の面で日本自らがもつと立派な付加価値の高い、公害効果の低い、技術と産業をどうしても育成していかねばならないようになりつつある。それが私のいう第三の道である。

最近の日本の動きは、もしも本当に政府と学界と企業とがこの点に目覚めれば、日本はこれをものにしていくことのできることを立証している。すでにいろいろの兆しがあらわれつつある。このことを私は申し上げたいのである。

趣味的人間

佐賀和光

建築家／国際交流研究部会

僕は元来趣味の多い人間で、仕事をも含めて総てが趣味だといつても過言ではないほどです。どれ一つ欠けても、今の生活が成り立たないし、今の僕の存在すらあやうくなるものだと思えるほど、生活に密着しているものばかりです。その一つはジャズです。ジャズと一口にいっても中々捉え所がなく又、定義するのはむずかしいのですが、そのジャズから僕が受けた影響には計り知れないものがあります。自由という事に興味を持ち、僕なりにより深く考えるようになったそも、その切っ掛けの一つが、そのジャズだったのです。ジャズの演奏形式しかり、ジャズが発生してくる歴史的背景、その生い立ち等、総てが自由という事に對峙して考えないわけにいかなかったのです。そしてその時、最も興味をもった事は、自分自身でそれを演奏する事だったのです。今は亡きジャズピアニストの巨人の一人、バド・パウエルの演奏が、僕をビ

アノに向かわせる一番のインパクトでした。それ以来ピアノを巧く思い通りに弾けるようになる事が、僕の一番の興味のつらになりました。そしてそれがあまり言葉を知らない僕にとつて、我が心を表現する最も確実かつ説得力ある手段の一つであり、大切な生活の一部になっていきます。

次はサーフィンです。テイクオフ（板に立つ時）をした瞬間から、波と僕との対話が始まり、プルアウト（板から下りる時）するまでの間、完全に孤独であり、自然と僕だけの世界になるのです。まるで空中に浮かんでいるような感覚です。そしていつも考えます。自然という事、自分という事、宇宙という存在を、僕の永遠のテーマともいえる自由という事を。そのためだけというわけではけしてありませんが、基礎体力をつけるべくトレーニングをかかさぬ毎日の事です。基礎的な体操は当然の事、どこへ行くにして

もなるべく歩くようにし、かなり遠い所へも車等使わずに自転車に乗って行くのです。そんなわけで自転車そのものにも大変な興味をもっています。独断と偏見にほかなりませんが、自転車は人間の作り出した最高のメカニズムの一つなのではないかと思えます。まず排気ガスとはいえば人間の吐く息ぐらいなもので、渋滞などけしてありません。その気になれば時速六十キロや七十キロは出せるのです。そしていつも思います。人間にとつて本当にスピードって大切なんでしょうか。もしかしたらスピードこそ我々にとつてそれこそ命取りになる大きな原因になりかねないのではないかなど。人間の体力の限界、しいていえばあらゆるものを含めた人間の限界といった事を考えるのです。SFが大好きで、よく本を読んだり、映画を観たりするのですが、宇宙開発にしても、もちろん技術の発達、革新がなければどうにもならないのは言うまでもありませんが、その方向の見誤りがかなりあるように思えてならないのです。技術のための技術といった事柄があまりにも多すぎるのではないかと。人間を唯怠惰にするだけに終わりがかねない技術、もの考え方が多すぎるのではない

いかと。それはもちろん素晴らしいに違いありません。宇宙空間の隅々まで思い通りに翔巡れたら。スペースオペラそのまに動きまわれたとしたら……。

しかし人間そのものの開発といった事、特に精神の開発といった事、人間本来のあるべき姿といった事を常に踏まえていなくては、取り返しのつかない事になってしまふのではないか、いやもう取り返しがつかない所にまで来ているのではないかと考えるのです。でも人間がもう限界だなんてけして思いたくないのです。技術は常に我々の側にあるのだと。波乗り板はウレタンフォームやグラスファイバーといった、現代科学の粋ともいえる材料で作られています。しかしあの形にするためには、人間の手仕事でなければ完璧なものはいないのです。そしてそれに乗る事により、自然を学び、宇宙を感じ、エネルギーの不滅を知る事が出来るのです。ジャズ、波乗り、模型飛行機、自転車、そして自然、自由、愛、生活、人間、増々興味は尽きません。そして、それらを総て含めて、建築というものを考えています。そして、その中でも歴史が一番の興味あるものです。

日和見について

宮田 登

筑波大学助教授／加藤秀俊部会

この頃は、日本人の伝統的思想の一つと思われる「日和見」ということを、民俗学的観点から究明したいと思っている。ヒヨリミは読んで字のごとく、お日柄すなわち天気のことを観察することであるが、以前の日本の民俗社会には、日和見を一つの職能とする人々がいたらしい。

村の古老に、昔よく聞いた諺についてただしてみると、たとえば、「鳥の巣が樹木高くかかった年は風が吹かない、低くかかった年は大風が吹く」とか、「カッコウが鳴くと晴れる」、「蟻が座敷に上れば、大雨が降る」、「猫が前足で顔を拭きはじめると、雨が降る」などと、いずれも天気の前兆についての内容が多い。動物の動きを、人間の方が潜在的に天気の動静に対応させて因果関係を説こうとする。こうした表現は、意外と全国的に類型的なのである。科学的根拠の有無は、この際問題にならない。生活体験から発した諺であり、それがいつの間にか普及し、

民俗知識として定着してしまつた。しかし体験を踏まえて、天候の判断を予知する行為は、当時のムラ共同体の命運に関わるものであつたから、そうした知恵を發揮できる存在は、きわめて貴重だつた。

江戸時代の「名主日記」をみると、名主の任にあたる者が、たえず気を配つていたことは、天候であり、そしてこれの作柄に及ぼす影響であつた。村内に起こつた諸事を書き留めておくのが、「名主日記」の作られる意図であるが、その大半以上を天気とその異変の情況に費している。雨の降り方、風の吹く方向に細かな配慮がなされており、それが今年の作柄の出来具合にどう影響するかを予想しているのである。

もし悪天つづきだと、大雨の場合には、「日和乞い」とか「陽気祭り」、「天気祭り」などを実施した。一方日照りがつづくと、雨乞いがなされた。日和乞いにして、雨乞いにしても、村の臨時の大き

かりな儀礼であり、村中の共同祈願として盛大に行なわれる。したがつて、村の運営上、臨時の出費がかなりかさむ。その決定が村の限られた少数の者に限られていた。

昭和二年夏、愛知県額田郡山中村で行われた大規模な雨乞いについての顛末記録書が残されている。この村では、明治二十六年以来の干魃に見舞われた。そこで村のあちこちで雨乞いをやつたらどうかという話題が出た。まず十三名の年行司（神社の氏子当番）が集まり、雨乞いの議を定め、これを区長（村長）に申出た。次に区長は公会堂へ、村の運営委員十名を集め、雨乞いを協議した。委員たちは、自分たちの地縁組織であるヤシキに戻り、意見をとりまとめることにして、翌日再度集合、意見多数をもって、雨乞いの実施をきめた。その内容は、七月二十七日より三日間、氏神で、神主による祈禱と、水源の池の清掃がある。その間年行司は神社に籠っている。第二段階で

は、七月三十日より三日間、お籠りを村中を三分して、三昼夜交代して行なう。第三段階では、池の上にある岩の穴に繩を通し、注連となして、今度は僧（真言宗）に祈禱してもらう。この年は第三段階を実施している八月三日午前二時三分より慈雨があつた。「歓喜の声起ル」と記してある。

雨乞いも日和乞いも、日和見の議から実施に到る。その間協議を重ねているが、この村では、年行事の役にあたる神社の祭りの当番たちの発議によつていた。その意見が村中の同意にもとづき、支持を得てはじめて実施可能となる。

実際に降雨があり、日和見の効果の大きかつたことを村人たちは実感で知ることになる。この日和見の原初的なあり方を、ムラに残る民間伝承を通じて再構成することが、現代社会に何か意義をもたらすのではないかと思ひ、いろいろと文献類をあつて調べているのである。

世間は広大であること

村上兵衛

(財)日本文化研究所専務理事／松本重治部会

この一年ちかく、私は、日本の現代史を英文で出版する事に没頭している。

パリ講和条約に出席のため、西園寺公望全権が東京駅頭を出発する光景から、サンフランシスコ条約の締結に至るまで、

『日本、その試練のとき』(The years of Trial 1919—52)というのがその表題で、同じ現代史でも、日本がいちばん困難に遭遇した三十四年間を扱ってみた。

戦後、日本で書かれた日本現代通史は、そう言うては悪いが、いくら読んでみても、日本と世界との関係がよくわからないうつかり読んでいると、なにか日本だけが悪かった、と信じ込まされてしまふところがある。さいきん、日本歴史の研究では(海外では)もつとも進んでいるアメリカの学者たちのものでも、明治までは素晴らしい作品もあるが、右の時代になると、出来がおちるようである。

そんな欠乏感もあって、あの日本の試練の時代を、まず英文の読める、とくに

西欧の読者たちに知って貰おう——というのが、私の出版の動機でもあった。また、見渡したところ、適当な学者が見当たらないところから、僭越ではあるが、みづから原文を執筆することにした。

日本の通史に欠けているひとつの例を挙げれば、たとえば国際連盟が成立するとき、日本がもつとも大切なこととして主張したのは、「人種差別の撤廃」であった。そして委員会においては、十二対五で勝つたにも拘わらず、ウイルソン議長の独裁によって、これは否決された。こういうことは、日本人の書いた歴史には影も形も見えないのである。

そのとき、パリの新聞は、連盟規約にはすこぶる批判的で、「誰が見ても不都合なアメリカのモンロー主義が、国際連盟の規約に堂々と盛られ、誰の眼にも正しい日本の人種差別撤廃案の主張が葬り去られたこと」を、正しく批判した。また、パリの別の新聞は「やがて世界は、

日本の主張に耳を傾けなければならぬときが来るであろう」と予言した。

日本の通史には、このようなことが全く扱われていないのに反して、ウイルソン大統領の「理想主義」が、ながながと述べられているのは何故だろうか？ そして、ウイルソンの矛盾を、もつとも適確に指摘していたのが、オブザーバーとしてパリに赴いた若き近衛文麿だったことは、よく知られている。日本の通史は、なぜ、このような近衛の視点(さらに言えば、近衛の論文を激賞した孫文の視点、すなわちアジアの視点)を、少し書き加えておかないのだろうか？

真珠湾の「だまし討ち」(米人いうところの)についても、同じことが言える。もちろんその攻撃が、結果的にだまし討ちになったことは、ハッキリしておくべきだが、その場合には、同時に、米墨戦争、米西戦争において、アメリカが相手を同じようにだまし討ちしたことを、指摘しておく必要がある。ロシアは、トルコとの戦争で、宣戦布告に先立って、国境を越えて進出した。第二次大戦における、ソ連の条約侵犯はいうまでもない。

まあ、そんなこともアタマにあつて、私は現代のことを書きはじめたのだが、いま、やつと翻訳の仕上げの段階に入つた。このような本を一年間で、執筆、翻訳、出版というような荒仕事なので、翻訳にはアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスの友人たちにぜひぶんお世話になった。

そんなある日、つい先日のことだが、ブラジルの著名な新聞の編集長が訪ねてきた。仕事のことになり「真珠湾」の話になった。私が、この「だまし討ち」やら、戦史の先例などについて語ると、相手は、ニヤリとして言った。「喧嘩するとき、これからおまえを殴ってやるぞ、などとことわって殴る男が、いますかねえ」。私も笑い出し、なるほどアメリカ人は、個人の喧嘩でも、まず口でやりあい、先に手を出したほうが分がわるいところがあるが——そして、世界ではアングロアメリカ法が優先しているために、それが国際間の常識であり、それに触れるとアンフェアに見られ勝ちだが、ラテン系の人たちは、そんな細かいことにはこだわらないのだ、ということをおぼろげに知った。と同時に、それは彼の反米感情の表れてもあつたのだろう。西鶴の言葉ではないが、「まことに世間というものは広大である」と、私はつくづくと悟つたことである。

部会メンバー
アンケート回答

迷路と私

6

迷路の本

11

対談
鈴木義司
天地総子

迷路の楽しさ

12

宮本千晴

白紙の迷路とクモの巣の迷路

17

巖谷國士

町そして迷路

18

対談
野口 廣
前田 愛

迷路と思考

21

関 三平

私の迷凶

26

カラーグラビア

ゆきずりの迷路

29

迷凶

33

対談
川添 登
坂根巖夫

現代と迷路

34

用語でみる動き

40

サダト後の中東——特別寄稿

今井隆吉 44

正親見一氏に聞く——特別インタビュー

48

天然ガス価格と石油価格 日本エネルギー経済研究所 50

新しい農村像を求めて 政策科学研究所 52

21世紀コラム

日本の技術
の推進

稲葉秀三

1

趣味的人間

佐賀和光

2

日和見に
ついて

宮田 登

3

世間は広大
であること

村上兵衛

4

インタビュー

大山のぶ代、砂川啓介夫妻

54

部会報告

56

2001年文庫

『作者の家』
『論語』

57

私の近況

高原須美子
中村隆英
中村 貢

58

21世紀フォーラム部会メンバー

60

●部会メンバー「迷路」アンケート回答

特集 迷路	迷		私	
		路	と	

- ① 迷路パズルをなさった経験は?
- ② 迷路の面白さはどこにあるとお考えですか?
- ③ この種の知的遊戯についてどうお考えですか
- ④ その他、どのような知的遊戯にご興味がありますか

① パズルという言葉は私はずっと前からありますが、二十世紀の初頭まで、世界も日本も非常に大きな変化を、政治的、経済的、社会的、文化的にしていくのではないかと思っています。それがカギになるのは、世界についていえば、「国際政治がどうなるか」「エネルギーがどうなるか」「技術革新、たとえばコンピュータによる影響がどうなるか」「自由陣営と共産主義陣営と第三世界の関係がどう変わっていくか」などであり、日



稲葉秀二さん

勲産業研究所理事長 茅誠司部会

② 面白さと同時に、苦しさ深刻さをあわせていると考えます。小生としてはこの関連を多く、パズルを多くことに熱意をもっています。しかしこれは経済本位でもない、社会本位でもない、政治だけでなく、また文化だけでもない。これらをあわせたとき方、そのための前提の整理がいろいろと考えています。

③ さいきんの若い人たちは、子供の間にはミニコンをつかっただけの知的遊戯が流行しています。私はコンピュータ技術が発展しますと、恐らく二十年先位には、

本号では、特集企画として「迷路」をとり上げました。

そこで、この単純なパズルとしての「迷路」について、二十一世紀フォーラムの方々が、どのようにこれをとらえ、イメージを

ふくらませていただけるか、アンケートをさせていただきました。

ご回答をいただきましたのは、つぎの十七氏の方々です。

(順不同)

本についていえば、これからの二十年は今までの高度成長期とちがって、多元的な社会の意思決定の時代、これがどうなるか、「低成長がどういう形で社会や文化に影響を与えるのか」。さらには、「技術開発、とくに日本の技術の開発がどうなっていくのか」などです。私は、こういう多元性をどのようにならべ、それをどう解いていくかが、次の日本の運命を決定する。この意味でこの二十〜三十年が非常に大切な時とと思っています。



尾関通允さん

上述した問題をもっと迅速、正確にとくような時代が、日本にも世界にもくると思っています。しかしそのような時になっても不可解、不可知というものは存在するものです。

④ 最大の知的遊戯は以上のことで、そこにいたる部分的な遊戯、問題設定は無数にあります。

著述業／自由学園講師―茅誠司部会

① 毎週日曜日の東京新聞日曜版には、迷路の問題が載っています。日曜日は一日中ゆつたりと過ごすことにしておりまして、朝からこの種の頭の遊びをよくいたします。

② 一種の知的ゲームですが、偶然の影響ですぐ解けるとときもあり、そうでないときもあり、つまり試行錯誤を繰り返すうちに必ず出口へ至ることができるとも、もともと調子の悪いときは、出口から出口へ逆行して通路を探します。こうすると早く解けます。ときに応じてそういう便法を使えるのも面白さの一つといえるでしょう。

③ たまにはいいな、という程度です。

④ 一般ではありませんが、新聞記事の中から各種の誤りを見付け出すことが、私にとつての格好の知的ゲームになっています。



加藤秀俊さん

学習院大学法学部教授―加藤秀俊部会

① あります。アメリカで長路離列車にのつたとき、駅の売店で「迷路パズル集」を買い、ヒマつぶしをしました。

② パズルとしての迷路は、わたしにはあまりおもしろくありませんでした。しかし、生きているということは、それじたい迷路です。

つまり、あちこちで行きどまりになったり、戻り道がわからなくなったり。だから、ひとつの世界観、人生観を迷路は教えてくれます。

③ べつにどうということはありません。要するにヒマつぶしなので。 「知的」というならクロスワードのほうがずっと知的です。

④ 質問③で答えてしまいましたが、クロスワード、それにスクランブルゲーム。



大来佐武郎さん

① ありません。

② 意見なし。

③ とくにありませんが、頭の運動になるかも知れません。

④ とくにありません。



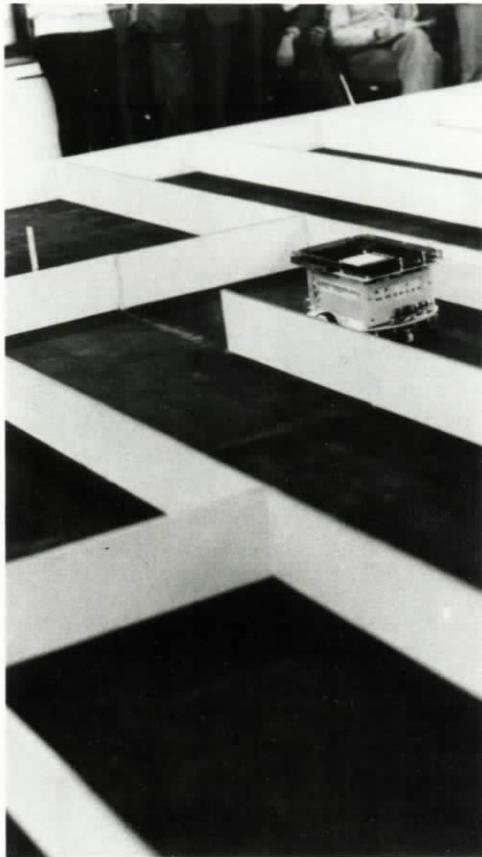
木元教子さん

放送キャスター―茅誠司部会

① 小さい時は遊園地の迷路（不思議の国のアリスのような）。長じてからは、紙上の「出口さがし」（よく週刊誌などに掲載されている）。その他、「クロスワードパズル」「マイクロ・マウス迷路ぬけ」など。

② さまざまな思考をめぐらして、計算しつくしての結論による結果が、その予測どおりにならない面白さと、口惜しさ。その口惜しさが、また新たな意欲をかき立てます。思い通りにならず「コンチクショー」と、チャレンジごころを刺激され、試行錯誤を繰り返す過程が、実は一番面白いのかも知れません。

内外政策研究会会長／旧日本経済研究センター理事・顧問―大来佐武郎部会



▼マイコンロマウス大会で迷路を自走するロボット



金森久雄さん

③ 正解はひとつにしても、自分の中の可能性、創造力、知識力、根気がそこに反映するし、思考の道筋の自己による確証があり、たかが知的遊戯と言えぬ深さがあると思うのですが。

④ 推理小説の犯人さがし。ルービックキューブの色あわせの手順。「頭の体操」的、クイズ、などなど。

① 新聞、雑誌などに載っているものを、

評論家||茅誠司部会



五代利矢子さん

(社)日本経済研究センター理事長
||茅誠司部会

① 子供のころやったことがあります。

② 面白いとは思いません。

③ なし。

④ 詰碁、詰将棋。



富田純孝さん

気がむくとたまにやります。

② 出口をみつけること。

③ 気分転換、リフレッシュ、トライしてみる面白さ。

④ 「ゲームの本」など買い込んであれこれ楽しんでみえますが、時間のかかるものは結局やれません。知的かどうかは疑問ですが、トランプ、花札、などなど、コリントゲーム、マージャン何でも好きですし、パズルの本なども時々買い込む方です。

NHKディレクター||加藤芳郎部会

① ラリー・エバンスの迷路集をいろいろ持っています。

② 集中できます。エバンスの精緻な絵が好きです。

③ 未来があつて(迷路は出口があるのはたしかですから)抑圧に耐えながら、可能性を求めて進む、快感があります。

④ 寄せ木細工(パズル)、マイコンを使

った遊びにも興味があります。



林雄二郎さん

(勸)未来工学研究所副理事長
||大来佐武郎部会

① よくやります。

② 孫とのコミュニケーションの tool として極めて効果的。

③ むずかしいことは考えない。

④ 特にきまっていない。



伏見康治さん

名古屋大学・大阪大学名誉教授

／日本学術会議会長＝茅誠司部会

- ① 余りない。
- ② 余り面白くない。
- ③ 余り知的でないと思う。クロスワードパズルの方が知的？

坪内ミキ子さん



俳優＝加藤芳郎部会

- ① 最近ハマったくしていませんし、目にしたこともありませんが、学生の頃はよくあそびました。ほとんど、雑誌、新聞の中についているものであったと記憶しています。
- ② 好んで「困難」を求めなくてもよさそうなのですが、果たして自分はストリートで脱出できるか、何回ぐらい迷うか、大袈裟に言えば己の能力を試し、チャレンジしてみたくなる魅力があるのだと思います。
- ③ 占い、運勢の類など、答えが与えられているものを見るよりも、例えば、四字成句の穴うめとか、あなたはどれだけ

書けますか？というような漢字の書きとりとかを、ちょっとかじってみたくなら、そんな興味はいつまでも失いたくないと思います。

④ クロスワードパズル。連想ゲーム（？）などなど。

書けますか？というような漢字の書きとりとかを、ちょっとかじってみたくなら、そんな興味はいつまでも失いたくないと思います。

- ① ときどき、孫娘を相手に、クロス・ウォーズパズルをやることはありますが、だいたい解けるので、たいした迷路ではありません。しかし、グローバルに考えると、米ソ両大國間の核軍備増強の競争は、人類を一つの迷路に誘い込んでいるようです。誰もこの迷路から、抜け出ているものはありません。核軍備の軍縮だけが唯一の出口になると信じますが、それらの正気の政治は意思が、なかなか十分に強くなるとは思えません。深刻に考える人間が少なく、単独の業務を追求して、考えない人があまりに多い。

松本重治さん



勸国際文化会館理事長＝松本重治部会

近畿日本ツーリスト(株)日本観光文化研究所所員＝加藤秀俊部会

- ① あります。ただし雑誌や一、二のパズルの本でやった程度で、特に関心を持ってやったわけはありません。
- ② 全体を見通せないハツカネズミの立場でやるのと、紙に印刷されたものを、上から見ながらやるのとでは、まったく印象が違い、頭の働き方も判断に要する能力も違うでしょう。現実の迷路は何ら楽しむ余裕もなく、必死で全体像を想定

② 人類的迷路は、面白さなどというより、あまりに深刻であります。知的遊戯というには至らない。従って、質問③については、お答えできないことです。編集者のお考えと私との考えには、ずれがあると思いますので、「没」にして下さって結構です。

- ③ なし。
- ④ なし。

宮本千晴さん



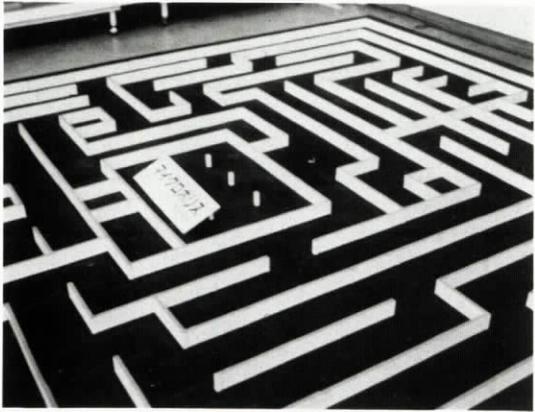
近畿日本ツーリスト(株)日本観光文化研究所所員＝加藤秀俊部会

① あります。ただし雑誌や一、二のパズルの本でやった程度で、特に関心を持ってやったわけはありません。

② 全体を見通せないハツカネズミの立場でやるのと、紙に印刷されたものを、上から見ながらやるのとでは、まったく印象が違い、頭の働き方も判断に要する能力も違うでしょう。現実の迷路は何ら楽しむ余裕もなく、必死で全体像を想定

してみながら、思いきって賭けることの連続になるわけですが、パズルの方は、やれるのがわかっていて確かめるだけで、さほど面白いとも思いません。要するにゲームとしてフェアでない面をもっているからです。

- ③ 大いに結構なことだとは思いますが、現実の諸問題を、単純化したゲームに置きかえ、なぞらえることで、問題を把握しやすくする効果もたしかにあります。しかし、中谷宇吉郎先生もおっしゃったように、「現実と不完全な理論は一致しない」もので、パズルはその不完全な理論ですから、「遊び」に徹底しないと危険です。
- ④ とくにありません。ただし、与えられれば楽しめますが、どうやらあまり複雑なルールにもとづいた、ゲームの度合



▶ ロボット大会に出品されたマイクロマウスの迷路

の強いものは苦手なようです。そしてむしろ、知的遊戯と肉體遊戯の結びついた、また失敗の代償のはっきりした、たとえばルートを自分で探しながら、知らない岩壁を登るようなパズルの方に夢中になります。

村田 浩さん



- 日本原子力研究所顧問 茅誠司部会
 ① 中学生のころ、一時盛んにやったことがありますが、いまは全然。
 ② 迷路の作者と、これをたどる者との間の推理くらべということでしょうか。
 この意味で推理小説に似ていると思います。
 ③ なんとなく余裕がなくなってきたのと、それよりも少し面倒くさいという気持ちの方が先に立って手をふれていません。
 ④ せいぜいちエの輪ぐらいでしょうか。

村上兵衛さん



- （財）日本文化研究所専務理事
 〓 松本重治部会
 ① 週刊誌などに載っているものを。
 ② 暇つぶし。
 ③ とくになし。
 ④ なし。

ロミ山田さん



- 歌手／俳優 加藤芳郎部会
 ① そのケースという意味が分かりません。いろいろな種類のパズルは昔やりま

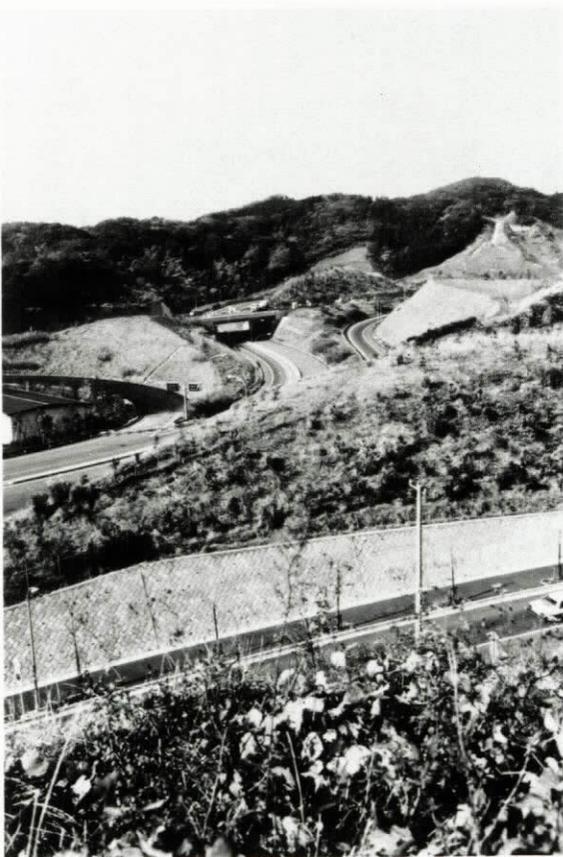
た。主にクロスワードパズルです。

- ② 四苦八苦しながら、正しい道を探していることです。
 ③ 頭の回転を早くするのにいいと思う。
 ④ オセロ、麻雀（これは知的とはいわないのかな）。

向坊 隆さん



- 原子力委員会委員長代理・前東京大学
 総長 〓 21世紀フォーラム発起人
 ① ありません。
 ② 興味ありません。
 ③ 興味ありません。暇も余りないし、暇なときは本を読むか、クラシックを聞くか、興味ある番組があればテレビを見ます。



迷路の本

■迷路の世界旅行 リック&グローリー
ブライトフィールド著/岸田孝一
孝一訳 TBSブリタニカ 1000円



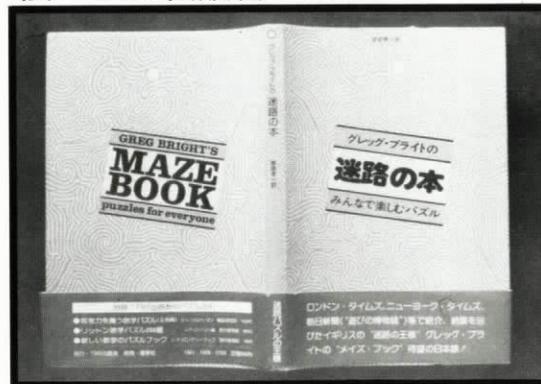
■迷図<MAZES>1 ウラディミール・コズィアキン著/岸田孝一
孝一訳 TBS出版会 680円



■ポケット迷路パズル ウラディミール・コズィアキン著/岸田孝一
孝一訳 TBS出版会 480円



■グレッグ・ブライトの迷路の本
グレッグ・ブライト著/岸田孝一
孝一訳 TBS出版会 900円



■グレッグ・ブライトの穴あき迷路の本
グレッグ・ブライト著/岸田孝一
孝一訳 TBS出版会 980円



■迷路のパズルNo.1 バーナード・マイヤーズ著/大久保エマ
エマ訳 学社 760円



特集		
迷路		
		迷路
楽の	の	路
しみ		
		対談

人生そのもの！粘り強い人が勝ち

鈴木 価値観が混乱してくると。こうした「迷路パズル」のようなものが流行ってくるんですって。

天地 そう、そう。私もそれは、とても感じます。いまの地球って、宇宙の迷路に迷い込んだ感じがするのね。なにか、もう爛熟の極にたっしてしまっって、あとは衰退をまつのみといった気がするんですけど……。それで「迷路」がウケるのかなあ。

漫画家=加藤芳郎部会

	鈴木	義司	
天地	総子		

歌手/タレント=加藤芳郎部会

鈴木 アダルト・ゲームコーナーというのがデパートにあっって、「知恵の輪」からマイコンを使ったゲームまで何でもそろっている。

ぼくのアシスタント兼秘書が二十代の娘さんでね。若いから時代に敏感で、いろいろと買っ込んでくるんですよ。一番流行ったというのが、イギリス人が考え出して世界のパズルコンクールで優勝したという商品。相手が隠して並べた色々な旗の列を、推理しながら同じ順に並べていくんです。ちよっつと「迷路」風でもある——。これ、夢中になるとイライラしてくる。ものすごく頭を使うわけ。

天地 私、体を使うことは好きだけど、頭を使うのは大嫌いなんですね——。根気が無いんですよ。この対談に備えて、あらためて

「迷路パズル」の本に挑戦したんですが、何度やっても、行きつ戻りつ行きつ戻りつ……。「さっきあそこまで行っただじやないか、頭悪いなあ」って、だんだん自己嫌悪に陥っっていくわけね、「こういうのは、やはり才能のある人にはかなわなんじやないか」と思っだしたりして……。でも、待てよ、これは才能じやない」と……。

鈴木 ハハハハ。

天地 才能じやなくて、あくまで粘り強い

人の勝ちだということが判ったわけね。というの、私は人生においても本当に粘り強さが無いんですよ。人生そのものが「迷路」なんです。その岐路に立たされたとき、右か左か？「エイッ、右！」と自分では希望と冒険心みたいなものをもって行くわけでしょう。ところが、すぐ壁にぶち当たっって、アイタタッて、また戻っって、また行く。その繰り返っしてしよう。ですから、ゴツンとぶつかっって、そこでダメになっっちゃうようじやいけなし……。すこごと振り出しに戻ったり、行ったり来ったりしている自分をみているよう、どうなんが複雑な気持……（笑）。

鈴木 結局、そこが面白いわけですよ。オレはダメなんじやないかな、推理力がないんじやないかなと悲観していると、たまーにスツといくときもある。

天地 そうです。人生でもラッキーな人いますものね。

鈴木 そう、ルービック・キューブでもなんでもそうですよ。ぼくらは絶対に一面か二面しか出来ないのに、小学生でも出来るわけね。つまり、こうしたゲームは教養とか学歴には関係ない。

天地 そうそう。それが言いたいの（笑）。

鈴木 そう、そういう良さがあるんです。強い奴

遊園地の植込み迷路の思い出

は、タダやたらに強い。これが碁や将棋だったらルール知らなきゃ出来ないでしょ。ところが「迷路」とかインベーダーゲームは、小学生だろうが大学生だろうが、おじいちゃんだろうが関係ないわけよね。すべて平等なんだ。

天地 だから楽しいんでしょうね。

鈴木 だからまた、流行る。ところで「迷路」といえば、ぼくが子供のころ、遊園地に植込みで出来た迷路があったんですよ。子供だから背が低いでしょう。青空しか見えない緑の壁の中を、あっち行ったりこっち行ったりしてね。

天地 面白いですね。

鈴木 そういう記憶があって、数年前にパートの催し場に大がかりな迷路を作ったことがあるんです。ゴールデンウィークに、なにかショッキングなことをやってくれと、デパートから漫画集団にいつてきた。それで、ぼくがディレクター。

鈴木 そう、お祭り大好き(笑い)。ショッキングという注文なんで、じゃ、大地震が起

きたらどうなるかというのを漫画チックにやろうとなったわけです。たとえばパンでヘルメットを作ったり、スルメで背広を作ったり、お米で長靴を作ったり。

天地 ワア、楽しい。

鈴木 そのとき、メインで迷路をやったんですよ。災害のときにどうやって逃げるか……

天地 なるほど。

鈴木 入口に、電気がピカピカして火が燃えているみたいにして「大地震だ！ あなたは逃げられるか」と書いてあるわけです。そこへ飛び込むんですね。そうすると岐れ道があつて、「あなたはラーメンと日本そばとどっちが好きか」というので、日本そばのほうへ行くでしょう。と「あなたは太った女と痩せた女とどっちが好きか」というんで、またどっちか行くわけですね。

天地 何か占いにあつたような気がする。

鈴木 ええ、それと同じです。次々に選択していつて出口が四つぐらいある。そこにカードがあつて「あなたは災害のときにどうであらう。あなたの性格はこうであらう」と……。でたらめなんですけれども。

天地 かなり大がかりですね。

鈴木 結構ウケて、「もう一回やろう」なんて、二度も三度も入って行く人もいた。

アンデスで「天国の門」に迷う

天地 心理学者のどなたかがおっしゃって

いたんですが、人間というのは、放っておくと、おおかたの人が悪い方へ悪い方へと流されていくそうです。ですから、そんな怪しげな迷路みたいなものに惹かれて、取り憑かれたみたいにフラフラと入り込んでしまふんじゃないかしら。ところで迷路体験といえは、以前南米に取材旅行に行ったときの印象が強烈です。リマからアンデスを越えてまた戻ってくるキヤラバン組んでの一月ばかりの行程なんですけど、行けども行けども砂漠、山また山。インディオが経営しているレストランがポツン、ポツンとあるんですけど、これが汚いなんていうもんじゃない。ハエの中にスープが入ってくるわけね。

鈴木 ハエの中にスープ???

天地 あ、ごめん。スープの中にハエが入ってくるんです(笑い)。

鈴木 いいです。いいです。ハエの中にスープのほうを感じが出て(笑い)。

天地 そんなひどい旅なんで、二十日目ぐらいには、もう皆殺気立っちゃってる。あと三日ほどでリマにたどりつくという夜なんです

すが、十二時前には目的のホテルに着くとい



うので真っ暗な夜道をひたすら突っ走っていた。やがてバツと見えたのが「天国の門」というんだそうですけど、山の合間からの異様な輝き。「アツ、見えたア！ もうこれで大丈夫」といつていたら、行けども行けども着かないで、そのうち見えなくなっちゃうの。もう、ひもじいし、疲れているし、私や同行の真木洋子さんなど、女どもは半べそ。

鈴木 判るわ。それ。

天地 道間違えたかと地図を見ると、その道しかない。「あれだッ」といつてから、延々四、五時間走ってやっと着いたんです。なかなか辿り着かないから「天国の門」。曰く因縁つきの有名な場所だったんですけど。あのときのつらさっていうのは、もう本当に……。

逃げ道の動物的感 覚なら馬以上？

鈴木 リマといえば、「迷路」じゃないけれど、漫画集団のグループで旅行したとき、一人でホテルに残っていてクーデターが起こっちゃった。皆の安否は判らないし、言葉も通じない、金も無いで、ずいぶん心細い思いをしましたよ。ホテルから二百メートルほどの場所でも千人も殺されたんだって。

天地 恐いんですね。

鈴木 恐いですよ。でも、自分の所に弾が飛んでくるわけじゃないですから……。ぼくは戦時中、川崎に住んでいたんですが、空襲のほう怖かった。空襲はそれこそ迷路です。どっちに逃げるかっていう。

天地 ああ、本当にそうですね。

鈴木 おおせい逃げるほうに逃げるんですよ。

天地 ええ、群集心理としてね。

鈴木 多湖輝さんにその話をしたら、それ

が一番いけないやり方だといわれた。いけないうたって、皆が左に行くのに右に行くバカはいないよ。だって右は火がボオボオ燃えているんだもの(笑)。それがね。一キロほど一団となり逃げてから二手に分かれちゃった。どの方向も安全度は同じくらいだったんですよ。ところが分れて二、三分後、右へ行った人達には爆弾が落ちてしまった。それで三十人ほど死んだんです。

天地 まさに岐路。そこで運・不運が出てくるわけですね。

鈴木 ぼくがどうして左へ逃げたかという目につくわけね。だから一緒に逃げた。別に馬が逃げるからいいと思っただけじゃないんだって……。

天地 でも、動物の本能的なカンというのがあるかもしれない。

鈴木 いや、動物的なカンといえば、ぼくのほうがあったわけ(笑)。その次の岐れ道で馬は左へ、ぼくは右へ行った。あくる日行ってみたら馬は焼け死んでましたよ。

ところで、話を「迷路」パズルに戻すと、これ、うんと閑じゃなきゃ駄目ですよ。ちよつとの閑じゃ駄目です。それに積極性が必要なのよ。……ま、遊びっていうのはすべてそれだけ。



迷路パズルは無人島向き

鈴木 でも、やっている間はすべてを忘れちゃう。そこが魅力なのかなあ。

天地 確かにそうですね。どっしりと腰据えてかからなくちゃ出来ない。いざ、こい、という……(笑)。で、途中で電話がかかってきたりすると冷めちゃうんです。家に居ると、どうしても雑用が多いでしょう。だから「迷路」パズルの本を一冊持って、図書館とか、どこかへ行つて……。

鈴木 無人島に行くとかね(笑)。

天地 それに、閑というか、自分の時間があつたとしても、そこでこれ以上に悪い頭を使つたら、もう大変(笑)。

天地 それとやはり、迷路の催眠性でしょうね。あまり複雑なのを見ると、作つた人の頭がおかしいんじゃないかと思うのよね。見ているだけで目が回ってきちゃう。エッシャーの絵って迷路に近いでしょう。この人も、どうも普通じゃないんじゃないかという……。ですから、むしろ作る側の人間を探究してみたいとか、何かそちらのほうに興味が出てきたりしますね。

鈴木 ぼく、いま「お笑いマンガ道場」って番組をレギュラーでやっているんですが、中学生のファンが「お笑いマンガ道場」って

つまりは人間不信のゲームである

字を使って量一枚ぐらいの大きな迷路を作ってきた。でも、レギュラーが誰もその迷路をやらないですわ。見ただけでうんざりして。

天地 だいたい、こういうのに夢中になるタイプと、そうじゃないタイプとに分かれると思いませんか？ こういうギャーと混み入ったものが好きで、どんどんもつれもつれて、入り込んでいく人と、拒否反応を示す人と……。

鈴木 ぼくはあまり好きじゃないね。あなたも好きじゃないでしょ。

天地 好きじゃない。

鈴木 判るわ(笑い)。ところで、ボナンザグラムっていうんですか、タテ、ヨコに文字を入れていくのがありますね。迷路とは関係ないかもしれないが、イギリスで盛んだそうです。なぜかという、イギリスには明治時代の漢語みたいなものがいっぱいあって、たとえば「戦争に反対する」とはいわない。

つまり、難しい単語を覚えるために、そうしたパズルが盛んなんだというんです。難しい言葉がたくさん知っている人が紳士淑女なんです。人間は非生産的なことをやるのが好きです。え。

天地 列車の中とかなかで夢中になって

やっていますよ。遊びの精神というか……。

鈴木 ぼくもあなたも非生産的な職業だけども。なきやないでいいんだから(笑い)。

天地 そうです。毎日がそうだから、もうほんとに……(笑い)。でも日本人が「迷路」好きとはあまり聞きません。私なんか最初のうちはトレーシング・ペーパー。当ててちゃんとするんですが、そのうち面倒くさくなつちやう。

鈴木 要するに作った人との戦いなんです。意地悪に考えていけばいいわけ。つまり、人間不信のゲームなんだ。これは。

天地 ホホホ……、素直に行つたらすぐに落とし穴に落ちる。そうすると「迷路」パズルは精神の一つの……、何というか、強くなるためのトレーニング。それと抜け出したときの爽快感ですね。山の頂をきわめたような。

鈴木 だから「迷路」パズルをやるときは、作った人が必ずイメージにあるわけね。

天地 ええ。

鈴木 じゃあ、「迷路」パズル集には、必ず作った人の写真を載せるべきだ。やはり、相手の顔を見て勝負しなくちゃあ。

天地 そうですね(笑い)。

東京の地下鉄は最高級の迷路です

鈴木 実は、ぼくもこうした「迷路」を作ったことがあるんですよ。まだ漫画が売れない二十代のころなんです。地方新聞のクイズで毎週「迷路」をやった。辿って行きますと「鉢巻をしたタコは強いタコで戻れ」とか、「鉢巻をしてないタコは弱いから通過できる」とかね。そしたら評判いいんですよ。その鉢巻タコが(笑い)。

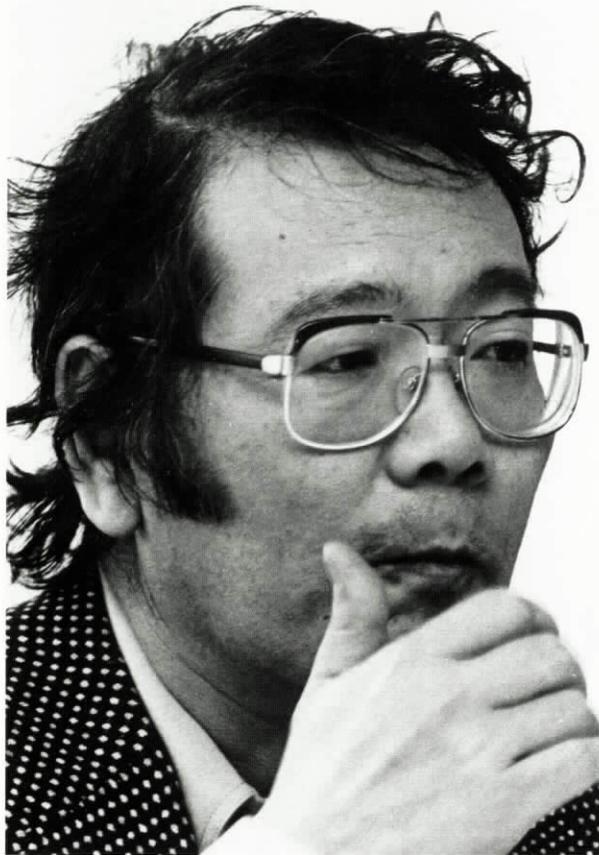
天地 やっぱ、意地悪く意地悪くお作りになったのね。

鈴木 そう。常識ではこう行くだらうなというところには、その鉢巻タコがひかえている。

天地 そうは問屋がおろさないぞ、とばかり、先生のストレス解消になったんじゃないですか(笑い)。

鈴木 しかし、こうした非生産的なパズルが話題になるというのは、人間というのは皆、頭を使いたがっているんですね。少なくとも使いたいという欲望はあると思う。それも、遊びで使いたいという。

天地 使い分けてね。仕事に使う頭と、遊びで使うのと……。でも、人間の脳は使えば使うほどよくなるって言うでしょう。自分ではフルに使ったつもりでも、ほんの一部分しか使っていないから、こうしたパズルをやると、少しはよくなる(笑い)。



鈴木義司

鈴木 普段は使っていない脳の部分を使っているんですかね。普段、道を歩いていたら迷路にはぶつからないでしょう。アデスの天国の門“みたいなのは日本には無い。”

天地 ええ、無いですね。

鈴木 でも、東京の地下鉄を作った人は、迷路を作る才能のある人ですよ。あれは難しい。ぼくは、どうしても判らなくて、地上に出てタクシーに乗ったことがある。黄色や赤の輪っかが出てるのね。で、名前がみんな似てるのよ。丸の内線とか千代田線とかいったって、丸の内と千代田は、ぼくは同じものです。キザなことをいうようですが、ぼくは、ロンドンだってパリだって、番地さえ判れば地下鉄で行けるんだけど。

楽しむ境地までには月謝がかかる

天地 結局、後から継ぎ足し継ぎ足しをしてあいうことになっちゃったんでしょうね。デパートもロード方式、つまり歩きながらショッピングできるのと、迷路方式がありますよね。それと、観光地のホテル等はまったく迷路方式で、自分の部屋にたどりつくのに大騒ぎだったりして……。ところで地図ごらんになるの得意ですか？

鈴木 初めての土地に行ったら、まず一番

高い所へ登っちゃうのが一番いいんです。山の上とかビルの上とかね。それが一番判るんです。

天地 そおんな前近代的な……。笑い。私は地図見て「どっち？」って言われても、右か左かっていうのは、いまだに迷うんですよ。それで「迷路」パズルをやるんだから、もう最高のイライラ。迷路を楽しむといった境地に達するには、もうちょっと、お月謝を払ったほうがいいみたい。

鈴木 ぼくは途中で投げちゃうほうだなあ、イライラが楽しくなってくるというんだから、これは一種の自虐趣味じゃないですか。日本じゃ新聞が毎日何百部も売れるでしょう。ぼくは、あれも自虐趣味で読んでるんじゃないかなと思う。新聞読んで、「ああ、今日一日は楽しいな」って人、いないですよ。いやな事件ばかり出ているんですから。

天地 いいことは、たまりに小さくしか出ていない。それでも読まずにはいられないというわけね。

鈴木 そう、読まずにはいられない。もう中毒ですね。イライラ中毒。ちよつと単細胞的発想かもしれないが、イライラしたいって気持が、人間にはすぐくあるんじゃないかと、ぼくは思うんですよ。

天地 ……(笑い)。

鈴木 たとえばゴルフなんて、あれはイライラするためにやる(笑い)。ゴルフ場なんて、広々とした野原で自然環境のいいところですよ。本当ならあそこで、歌うたって踊って、

酒飲んで弁当食ってりや一番いいのに、わざわざあそこで、バーが取れないとか、スリーバットしたとかイライラしている。

教訓の書？ 頭のジヨギング？

天地 「迷路」パズルなんかは、イライラしてやりながらも、面白いというか、いろいろな思いをするわけね。「チキシヨウ」と思ったり、「今度こそ……」とか「その手には乗らないぞ」なんて思いながらね。で、またグーンとぶつかって……。これやはり、本当に根気のある人の勝ちですね。ですから私は才能じゃないということ強調したいわけなのよ。

結局イライラを楽しみながら、なおかつ粘り強い人が勝ち。やっていて、自分がいかに根気がないか判るし、人生これからもうちよつと粘り強いかなきやいけないんじゃないかって……。

鈴木 教訓ですか。

天地 教訓です。

鈴木 教訓の書かね。迷路パズルの本は(笑い)。

天地 実際は、そうなんです(笑い)。
鈴木 そのイライラで頭が鍛えられることは事実でしょうね。第一、チンパンジーにはこれは出来ないもの。

天地 私、勝負事に対する闘争心がないんですが、これは一人の遊びですよ。自分との戦い。

鈴木 ジヨギングじゃないかな、これは頭。毎日続けていけば、頭の足腰が丈夫になるんじゃないですか。

天地 一日一ページでもやると、少しは効いてくるかな。息切れしなくなるように頑張らしましょう(笑い)。

鈴木 だから、三千メートル走るところを五百メートルで投げちゃうのが、ぼくだの天地さんだと思っの。そして一日しかやらないのが、ぼくと天地さんのような気がする。

天地 ハハハ、三日坊主じゃしょうがないですね。

ク	モ	の	白
モ	の	紙	の
の	巢	の	迷
迷	路	の	迷
路	と		

特集
迷路

宮本千晴

近畿日本ツーリスト㈱日本観光文化研究所所員

迷路と聞いて私が反射的に思い出すのは、自分自身が現実の迷路の中で不安におびえたいくつかの場面であり、そのときの緊張感である。

中でも強い印象となつて残っているのは、海のような薄暮と闇の大地を前に、手も足も出せぬまま半年を無為に過した敗退の思い出である。太陽も、磁石も、ビーコン用のラジオも地図さえも封じられて、そのとき空間は文字通り迷路であつた。

エスキモー猟師たちはこの迷路をなんなくこなした。ドラム缶を積んだ長いソリを引き、低温と過酷な使い方のためにトラブルの絶えないスノーモビルを馳つて、二、三人で組んでそれぞれ得意とする獵場に出かけていく。途中に五〇から一〇〇くらいの銀ギツネのワナをかけながら、近くても片道一〇〇キロ、遠ければ二〇〇キロを越す旅である。短い薄暮の昼と長い闇の夜の季節になつても、極低温とブリザードの交叉する季節になつてもそれは続いた。

カナダ北極圏のヒクトリア島は、秋でさえ海のような土地だつた。それがいまは暗灰色

の外洋を小舟で航海しているというのが一番びつたりした表現になつた。それもすぐに闇に沈んで、ヘッドライトの照らすわずかな雪面の他には、星と極光くらいしか見えるものはない。私が運転をすると、いつの間にかリングワングに陥つてしまう。エスキモーのナビゲーションのノウハウを学ぶことが、私たちの迷路を解く重要な力ギとなつた。

まず、自分がどんな土地にいるかの把握である。私でもしばらくすると、ソリのすべる感触だけで、いま湖面を走っているのか、陸地なのか、あるいは丘状のふくらみの上か、谷状の凹地なのかの区別がついてくるようになった。エスキモーたちは同じ手がかりをもとに、今どこにいるかを指摘する。昼間でも彼らは私には見分けられないようなこまかな雪状や地形の特徴をよく見分け、いわば風景としても丹念に記憶していくが、同時にその分布にも敏感で、頭の中に地図を組み立てながら走っているのではないかと思う。

事実、彼らに地図を見せると、地図になじみのないはずの老人たちでも、即座に自分のいる位置や、通つてきたコースを割り出して

みせることが多い。もうひとつのポイントは、このとりとめもなく広がる氷原の上で、つねに方位という座標軸を持つていることだ。

残念ながら私がそれを学んだのは、行方不明になつた仲間たちの捜索で走りまわつた翌々年のことである。ある日私は一人ではじめの地域を捜索しているとき、自分のトレースさえ見えない濃霧の前線に追いつかれた。懸命に風向きを記憶をたよりに方向をきめて見覚えのあるところに戻れたが、エスキモーの連れが霧の中を全速力で探しにきてくれなかつたら、キャンプに戻るのに大変な苦勞をしただろう。

彼は私が脱出した方法をたずね、変りやすい風ではなく、サストウルギを磁石として使えと教えてくれた。サストウルギというのは冬の卓越風の風向にそつて刻まれる雪の波である。ブリザード毎にできたり消えたりするし、地形によつても向きは振れるが、この波を切るスノーモビルやソリの角度の感覚を頼りにすれば、昼でも夜でも、霧の中でも大体の方向は維持できる。

その上で方向ごとに走つた距離を常に意識する。要するに常に測量しながら走っているのだ。大洋の航海者たちの感覚なのである。私はこのとき、霧の中で通過した凍つた湖沼群を地図の上で探すのに、湖上を横断した距離の長短と、その連なりのリズムをあてはめて見つけるといふ方法も教わつた。

遭難した仲間の一人は、エスキモーの子供の数学的概念の形成のされかたを調べたいと望んでいた。もし彼にその時間が与えられていたら、おそらくみごとなほどユークリッド

幾何学的に訓練された頭のつくりに気づいただろう。

私はエスキモーと地図を見ながら、彼とまつたく対称的な頭をもつた人たちのことを思い出していた。ヒマラヤのただ中に住む、これまた優れた旅行者であるシエルバやボテのことである。そのとき私たちは国境付近の山々や谷の地図をまつたく新しく書き変えていた。私たちの行けない背後の地形や道のつながりについて、懸命に説明してくれる彼らの話は結局ほとんど役に立たなかつた。その理由はただ一つ、彼らの地理のイメージが、何の次には何があるという、まるでトンネルの中のような徹底した一次元の世界であつて、しかも距離が時間でしか記憶されていなくなつたからである。ヒマラヤのような土地では、同じ時間に歩ける距離は、地形によつて三倍やそこらは楽に変わる。彼らは概念図を描くことができなかつた。やつと彼らの話を組み立てて描いたスケッチは、まさにトポグラフィ（位相幾何学）のテキストの挿絵であつた。

エスキモーの迷路は、無限に広いまつ白な紙の上の迷路であつた。ところがヒマラヤの山地民の迷路は糸をたどる他でできないクモの巣の迷路で、座標軸は何の意味もない。ただ線のつながり方に迷うのである。実際その後私は仲間からおくられて歩いていて吊橋を一つ渡りそこなつたために、空つ腹をかかえて二日ほど一人で歩くはめになつた。遠く対岸の山腹には、その間しばしば仲間たちの姿が見えていた。

町

そして

迷路

特集 迷路

江戸という町がもともと迷路に富んでいたことはよく知られている。関ヶ原以来、江戸城本丸を中心として、多くの台地にはさまれた谷や川や沼を生かしつつ、大規模な土木工事によって渦巻状に堀をひろげ、それに沿って町々をかたちづくってきたこの都市は、はじめから渦巻状に発展する運命をもち、明治維新以後も、いや今日でも、いっこうにその運命を脱していないかに見える。渦巻とはそれ自体が迷路だと思えるものだが、さらに意図した複雑さをいたるところに配しながら、単なる幾何学図形を超えて謎性にまで達して

しまったのが江戸、そして東京という町の特徴だということになるだろう。

あるいは城下町とはみなある程度そういうものだと考えられるかもしれない。たとえば金沢とか、またヨーロッパならたとえバスのインのトレドやイタリアのシエナのような町についても、外敵の侵入にそなえるべく紛糾しているその細い道また道を歩くうちに、ふと途方にくれるといったことがよくある。しかし東京はその巨大さ自体によって、そういう城下町特有の迷路性をもうひとつ別の次元に高め、一種異様な混沌におちいつてしまっ

たふしぎな町なのである。いまの東京に魅力があるとすればその点をおいてない。どこか未知の目的地にたどりつこうとしても所番地など何の役にも立たず、人の数える目印をひとつ見まちがえれば奇妙な堂々めぐりがはじまったり、あるいは思いがけぬ遠くまで行ってしまったりするいいかげんな、そしてふしだらな道また道。そういう迷路を無数にかかえながらなぜ近代「都市」のふりをしてみたり、合理性を誇ってみたりするこの野蠻な不条理性のなかにこそ、東京という町の面白さがあると言え言える。それどころかたと

えば魔都というような言葉のあてはまる世界の数少ない町のうちに数えられる資格を、東京はその極端な迷路性によって獲得してきている。

ところが同時にそれは東京という町の、首都としても珍しい評判のわるさの因でもある。ある人は東京のこの迷路性にほとほとうんざりして、京都はいい、札幌はいいなどと書いたりもする。一方は中国の都城制にならない、他方は開拓地特有の機能主義を体現してつくられたそれらの町の碁盤縞の街路を、整然としているとか便利だとかいう理由だけで美し

巖谷 國士

仏文学者



いと言ったりする。しかし日本の現代都市の前身はたいてい城下町であり、京都だの札幌だのに代表される碁盤縞の町はむしろ珍しいことを考えに入れれば、その美しいというのが珍しさから来るのではないかとも思える。

あるいは外来のモデルをもっているから美しいのか。そうなのだ、だから美しいのだというのが今日の、何かにつけてどこからおしつけられる判断方式の典型であつたとしても、それを私たちが鷓呑みにしていいということにはならない。新聞の投書欄のようなことだけで私たちの思考が成り立っているわけではないだろう。建前としては整合性を求めている、私たちがなぜか蔓草のような、あるいは耳の内部のような複雑さのなかで迷うことの眩暈を必要としている。

たとえば新宿とか渋谷のような東京の盛り場はその迷路性によって魅力を持する。どこかの露地の奥の酒場を出て右に曲り左に曲り、ふと方向感覚を失って黒いぬれたアスファルトにうつる光ばかりが眼に入り、はたしてここから出られるのか、目的地たとえば駅にたどりつけるのかと途方にくれ、ときには戦慄を味わうといった誰にもある体験こそが、盛り場の存在理由かもしれない。上から送られてくる整合性・合理性を旨とする「都市」の信条から逃れる時間がほしいという町

に住む者の感情は、かならずしも弱さだけに由来するものではないだろう。

もちろん札幌とか旭川とか帯広のような町もある。開拓地特有のもとも何もなかったことにもとづく整合性はしばしば快くもある。整合性がかえって眩暈をよびおこし、林立する高層ビルの谷間で途方にくれるといった体験もまた、迷路と関係がないわけではない。北

欧語に共通する迷路、たとえば英語なら maze という言葉は、同時に当惑、途方にくれることを意味する言葉だが、この maze を喚起する性格がたとえばニューヨークのような町にある。それはニューヨークという札幌に似た碁盤縞の世界に、たとえばグリニッチ・ヴィレッジのような迷路が巣食っているという理由からではない。ニューヨークの巨大な墓石群のようなビルまたビルの底にはりめぐらされた異様に幾何学的な直線の列そのものが maze の出所なのである。ニューヨークはこの点でも他のアメリカの町とはちがう生き物であるという感じを、その住民たち自身が味わっている。

というのは他方にたとえばフィラデルフィアがあり、そしてとくにあのワシントンがある。この地球上にワシントン中心部ほどつまらない、しかも高圧的な町があるだろうか。この町には迷路とは無縁な合目的性がのさば

っている。道はすべて広くまっすぐで露地などの生れる余地がない。たとえば名古屋あたりにも見られるような「道」というよりは「道路」だけでできた町なのである。そこに地下鉄が通ったとしてもそれは地下王国の入口とはならない。いわゆる超近代的な意匠、コンピュター化された機構をもつワシントンの地下鉄が、駅に入るときにはかならず耳をつんざく摩擦音を発し、それでも人々が耳をふさぐにニコニコしているといった光景が、言うならばワシントンという町ならぬ「都市」の性格をあらわしている。そういう町が美しい、あるいは美しくなくても面白いと考えるのならばそれはそれでいい。しかし札幌とか帯広のような町にそこまで徹底した整合性が育っているとは思いたくない。ワシントンはあくまでも特殊な例である。

もういちど言えば、たとえニューヨークのような碁盤縞であっても、町そのものが迷宮 labyrinth にたとえられることはありうる。だいたい随所に当惑の種があり、その奥には怪物ミノタウロスが住んでいて、そのありかを探偵がさがっているといったような町でありかたが、ロンドン以来の近代的首都の特徴である。それなら東京だってその資格はあるのに、ことさらヨーロッパの「都市」とくらべて云々されることが多い。いわく広場がな

いと緑が少ないとかウサギ小屋だとか、すでに聞きなれたそういう比較論にはかなりインチキが含まれている。つまりそれは模範とされるヨーロッパの町そのものの実情と合っではおらず、どうやら合衆国の、それもワシントンあたりを経由したニセ情報なのではないかという疑いがある。

ヨーロッパの町は一見なるほど合理的ではある。プラトン以来の理想的「都市」への憧憬が、多くの町のありかたに反映しているとも言える。たとえばパリという町に東京でいづも体験できるような滅茶苦茶な迷路性はなない。どんな道にも名前がありどんな建物にも番号があるから、所番地さえわかればすぐにどこかへ行きつける。パリに代表させてもいいヨーロッパのいわゆる都市には、たしかに東京には望むべくもない整頓感と便利さがある。

だがそれだけではすまない。たしかにパリは碁盤縞ならぬ同心円状の「美しい」幾何学図形をなしてひろがっているようだが、地図をよく見るとどこかで渦巻に転化しそうな印象もある。時代時代に施政者が手を加え、ときには十九世紀のセーヌ県知事オスマン男爵のような有徳の士がせっせと区画整理をしたという前史はあつても、住民の本性がたえずそこに新しい迷路を寄生させてきたように思

われる。

ヨーロッパの伝統的なアナロジィからすれば町は森であり洞窟であり、森も洞窟も迷路の言いかえである。かつてダンテが人生の半ばにして歩んだ道も、ディケンズやバルザックやボードレールやドストエフスキーがたずんだ道も、さてはカフカやジョイスやブルトンがさまよった道も、すべて整合性とはほど遠い迷路である。これをたとえば森や洞窟に住んだ先住民族の記憶の蘇生に見たてると人さえない。少なくともヨーロッパの町は「文明」の推進者たる施政者とその御用工人によって「都市」の理念をかためてきたものだから、その理念をうけつけない放任者たちに「未開」なるものへの志向を見ることはできる。いやそもそもバベルやトリアやカッパドキア以来、ヨーロッパ人もまた迷宮としての建物や町や地下世界への衝動を失っていない。だから便利で整然としているのがヨーロッパの町だというような俗説は、もっぱら施政者側の意図的な錯覚と捏造にもとづくものである。

それでじつさいにヨーロッパの町を歩いてみる。東京とくらべたければとくに大きな町を歩く。そんな町はたいどこかに迷路を仕組んでいるし、もともと地図をもたぬ旅人にとってはどんな場所も迷路となりうる。ク

レタのクノッソス宮殿の設計者タイダロスの末裔はどこにでもいそうな気がする。起伏の多い町によく見られる非幾何学的な道々に野蠻で未開なものへの侵入を見ることもある。たとえばマルセーユ、ナポリ、バルセローナのような丘と海をもつ港町にその典型がある。そしてとくにリスボン(リスボン)。

ヨーロッパの西のほうにあるポルトガルのリスボンという町はいくつもの丘をもつその地形のために複雑な印象を与える。航海者たちが港につき、トレイロ・ド・パソからロッシオ広場を通り、エドウアルド七世公園にいたるまでの道筋はたしかに整然としているようだが、視界にはいつも不規則なかたちの丘がちらついて当惑の予感を仕掛ける。なにか未開のものと共に存しているという感じがつきまとう。たとえばサン・ジオルジェの丘の上ののぼり、ときおりのぞく海を目印に道をくだりはじめると、その感じの正体がかめるかもしれない。そこはアルファーマといってすでに観光地化された貧民街だが、いまもリスボンの内臓のような役をはたしていることに変わりはない。かなり急な角度で下へ下へと降りてゆくその数知れぬ曲道は、小樽や尾道や長崎あたりともまたちがう立体的な迷路をかたちづくる。海のかげらが見えはしてこの迷路の行きつく先は海よりも下の地球

の胎内ではないかというような想像さえはたらく。もう地図など見たくなくなる迷うことの快感がしだいに心を領する。

あるいはフランスならばあの川の町リヨンのクロワ・ルース。そこにあるのは細いくね道ばかりではなく、蟻の巣のようにひろがった建物のなかを通る道、つまりトラブールと呼ばれる文字通りの胎内の道である。都市のなかにわざわざ掘られた富士の風穴、あるいは石の森のような迷路そのものである。

私はそんな迷路のなかを永久にさまよいたいという気持ちに何度もとられる。

とにかく施政者の与える「都市」にはえてしてその理想に反する迷路が蜂起する。パリのような都市計画の権化のような町でもその地下にはカタコンブや得体の知れない隧道がひろがっている。地上にもたとえばギヤルリ(アーケード街)のような人工の洞窟がしつらえられている。鉄骨の屋根をもち、くねくねとその触手をのばしてゆくこのギヤルリのなかでは、方向とか目的とかいうものがなくなる。そんな人工の迷路が無数にあった十九世紀の首都パリの混沌はもはや望むべくもないが、今日でも右岸のモンマルトルの丘のふもとヴェルドゥー街から入って左岸の学士院アーケードにいたるまで、ギヤルリからギヤルリをわたり歩く遊歩コースという

のがありうる。その途中で方向を失つてうろたえるようなことがあるならば、それは町が石の森になったということである。不健康だがじつは健康なこの迷いの体験こそ町がまだ町であるという証拠ではあるまいか。

そうではあるまいか。お仕着せの「都市」論のあずかり知らぬところで、迷路は独自の思想と習慣を育てている。それでなければどんな町もワシントンかもしれない。パリはそうならぬようにいまも努力しているところかもしれない。ところで東京のようにその極端な迷路性を日常とする町にいて、かえって迷路の効用を見失うということもありうる。そしてどこかで捏造された整然たる道だの広場だの理想をつい憧憬してみたりする。しかしほんとうに東京をそういう「美しい」町にする気ならやってみるがいい。迷路がまだ私たちの心に巣食っているかぎりそれは無理である。

特集			迷	対談
迷路			と	
		思	路	
		考		

■早稲田大学教授■

		野	口	廣	
		前	田	愛	

■立教大学教授■

迷路がかもし出す安らぎの世界

野口 迷路というと、ここへ来る途中思っただんですが、東京の道路は難しいですね。数学的にいえば三次元の要素というか、高速道路あり、地下鉄あり、これは立派な迷路だ……と。これは遅れたことの言い訳けなんです。実は(笑)。

前田 たしかに、これまでの日本の都市は平面的でしたね。交通機関にしても市電に乗ればいいんで、これは本当に平面を走るわけだから、自分の位置の確認ができた。これが地下鉄となると……。駅の順序は判るんだけど、頭の中にあるのは、駅などでもらう変形された路線図であって、実際にはどう曲って他線とどう繋がっているか見当がつかない状況だろうと思うんです。こうした迷路は我々を苛立たせたり疲れさせたりする。その一方で、むしろ僕らに安らぎを与えてくれる、あるいは、ほっと落ち着かせてくれる仕組みの迷路もやはりあると思うんです。たとえば東京では、大変少なくなったが、路地の世界ってありました。あれなどが安らぎを与えてくれる迷路の一つですね。谷中、本郷界隈にはそうした路地が、まだいくらか残っている。

昔、一葉が住んでいた菊坂のあたりなど、ちよと山手と下町の境で坂が多いから立体的な変化もあって……路地の突き当たりには手押しポンプの井戸があり、その横の階段を登っていくといつのまにか表の明るい坂に抜けていく。その路地は、陽当たりは悪いが、鉢物がたくさん並んでいる。通りであると同時に、共同の庭にもなっているんですね。こうした、なにか懐しさを感じさせる種類の迷路がたしかにある。

図形として非常に魅力的な存在

野口 亀の甲羅に彫った迷路の話もあるそうですね、迷路の歴史というのは、相当古くまで遡れるらしいですね。ここで図形およびゲームとしての迷路の魅力を考えると、やはり問題解決への努力ですかね。そして、「あ、出来た！」という、大袈裟にいうと創造の喜びみたいなものが深く絡んでいる。ま、ゲーム全般にそうした要素はあるんだけど、図形としてのチャールディングスが加わっている。これは、ちよとパラドックス的な言い方なんですが、一般に図形というのはパツと見て判る。直観的である点特徴的なんです。ところが迷路はパツと見たら判らない(笑)。そこが幾



何の立場からすると面白い。じゃ幾何ではどうやって迷路を解くかというと、一番簡単な方法は、入口を入ったらどちらかの壁を押し

る。これまた奇妙な気がしないでもないんですが……。

えて、その壁を伝わってズーツと回って行けばいいというアルゴリズム。全般を見ないんです。とにかく非常に小さい局所的な、その場その場の積み重ねで、結局、大局的には外に出てしまうことになる。解析学なんかはそうなんですけど、何だか判らないが計算していったら出来ちゃう。そうした点で非常に異色のゲームといえますね。ま、これは、前田さんのいわれたような、文学的要素をいっさい捨てちゃった話なんですけれども……。でも、安らぎのある迷路といえば、西洋の庭園などにそうしたのが随分ある。あれなんかは、図形というある意味では無味乾燥なものを、庭という本当に安らぎの場所に持ち込んでい

る。前田 箱根の彫刻の森に生垣で作った迷路があります。これが、そのヨーロッパの庭園の迷路を日本で真似したものだと思うんです。ヨーロッパの場合、ウエルサイユ宮殿をはじめとして、幾何学的な庭園が多いんですが、あれは啓蒙時代の理性といったものを庭園に取り込んでいるわけです。後のロマンチックの時代になると、日本の回遊式庭園風になら自然が生かされていて、洞窟があったり、滝が流れていたり、迷路があったりで、そこを恋人同士が手を組んで歩くといったようになっています。つまり、前の時代の非常に理性的な、あるいは幾何学的なものを嫌って……、野口さんに笑われる表現かもしれないが、幾何学というよりは位相幾何学的な空間を作り出して、

自然と接するという考え方が変わったようですね。ところで話は飛びますが、僕ら子供のころには、よく迷路を作って友達と遊びましたよね。絶対に終わりまで行き着けない巻物なんかにして(笑い)。最近「迷図の本」があったり、週刊誌に迷路パズルが出ていたりしますけど、子供たちが自分で手作りの迷路を楽しむことは、あまりないようですね。

迷路作りは高度な思考活動

野口 そう、われわれの時代にはよくやりました。いまはコマージュ・ベースで出たものが多い手近にあるので、作る暇がないんですかね……。子供が迷路を遊ぶことは、幼いながらも一つの仕事なんです。受験勉強で大学に入ると同じだし、われわれが数学の問題を解こうと思ってることも、子供のころ迷路をやっていたときと、あまり変わってないような気がする。そうした点からみると、簡単な迷路にしろ、自分で作ってやるというのは、また一段上の思考活動だろうと思うんですが……。

前田 遊びとしては、とりとめのない遊びなんだけれども、迷路というのは、実は、人間の生き方というか、人間のあり方そのもの

に一番深い所で繋がっているんですね。というのは、人間自体が体の中に迷路を持っているようなもので、汚い話になるが消化器官などは、一本のチューブが入口から出口まで複雑怪奇にめぐりめぐっているわけです。バリウム飲んでレントゲン撮ればある程度は判るけど、普段は見当つかない。ところが、皮膚一枚で隔てられた外界は、目で見、耳で聞き、あるいは触れることも出来る。私でない外界のことは判るのに、私の本体は迷路であり、ブラックボックスである。これは人間を考る場合の基本的な条件の一つだと思うし、そしてまた、われわれが迷路に魅力を感じる一番の本質的な原因のような気がするんです。

達成感が日常生活の代償行為に

野口 そうですね。たとえばコンピュータがランダムに作り出した迷路はただ難解なだけで面白くないといわれますが、人間の創り出した迷路というのは、やはり一つの創造活動ですから、作る時点ではその人の全身全霊を投入するわけですね。大袈裟にいうと、作者の理想、哲学といったものも反映してくる。ですから人間の作った迷路であれば、あの意味ではジーツと見ていると読めてくる、



といったことも出てくるんじゃないですか。

それとは別に、やる方の立場からすると、日常生活自体が迷路のようなもので、年中、袋小路を出られないでアップアップしている(笑い)。現実の生活で苦勞しているんですから、せめて図形の上では出られたという、成就感を与えてくれる。そうした意味でいい遊びの性格があるんです。

前田 たしかに、そうした代償行為はありますね。

野口 日常生活は、もう失敗のしどろしど世界。せめてどこかで達成感を持たないと……、私だけがそうなのかもしれないけど(笑い)。私のやっています数学自体が、非常に事物を単純化したものですから、本格的に考えていけば出来る。しかし日常のほしいの事柄はいろんな問題が複雑に絡み合っていて解く

のは難しい。

地下鉄路線図は位相幾何学？

前田 ちょっとお伺いしたいんですが、いわゆる遊びとしての迷路ですね。これを位相幾何学——トポロジーですか、そちらから考えるとどうなるんですか。

野口 そうですね……迷路を抜ける方法などは、明らかに位相幾何学の立派なテーマです。グラフ理論という一つの分野だといいたい思えばいい。やり方としては、馬鹿馬鹿しく単純なんですが、先ほども述べたように一方の壁に沿って行く方法なんです。これが一番実用的で数学的な方法じゃないかと思われる。一本道ならば壁を伝わって行けばすぐ

出られますね。どんなに複雑な迷路にしても入口と出口があるならば壁は繋がっている。

だから枝分かれも袋小路も全部引きのぼして直線として考えればいいんです。長さとか角度には関係のない、位置と形相という図形の性質だけを考える。

前田 そうすると、さつき地下鉄の路線図の話が出ましたが、実際は曲っているのが、地図の上では真っ直ぐになっているのと同じですね。

野口 そう、どの路線がどこで繋がっているかが問題で方向はあまり関係ない、所詮地下鉄ですからお日さまは見えないから必要ないというわけね……(笑い)。それと距離。地下鉄の速度とも関係してるとは思うが、あまり関係なく、図柄の出来栄が主体になっている。ですから、あれは実際の路線の位相的な表示といえる。どうもね、われわれが図形に対して、直観的にボンと理解するときのしかたというのは、長さ、角度というものはなしに、位相的な要素のほうが多いようですよ。ただ、それだけに掴えどころがなく、数学としては面倒くさい。だから本格的に数学の分野に入って来たのは今世紀の初頭あたりで、それまでは、何かあるみたいだけれども判らない、というようなことだったよう

前田 ほからの場合ですと、迷路というところからいろいろ連想するんです。たとえば書物。文章が一定の長さで折り曲げられてペー

ジを埋めているんですが、考え方を変えればトイレット・ペーパーみたいな長いものに、ずーっと一行で印刷されているものを読んでみるんだと思ってもいい。つまり、書物を読み始めるのは迷路の入口に立っているんで、読み終えて迷路を出てくるわけだ。読書体験は、かなり迷路体験のアナロジーになるんじゃないですか。

野口 なるほどねえ。

書物を後ろから読む場合もある

前田 また、いま私は「都市と文学」といったテーマをやっているんですが、都市における迷路性が、小説とか物語にいろいろ出てくるんです。ですから、たとえば地図というアイコン的なもので都市を見た場合、これは一目で見渡せるから、いわば普通の幾何学的な世界になるわけです。これが小説に描かれた都市の場合ですと、トポロジー的な世界……、想像力の空間といった表現のほう判りやすいんですが、が、形作られているように思う。でもこのころでは、書物にしても、イラスト

大切なんですから……。

や写真などがたくさん入るようになって、そうした意味での迷路性というのはだんだん稀薄になってくるかもしれない。

野口 書物といえ、われわれ数学の場合には、おかしな連中がいましたね。書物を後から読んでいく。

前田 ほう。

野口 最後の結論だけ読んで、「あ、こんな本」というのはよくあるんですが、そうじゃなくて、あることを勉強しようというときに後から読み始める。

前田 つまり、出口から入る……。

野口 ええ、出口から入って、自分の知っているところまで来たら、それで理論が繋がって終わるんです。知っていることを読んでいって未知の分野に入っていくよりは早いというわけ(笑い)。

前田 だいたい迷路というのは、入口からやるより、反対からやっていったほうが易しいと言われますね。

野口 そのアイデアと似てるんだけど、これがやれるのは一つの才能らしいですよ。人によってはこの方法はやれない。

前田 僕らの場合には、そうした読み方は絶対にしない。というのは、一つの文学作品を読む場合、それは問題解決のために読むのではなく、むしろ、迷路で迷う体験のほうが

女性的なるものへ連想は広がる

野口 愉しんじやう(笑い)。おいしいご馳走を食べないで捨てちやうようなもんですからね。われわれの場合は、事実だけ判ればよいという世界ですから、出口から逆に辿ることも可能なわけだ——。迷路を愉しむといえ

ば、理論的には一方の壁を伝わってどこまでも行けば必ず出られるんだけど、誰も迷路パズルをそれで解こうとはしませんね。コンピューターならやるんだろうが……。この間、ネズミ・ロボットに迷路を抜けさせるコンテストがあったそうですが、その場合でもいったやり方でプログラムしたネズミがいかどうか怪しむくらいなんです。しかしこの場合は時間を競うものだから、出る確率が七八〇%でも、早く出られる方へというのもあるが……。数学はやっぱり物事をスポイルしない(笑い)。

前田 私はね、最近の迷路ブームというのは、裏返して考える必要があるんじゃないかと思うんですね。というのは、本当の意味での迷路体験、迷路を辿り辿りして問題を解決する喜びが、日常生活の中で得られなくなっ

た。そのミニチュアとして皆が迷路パズルを愉しんでいるのではなからうかと思うんです。——野口さんは綾取りの本をたくさん書かれています。綾取りというのも迷路になり繋がってくる。あれは女性がやるもの

でした。女性が、紐と自分の十本の指を使って、一つの「空間」を作り出す遊びです。リリアンというのもあって、これはただ、編む愉しみだけで何の役にも立たない紐を作っている。あれが迷路のみなものとような気がする。ですから、迷路は女性的なものというイメージが強い。たとえばギリシャ神話にあるテセウスがダイダロスの作った迷路からアリアドネを救出す話、日本では奈良の三輪山伝説にある糸をたどって神の正体を確かめる話など……。糸というイメージが、必ず「ヒト」が迷路に結びついていくし、またそれが女性的な何かに繋がっていくんです。ですから、すこしどぎつい表現になるが、むしろ女性的なるものに男が侵入していくというのが迷路の遊びだろうと思うんです。

野口 たしかに綾取りも迷路の一種といえる。だいたいあれは、文化人類学の調査隊が原住民のやってるものを記録してくるんですが、われわれは雑誌に発表されたそれを見て実際にやってみる。中にはどう考えても取れないものがありますね。出来上がりの図が写

からだ全体での思考法の復活

生して入っているんですが、もう完全に迷路なんです。これは本当に、一方の壁を伝えたいなんてアルゴリズムは無い(笑い)。そして綾取りには民族によって非常に個性がある。

前田 ほう。

野口 日本では一般的な手法が、エスキモ

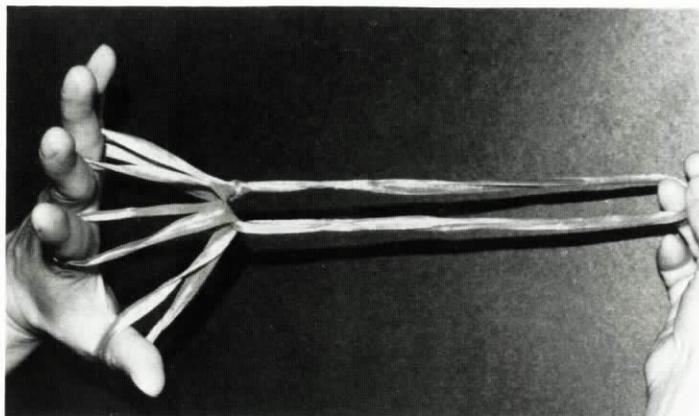
ーは知りもしないということがよくある。ですから、この間はどう繋がるのかと、一つ取るのに一週間かかるときもある。ま、冬休みに炬燵に入って一生懸命やるんです(笑い)。

前田 素材な質問になります。綾取りをする場合、目で見ながらやるわけだけど、指先の感覚というの、かなり働くものなんじゃないか。

野口 ええ。キャサリン・ハットンという綾取りを深く研究した人が「綾取りの記憶は筋肉の記憶である」と言ってますね。ほとんど指の感覚で動いているんじゃないんですか。

前田 迷路を通り抜けるのにも、やはり視覚はあまり頼りにならないと思うんです。

野口 そうですね。見えないのが本格的な迷路ですから。



前田 とにかく全身の感覚を総動員しなければ、どうにもならないところがある。そうした意味合いで、この迷路遊びは本質的な何かに繋がるんじゃないか……。つまり、やはり近代というのは、何といても視覚優先の時代であったということなんです。近代都市は迷路に満ちた魅力ある古い町を潰して、直線の道路を打ち抜き、見通しの利く町を作った。しかし、いわゆる迷路的空間というものは、単に視覚だけではなく、僕たちの感覚全体を刺激する何かが存在する空間だったと思うんです。つまり、最初にのべた安ら

小型だが本格的な思考活動

ぎの迷路だったんです。それがここに来て、視覚優先というか、遠近法的思考というか、デカルト的な物と心を二分してしまう近代的な思考が疑われてきたことで、迷路性の複権に繋がっていくと思うんです。視覚的というよりは全身的思考、デカルト的明晰の論理よりも複雑なものの錯綜というか、アナロジーの思想……。といった迷路的な思考が復活してきたんじゃないでしょうか。

野口 本当にそうですね。迷路は単純な数学の問題として考えてみても、分析しなければならぬ点もあるし、また直観的な判定を下さなければならぬこともある。ですから、これを解くのは実際に数学をやっているのと同じ精神状態なんです。小型ではあるが本格的な思考活動——いふなれば一番人間的な仕事をやっていると思う。コンピュータにもやれることだが(笑い)、コンピュータを超える立場で問題解決している。通り抜けた達成感などは、大袈裟に言えば生き甲斐につながるんじゃないだろうか(笑い)。それも手近にやれる。だから流行ってことなのでしょうね。

前田 文学作品にも、迷路的なものとする

でないものがある。近代の作家でいえば、よく対照的に取り上げられる漱石と鷗外がそれで、迷路的なのは漱石なんです。初期の「倫敦塔」の導入部は実際にロンドンでの迷路体験といえるし、最後の作品である「明暗」では主人公の津田が旅館の廊下で迷い、洗面所の鏡に写る自分の顔と対面する場面がある。これが主人公の内面の問題に繋がっているんです。つまり、いまの言葉でいえば、アイ

デンティティを発見する糸口を掴むことになっていく。鷗外の場合は小説を書くときに、いわば時間と空間の座標軸をきっちり決めていく。そうした傾向の好例として上げると、鷗外は明治四十二年にいまは珍しくないが、地図に方眼線を入れて、索引をつけた「東京方眼図」という地図を自分で作って新案特許を申請しているんです。そうした人ですから、書き出すときにはもう結末がはっきり見えている、そうした小説を書く。読んだ場合、たしかに物の形はくっきりしているが迷路を辿る愉しさといったものは、漱石と比べて少ないわけなんです。これを文章で分析すると、漱石の文章は助詞の「は」が非常に多いし、鷗外の文章は助詞の「が」が多い。国語学の大野晋さんの説によると、「は」というのは、まだ知られていない未知のものを呈示するときに使い、既知のことを述べるときには「が」

が使われるというわけです。つまり、鷗外は、既に知られている世界を作っていくが、漱石の場合は、一寸先が何だか判らない、未知の世界を切り開いていく。そうした違いがあるんじゃないかと思うんです。ですから、迷路の問題というのは、いろんなところにずらして考えていくと、たいへん面白い展望が開けるような気がいたします。

野口 そうですね。そういった奥深い、文学的というか哲学的なものもあり、また遊びという観点からしても、非常に古い歴史を持つているだけに、綾取りなどと同じようにすごく味わいがある。特に図形に関連した遊びというのは、人間の直観力をものすごく要求する点で、ぜひ若い人たちにはやっていただきたいゲームだと思いますね。

特集

迷路

私の迷図

関 三平

作家

入口

編集部より私に与えられたテーマは「パズルとしての迷路」。我が「迷図」の絵づらとしては、高所から広く俯瞰した所謂鳥の目の視点で描いたものも多く、道筋をたどる労苦を別にすれば、それこそ一望のもとに迷図世界を見はるかせるのだけれど、こと「パズルとしての迷路」ということになる途端に視野は狭くなってしまふ。私自身、迷路作家を自称していながら、人様の迷路をあたることをあまりしていないし、まして本誌が、「21Cへ向つての未来を考えていく主旨のもとに発足云々……」と聞くともういけません。なにしろ私の日常ときたら、それこそオーバーではなくその日ぐらし的になんとはなしに過ぎていくなあと感じている様な有様なので、未来に対するビジョンなどありようがなく、その私に書けとは編集部の方の眼ちがい以外の何物でもない様に思えるのだけれど……。そんなわけで、ここはひとつ強引に「私の迷図」という方向にねじ曲げて駄文を弄することで責を免れたいと思う。

●初体験は小学校3年生

私と迷路のつきあいは、小学3年生の時に親戚からもらった一冊の箱入りの豪華な漫画

本に始まります。昭和二十四年のことです。勿論それ以前にも雑誌のパズルの頁などで迷路に接してもいたし、又楽しんでたどつたりもしてはいたが、あ、こんなすばらしい世界があるのかと明確に意識したのはその時です。

その迷路というのは、それまでに見てきたものとは違って、2頁見開きのかなり描きこんだイラストレイティブなもので、漫画のストーリーの中で主人公がたどるべき迷路として提示され、そのあと主人公がその迷路の中に入つて行く様が5頁にわたつて駒わりで続きます。古くさいタッチながら、昨今の分業の劇画とはちがひ、作者一人の手仕事の描きこんだ駒の連続が盛り上げる臨場感……。私が今、自分の迷図を制作するに当つてこだわっている「リアリティ」の問題はこの時から始まつていると云えそうです。この点については後述します。

その迷路に触発されて、学校のノートの裏表紙などの白地のところは、電車の絵、パチンコ盤面の釘図と並んで、迷路で埋まつてしまつことになりました。しかしその迷路は、一般の基本ともいえる画面一杯線で埋められている無機的なパターンではなくつて、なんかの地形を想定して描いたものが多く、坊

条的に区切つた迷路でも曲り方に制限をつけたいタイプのもので全んどでした。そして年と

共に迷路への関心もいささか薄れていつて、

思いついた時に時折小品を作る位のものでしたが、卒業が間近にせまつた小学6年の時と高校3年の時に、カレンダー2枚はり合わせ裏面一杯に描きこんだ大作を2本ものとしてあります。後日再び連作を始めるに当り、この2作を夫々No.1、No.2とナンバリングしております。

高校、大学と進むにつれ、自分の志望であつた方向からは段々それで、結局はアニメーションやグラフィックデザインで口を糊する生活となり、振りかえつて見れば、自分にとつて楽な方へ楽な方へと流れてきていました。これは正解だつたと思つていますが……。

●(零)日本迷路公園を創設

20代もなかばを越えるころから思ひだした様にポツポツと再び迷図を制作する様になり、少なくとももうまくもないイラストを注文うけて描くよりは楽しいし、楽だしと、不景気でヒマになつたのを幸いに迷図の連作にふみ切り、やり出した時はとてもこれを本職とする気はなかつたのですが、今やのめりこんでしまつて、採算度外視的のところがいささか気がひけますが、迷図制作をもつて本職となすと、昭和五十二年に(零)日本迷路公園を創設、総裁におさまつて以来、迷図連作の日々を送り

今日に至っているわけです。

当時の設立声明書から一寸ピックアップしますと、まず名称。『零』日本迷路公団と称す由縁は、当公団（以下甲と略）設立以前に類似の呼称を持つ公団（以下乙と称）が存在したが、乙が現実に日本国内に於てなしてきた業績をかんがみるに、乙の現名称よりは甲の名称を名乗る方が妥当と思わざるを得ぬ現状である。それ故乙がこれまでの所業の真の姿にめざめ、名称を日本迷路公団と改称でもしようものなら、甲の名乗るべき名称がもはや存在しなくなることを危惧し、よってここに（零）日本迷路公団設立を声明する次第である。尚、『株』KKではなく零細企業なることとの表示に（零）を冠する。』

実際にどんな活動をやるかというところ……。

『迷図制作をさしあつてのメインとする。単にパズル的なMAZEではなく一枚絵としても楽しめるものをめざしたい。それで、迷図です。その他に実物の迷路の制作。三方廻廊風のテラスから中庭の迷路（入口からテラスにたどりつくにはこの迷路を経由せざるを得ない）の他人のうろたえぶりを眺めながらお茶でも飲んでもらおうという迷路喫茶。それからハンプトンコートをしぐ庭園迷路の製作。あるいは島全体が迷路になっているMIZMAZE ISLANDとか、夢はひろがります。』

『一枚絵としても楽しめる迷図をめざしている』



自画像 関 三平

るから、場を何処に求めるかといえは、じっくり眺められてしかもパズルが楽しめる、これにはトイレがピッタリ。従ってスローガンは次の通り。『台所に火事除けのお札、便所には迷図。このうるわしく新しい風習の定着をめざそう。』

かくて公団設立以来約5年、迷図の制作ナンバーも345番を数えるに至り、その間「迷図」という呼称は他でも使われたものの、単なる語呂あわせにとどまり、「図」として見ると私には不満なものがほとんどです。

●最高の迷図を目指して

そもそも私が、単に興味にとどまらず、外に対し迷図を発表しだしたのは、これまでの迷路にいく足りぬ所があまりに多かったからです。まず第1にグラフィック的にお粗末で、単にパズルマニア向けの域を出ていないということがあります。少なくとも一般の人にとつてはよほど変った奴がやるもんや位の認識しなかつたのではないかと思われま

家やイラストレーターと組んで『迷図』たらしめんとする努力もなされてはきている様です。しかし悲しいかな、にわか仕立ての2人3脚、作者と作画者の意気がピッタリというものは少なく、ルートにミスありの欠陥作品もままあり、これはコンビ制作がよくない

というのではなく、あくまでも出来上つた迷路に対してプロとしての責任を感じておられる方が少ない事のあらわれだと解釈しております。ここらが私にプロとして名乗りをあげさせた第2の要因です。尚、私の作品を載せて頂く場合には「策画 関三平」と記させてもらっています。

●迷図のリアリティとは

（ここで先に一寸触れました「リアリティ」について述べますと……、私に限らず、単純な線だけからなる極く基本的な迷路（私はスケルトンメイズと名付けております）でも、たどる時にはその描線を壁或いは生垣等におきかえて、その中をさまよう我が身をイメージしているのではないかと思えます。そうではなくつてあくまでも図形をたどるだけのクールな楽しみを味わつておられる方もあるかもしれない。メイズマニアと云われる方の内にはこのタイプの方が多いかとも思えます。でも私にとつては小学3年の時に味わつたあの、

もつとホットな楽しみ方の出来る迷路、それこそが求めるものなのです。スケルトンメイズは少なくとも、迷路をもつとポピュラーなものにするには力を持たない、いいかえればスケルトンメイズのスタイルに拒否反応をおこして迷路すべてを黙殺してしまう人も少なくありません。これは豊かな楽しさを提供しうる可能性を内包している迷路にとつてごく残念なことです。この迷路の持つ様々の可能性の内の一つ、解き手のイメージの力を借りての臨場感、我が身がその中に入ってゆくホットな関わり方——これを私は「リアリティ」と呼んでいるのです（もつと他のいい言葉がある様にも思いますが……）。

ですから、私の迷図はまずグラフィック的に見て楽しいということを一つの眼目として制作してきました。マニアでない人が見て、あ、面白い世界だなと感じてくれればシメタもの、興が湧いてルートをたどってくればこれはもうもうけもの位の気持ちでつづけてきました。必然的にイラスト的に描きこんだものとなり、為にルートの総道程はスケルトンメイズより短いものとならざるを得ません。

一方、私としてはマニアの方にも満足してもらえただけの、迷路としての密度も盛っておきたい。そこで双方を満たす為に、様々のルールを考えることにも意を注いできまして、

これも私の迷図の特色の一つです。

●わがオリジナル迷図法

代表的なタイプの名称を列記しますと……。

「サンベオリジナル」「ラウンラン」「ラビリンスム」「バイオリズム」「コーナリング」「階段迷図」「昇降一途」「アプアプダンダン」「ワンウェイ」「アングル120」「アングル135」「馬車馬」「千里馬」「パーバースドンキー」「フライト」「カップドキヤ」「関所めぐり」「スペースパーキング」「十字通廊」「エトセトラ……。

「アングル120」は曲る時は鈍角のみ（120度）に限られる。

「馬車馬」は横道あつても曲らずひたすら直進、T字路でつき当つて始めて左右を選べるタイプ。

「パーバースドンキー」は馬車馬の逆で、直進を好まず横道あれば必ず曲り込む。

「階段迷図」は指定段数キツチリでゴールイン出来るルートを探す。

なかんずく「ラビリンスム」は最もユニークと自負しているもので、ラビリンスタリズムから成る造語。まず4拍子のリズムを自分で決めてスタート。左左右左というリズムを選んだとすると、最初の三叉路で左、次で左、つづいて右、左と曲り、再びリズムの最初に

戻り左左右という様にくり返して、果たしてゴールに到達出来るかどうかというもの。

左左左左、左左左右、左左右左から右右右右まで16通りのリズムの内、1つのリズムのみゴールイン出来る様にルートを構成してあるという策者泣かせのタイプで、まして5拍子となれば32通りのリズムとなり、ルート作りだけで試行錯誤、一週間以上もかかり挙句の果ては作者の知能ではカバー出来ずギブアップということもしばしばのこわもてルール。

《本誌33頁に載せました迷図は「馬車馬フライト」タイプで「す」の文字よりスタート、文字からとび出せば、とびだした方向に直進（フライトルール）、次の文字、あるいは縁の補助ルートにたどりつけば再び馬車馬ルールで進み、また次の文字へとフライトをくり返して「な」に到達出来るルートをさがして頂くもの。》

●出口

さて、当公団最近、短期間、即製ではありましたが、実物の迷路を作る機会があつて、杭打ちにロープ張りのチャチなもので作つている私自身あまり気の乗らぬものでしたが、子供達は大喜びでたのしんでくれました。迷路の見かけのチャチさなど問題でなく、迷路そのものが大好きなんだという事を確認出来

ただけでもいい経験でした。この子供達が大人になった時、私の同級生の或る者の様に、毎日の生活が迷路（良い意味では決してない）なのに今更迷路パズルなんぞ……という様になつてくれなければと思うばかりです。又、我が子が迷路をたどっている時の、外野の父兄の反応ぶりも私には非常に面白く、興味深いものでした。

4歳の娘が、お父さんお仕事何？と聞かれて、迷路描いてはるのと答えると、シツカリしてる様でも未だ4歳やもんねえと、娘の正しい答えが認められない様に、迷路の世界にむかつての世間の眼は未だ未だ開けていない現状ですが、私自身は好きでやっている事でもありませんので、当公団の迷図制作は未だしばらくは続くものと思います。昨年不感ならざる迷惑の年を過ぎたばかりですが、私が耳順ならざる耳迷に至る頃まで、今のピッチで制作が続けられれば、それこそ目出たくM A Z E No 2001と、西暦と一致することになるでしょうが、さて如何になりますか。

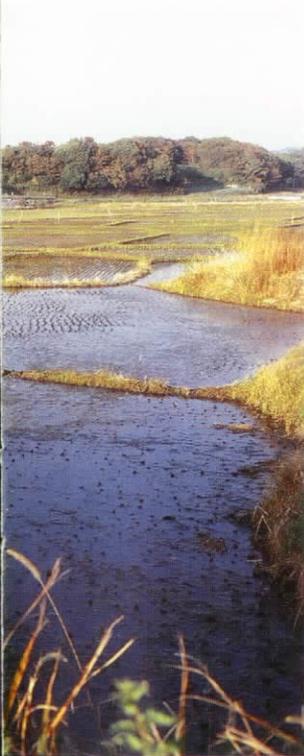
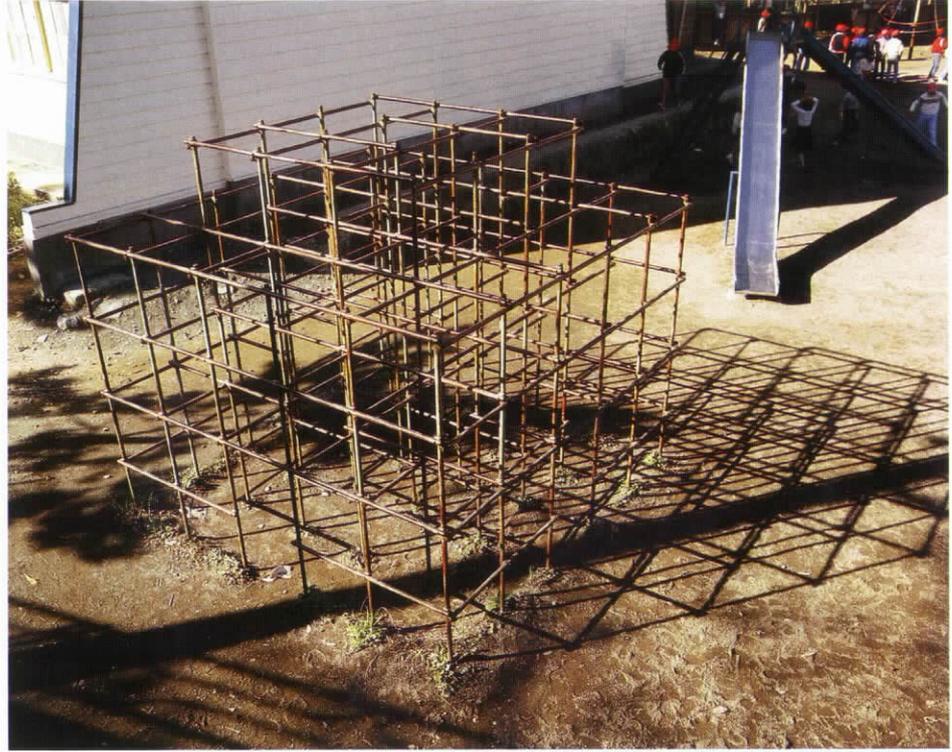
小6、高3と一つのピリオドの時期に力作を作っている前例もありますだけに、No 2001、大作をものして、その時が迷路公団のピリオドの時なのかとも夢想しております。



特集 迷路	ゆ き ず り
の	き
迷	ず
路	り



▼ 東京近郊

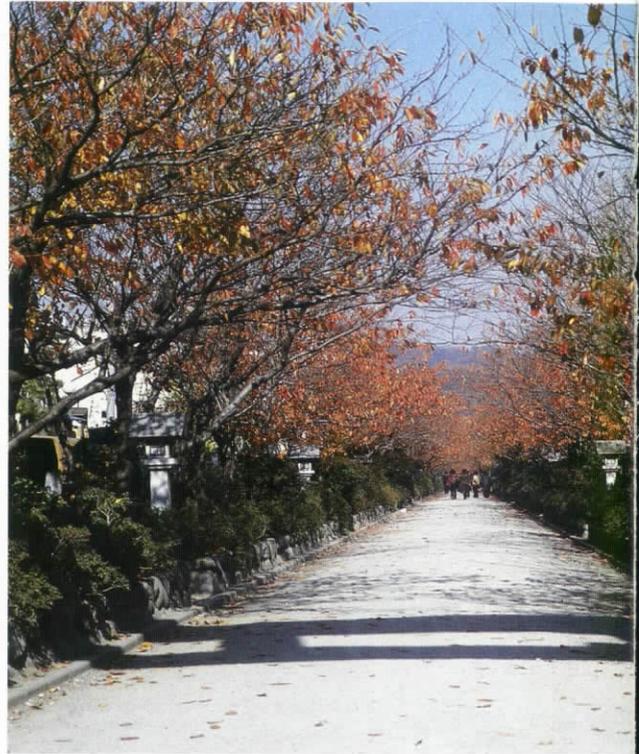


▲ 東京近郊

▼ 東京近郊



▼ 鎌倉・鶴岡八幡宮「段葛」

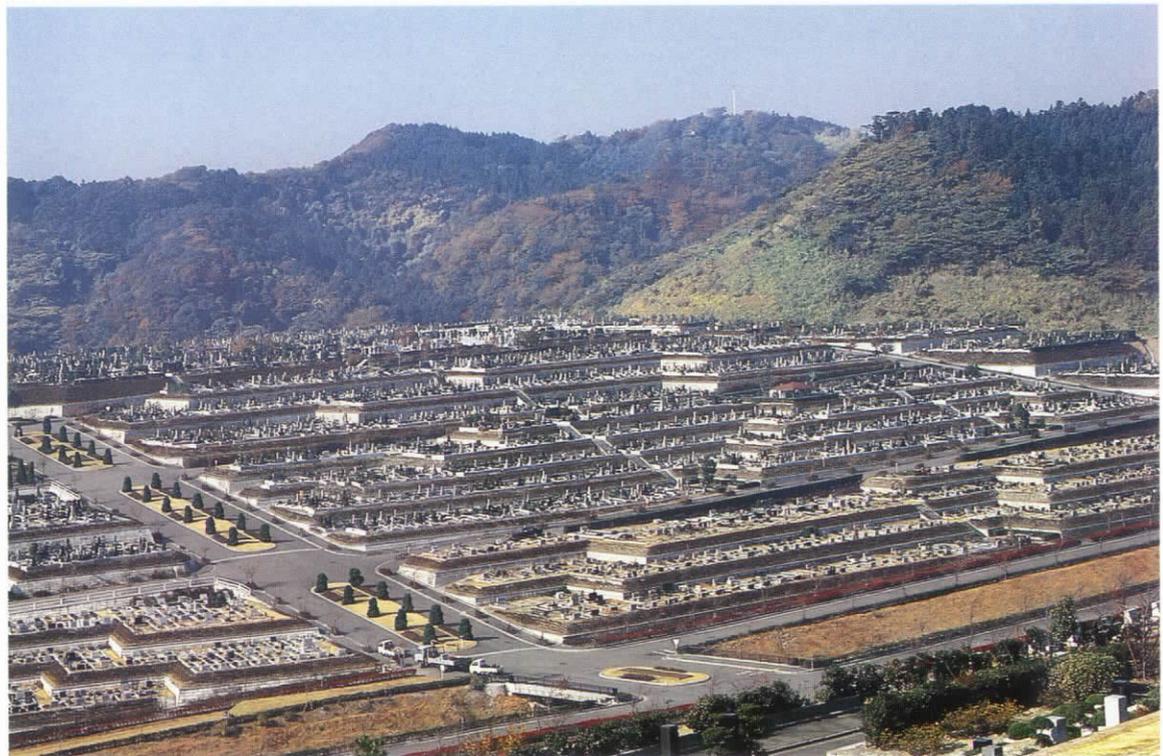


▲ 東京近郊



▲ 東京近郊

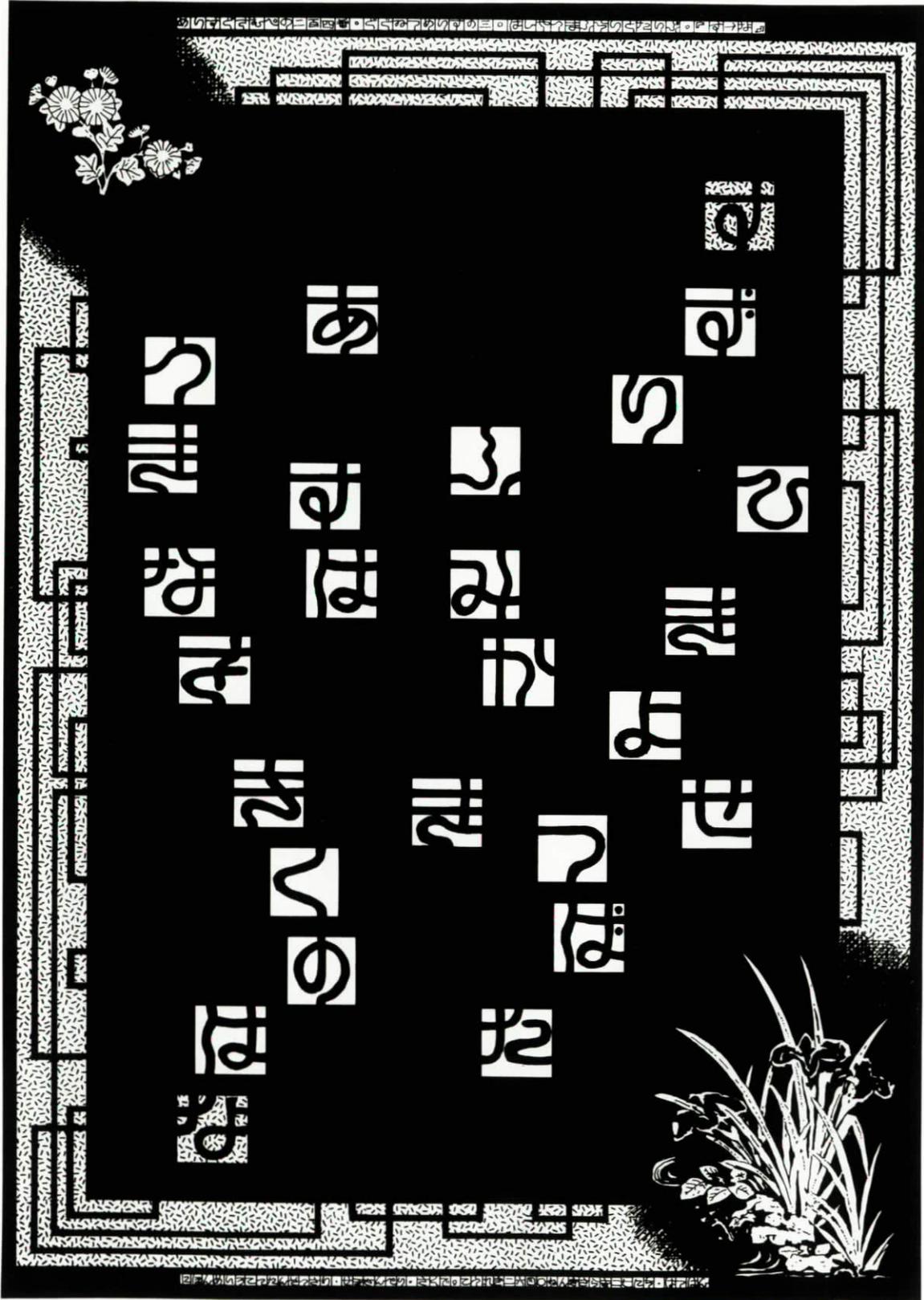
▼ 東京近郊



▲ 東京近郊

迷 図 (28頁、3段目の本文参照)

策画 / 関 三平



解答 ————— 表3

特集		迷路
迷路	と	現代
		対談

●●迷路性への郷愁が抽出する滞留を許さない現代社会の構造

■建築評論家■

川添	登
坂根	夫

■朝日新聞編集委員■

川添 そうですね。迷路への郷愁みたいな

ことがあって、こうした対談も企画されるんじゃないかね。近代都市にしても、迷路性を排除する方向で進んできたものが、あまりにも行き過ぎて、また最近では迷路的なものが求められている。しかしそれも、お遊びとしての都市の部分であって、都市全体が迷路風であつたら、現実の生活は成り立っていかない。たとえば漱石の『三四郎』の中で、三四郎と美弥子が団子坂の菊人形に行った帰りに迷ってしまったって、ストレイ・シブという言葉が出てくる。これがこの小説のキー・ワードになっているんだが、あれはちょっと現実の社会からはずれて迷い子になった、その楽しさなんですよ。現在求められている迷路の楽しさは、こういったものなんだろうと思われ

擬似的現実には満ちた情報化社会

川添 ぼくら建築の立場でいうと、バズルの迷路というのは、建築物が一つもなくて垣

根だけなんです。つまり、一つの平面をぜんぶ、道が占領してしまう。一〇〇パーセントが道路空間になるわけだ。それでちょっと思いついたんだけど、なぜ、現代が迷路かというの、要するに情報というものが隅々まで行き渡ってしまっ、かえって、その中で方向感覚がつかめない、というような感じ

でとれるかもしれませんね。

坂根 情報の発達というのは、その一方で

すべてを上側から擬似的に見通せちゃうようにしてしまった。たとえば岡本太郎さんは明快に、迷路即生命、即人生というんです。快に、迷路即生命、即人生というんです。人生というのは絶えず二つの岐路に立たされて、お先真っ暗である。そこでもがきながら自分の道を見つけなきゃいけないという。つまり、実際の生活というのは先が判らない。

全体像が見えないんですね。だから迷路のわけですよ。ところが、迷路バズルの場合は客観的に全体像を見ながらなぞっていく。迷路を遊ぶわけですね。現代の情報化というのはこの客観的な視点、全体像を見渡せる視覚距離、あるいは深さも含めて、を与えてくれる。

ですから岡本さんがいうような実人生の切実さの意識が薄められてしまったんです。つまり、実生活の面でも、自分でつかんだんじゃない。情報化によって与えられた、借りものの視覚距離で人生をなぞっていく。すべての迷路風のお遊びになってきているわけですよ。

坂根 完全に迷路に陥入ってしまったって、出口が本当に無いとなつたらバニックですよ。

バニック状態というのは現実生活において起こりうるし、また実際にたくさん起こっている。われわれは、これをもっと意識しなくちゃいかんと思うけれども、日常の生活の中ではほとんど忘れていきますよね。忘れていどころか、見通しがききすぎちゃってる。なんか人生が全部決まっ、いて迷路的なおもしろさもなにも無い。エスカレーターコースに乗



つちやうか乗らないかみたいだね。その代償として、本当にこわくない程度の迷路というのがいっぱいあるわけですよ。遊園地のジェット・コースターとかお化屋敷といったコミーシャリズムの迷路とかね。都市にしても、

あまりスカスカじゃ面白くないから、ちょっとストレイ・シープを味わえる部分が好まれて人が集まってくる。でも、どうですか、日本の都市で、そういう楽しい迷路的都市空間というのはどこにありますか。

自然発生的空間は迷路になる

川添 都市空間じゃあまりないと思います。が、回遊式庭園なんかは、狭い空間をいかにも広いような感じに演出しますよね。ずいぶん遠くまで歩いたなと思ったら、パツと出口に現われちゃったりという……。

坂根 ということは、江戸時代からそういう知恵はあったということでしょうね。

川添 ヨーロッパでは庭園の中に、垣根で本格的な迷路を作りますよね。それはそれで面白さがあるんでしょうが、日本の場合は自然の地形そのものがかなり複雑で迷路的ともいえる。ですから、狭い空間の中で山奥に入ったような感じを出す方向に、迷路の技術が働いたということはある。

坂根 たしかに日本の庭園には迷路そのものを作った例はない。あったとしても西洋から持ってきたものであってね。日本庭園は迷路的ではあるが迷路そのものじゃない。もつと楽しめるわけだ。そういうものが多い。た

だ、都市空間についていえば、最近の日本では楽しみのための迷路的なものは出てきたと思っんです。たとえば建築的な空間だと、例

のジラルデイ・スクエアとかキャナリーとかアメリカの古い建物を再建して、中庭や階段をうまく利用した出会いとか回遊的な要素の濃い建物ですね。あれに似たものが日本にも出てきている。もつとも、外国からそのまま輸入したといった感じでもありませんけど。

川添 迷路的といえば、むしろヨーロッパ

の中世都市などがはるかに迷路的ですよ。

だいたい建物に囲まれて、道が自然発生的に出来たから。そういう所では、本当に狭い空間の中にいろんな路地があったり、ちよつとくぐり抜けたりする個所がある。だから日本の都市でも京都のようにきちつと条里で決まっていけない、自然発生的に出来た東京の効外とか、あるいは長崎のように傾斜地にどんどん町が発展していつて細かい家がゴチャゴチャあるところには迷路的な楽しさというのがあると思う。また、たしが萩原朔太郎の散文詩だったが、道を歩いていたら家やなにかがヒュルヒュルと細長くなったりする異常な幻想を見た。それでフツと気が付くと、それは確かに自分のよく知っている町ではあったがいつも通っているのとは逆の方向から出てきたために、ぜんぜん違った印象を受けたのだというようにことが書かれている。

牢獄か子宮か、迷路のもつ二面性

坂根 たしかに錯視というのは町を歩く楽

しさのエレメントの一つに入る。たとえそれが基盤的に正確に道路で区切られた都市であっても往きと帰りの逆方向では違った印象を与えることはある。自動車と同じ道を往復すると、よく帰り道に、これ同じ道なのかなあ

と思う錯覚がありますよね。この道路の二面

性の問題は、むしろ人間の知覚の問題として多くは非常に面白いと思うし、また、この錯覚を利用して、いくつかの楽しい試みが出来るんじゃないかと考えられる。この二面性ということでは、もう一つは都市的迷路

空間のもつ二面性に注目したいですね。それは、そこに作られた迷路的空間が、閉鎖された牢獄的なものであるか、それとも子宮的というか保護を目的としたものであるかという二面性ですよ。これはどっちにでも出来るわけですよ。だから建築家とか都市計画家というのは、だれのために迷路を作るのかという発想が大切だと、ぼくは思いますね。つまり一つは、愛政者のためというか、要するに非常に制御しやすい方向……。昔の城塞の迷路なんかは、ぜんぶそういう外からの侵入を防ぐ意味があったんだが、最近ではデモがあったときに安全なようにとかね（笑い）。そういう

う発想でやるか。それとも逆に、なにかあったときに市民がもうちょっと憩えるようにとか、あるいは逃げ込めるようにという風な発

想でやるかということなんです。多少の差でどっちにもなりうるという……。

川添 ですから、中近東あたりのカスバなとは、民衆の生活と迷路性というのが、典型的なカタチであらわれている。

為政者は幅広い道を作りたがる

川添 その都市における迷路的空間の問題が如実にあらわれたのが、かつてパリで行なわれたオスマン計画ですね。パリの文化人や

なんかが、こそつてオスマン計画に反対したのは、そうした子宮的、保護的な迷路空間がパリから失われてしまふといった理由からです。それまでのパリというのは中世的な都市

構造ですから、道路は曲りくねってクモの巣をかけたようになっていた。革命運動で暴動が起きた場合、街路それ自体が塹壕になっていたんですよ。ですからオスマン計画でその道路を、見通しのよい真つ直ぐな道路にした最大の理由は、やはり革命軍をいかに素早く制圧するかということなんです。だから、真つ直ぐな幅の広い道路というのはやはり為政者のもので、民衆が自然発生的に作り出す道路は、どちらかという規制がないところから……。

坂根 だからといって、それじゃものすごく迷路的な都市空間が、われわれ市民にとっていいものかという、そうばかりともいえない。あまり判りにくくは実用的にも困るわけですよ。だから判りやすさと、迷路的なアト・ホームみたいなひだのある空間とが両立したのが本当にいい都市という気がするんです。

川添 住宅地にやたらと自動車が入ってくるのは困るんだけど、やはり消防車とか救急車、引越しのトラックなんかには入ってもらはなくちゃならない。人間というのは本当にせいたくもないのだ（笑い）。だけど、そうした中でも、おっしゃったような迷路性というのは出せないことはないですよ。

坂根 そう、ケイオスみたいな感じになるわけですね。

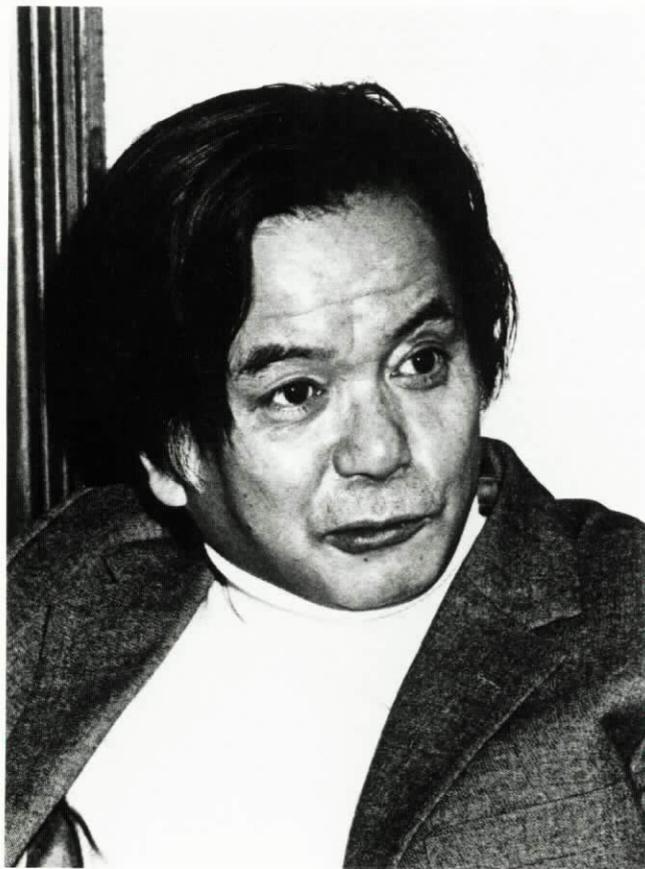
下町にも山の手にも迷路はあった

坂根 ちょっと脱線して悪いんですけど、南イタリアのポジターノという町は迷路的な空間として非常に面白いんです。ムーア様式というのかな。これは、あそこだけでなく、ペルシャとかアフリカのカサブランカなどの建

物とも関連しているかもしれないが、本当に迷路なんですよ。急斜面に石の建物が累々と建っているんですが、ある家に入ってベランダに出るとそれがよその家の屋根なんです。そこからまた下の家に降りて行ける。それが



坂根 巖夫



ずつとつながっている。公共的な空間にもなっているんですよ。つまり私的な空間と公共的な空間の境があいまいなんだ。盗難とかにはどうするのだろうかと思うんですが、非常にアウト・ホームの感じですね。

川添 だいたい民家の形態というか建築の形態を大きく分けると、乾燥地帯と森林地帯になる。乾燥地帯では熱風が入り込むし、寒暖の差が非常に激しいから窓をあまり大きくしない。敷地いっぱい建物を取り、中庭を設けて、そこで温度の調節をする。そうした建物が道路にそって並ぶから、道路がまた中庭風の市民にとっての外部空間となる。それ

と中庭は機能的には同じなんです。それがずつとつながってそうした形になるんですよ。日本とかヨーロッパ、特に日本では敷地の真ん中に家を立てるでしょう。ですからカスバみたいなのは非常に発生しにくい。東京でも

川添 都市論の立場から見れば、日本の場合、ヒッピーの出現というのは迷路の野外出とも民衆性の問題がうんぬんされますが、日本の民衆が屋外都市空間を使い慣らせなかった簡単にして最大の理由は日本の気象条件に

浮遊性が現代社会を支配する

昔の下町は向う三軒両隣りで連帯感をもって生活していた。また、僕は住んでいたからよく知っているんですが、山の手は塀で囲って孤立していたといわれますが、塀はあるけど木戸を開けて隣り越しでどんどん通れた。そうした形での一種の迷路性みたいなものは存在してましたね。

坂根 迷路性が社会の中で成り立ち得るには隣り近所のコミュニケーションがうまくいっているという前提が必要になる。——ここで話を前に戻して、なぜ現代に迷路的なものが出てきたかということなんですが、ぼくは六〇年代のヒッピー・カルチャーを境に迷路の内容が変化してきたと思うんです。迷路の主題は大昔からあるんですが、それを物理的なものとすると、もうちょっと屈折した、意識の迷路性みたいなものを求めるようになった気がする。サイケデリックなもの、トリップの意識みたいなものですね。

ある。三日に一べんは雨が降り、夏はカンカン照り、冬は空ツ風では広場なんて成り立たない。ですから日本が自然発生的に作り出したアーバン・デザインは、商店街のアーケード、地下街、それに「何々会館」とかいう一

つの建物の中に雑多なものを入れたものですね。池袋のサンシャインなんかその典型だと思ふ。それぞれに、それなりの迷路性があるんです。それが屋外活動にふさわしいジーンズ・スタイルのヒッピー達が出てきて、原宿やなんかで小さな道を通したり、小さな庭を出したりという屋外の新都市空間を生み出してきた。

坂根 そうした空間的な分析も面白いんですが、ヒッピーだけではなく、現代の意識そのものが非常に屈折してきている。たとえばコズミックな意識みたいなものがある。宇宙開発も影響しているんだろうが、人類そのものも大地の上に立つというより、地球という一つの星の上に住むという意識が濃くなっている。いわゆる天地の座標系が崩れて、どちらが上か下か判らないフローティングしている状態なんですね。これは一種のめまいの空間ともいえる。ですから、めまい的な文化がものすごく増えています。芸術を見ると非常によく判るんですが、ポップアートなんか、まさにめまいそのもの。ブリジット・ライディのキラキラするのやなんか……。エッシャーが流行するなんてのはそれを象徴している。あれこそ迷路的な空間でしょ。

川添 生命科学でいま盛んに遺伝子の研究を進めますね。専門家にきくと、アメーバ

ーなどの下等動物ですと遺伝子を二〇〇パーセント使って遺伝情報をフルに活用しているそうです。これが高級な動物、人間やなんかになると、二割ぐらいしか使われてないという。残りはカスなのか、それともなにか潜在していて、いずれ活性化するのか判らないけど、なにしろ使われていない。現代の文化などを考えてみれば、そういう無駄がやたらと多いんだよね。迷路にしても、パズルの場合ならば全体をパッとパターン認識でとらえて、なるべく早く出口に到達することが楽しみなんだろうけど、都市の中の迷路なんかは、むしろ早く到達しないことの楽しさみたいなものでサ（笑い）。さっきおっしゃったように、あまり先が見えすぎているから、すぐ到達したら面白くない。だいたい銀ブラなんていうのは買い物に行くんじゃないでブラブラするわけだけど、どうせブラブラするなら、さっきのストレイ・シープみたいに空間を楽しみながらいきたいという、なにかめまい的な要素、これには地球に対する認識も含まれるんだが、と同時に、あまりに過多になって、無駄というか、あり余った情報をすぐに目的化するんじゃないで、どう楽しむかという問題になるんじゃないですか。

坂根 また、世界全体がコンピューターゼーションとか企業の強度の機能化などによっ

て管理社会化が進んで、素戔としていて。この中で人間性を回復するための身近な手段は触覚的空間だと思うんですよ。現代は触覚を求めている時代なんだな。そう考えるとこの迷路的空間がまさに触覚的空間だといえる。人間と人間が向き合っただけというチャン

永遠に続く迷路と人間の関係

川添 UFOとかオカルトが流行するのは、もしかすると……UFOに会えるかもしれない、そうした怪奇の場面にぶつかるかもしれない。そうした期待感もありますよね。

坂根 そう、そうした期待感が確かに存在します。僕自身はUFOを信じないが、UFOを信じたがる人が多数存在する事実を、科学者をもっと重要視しなくてはいいけません。そうした人間の中に眠っている本能の動きみたいなものを解明しないと逆に危険だと思えますね。それに、コンピューターで人間の知能をシミュレートして、かなりの線まで近づいてはいるんですが、第一線の線まで近づいたりシミュレート出来ない限界がある。これは人間の頭脳についてもいえるんです。神経生理学の脳の発達と関連して、最後に自分自身が自分で考えられるかという問題になるんだが、それは永久に入れ子型構造で

すが都市の迷路的空間では非常に多いわけですからね。またちょっと、薄暗がりがあったほうがいいですね。現代はあまりにも明るすぎる。SF、怪奇幻想的なものの流行も、ミステイズムの持っている迷路性に対する憧れじゃないですか。

矛盾に陥ってしまう。一流のコンピューター学者でピューリッツァー賞ももらったダグラス・ホックシュタターが『ゲーデル、エッシャー、ババ』という本を書いている。ゲーデルは不完全性定理という難解な理論を書いた数学者で、エッシャーは例の錯視の世界です。ババの音楽も明快のようであるが非常にナゾに満ちている。人間文明の発達もたらした知の最先端で活動している人がこうした本を書いたのは、現代の意識の迷路性を象徴していますね。人間と迷路性は永久に切れないものじゃないんでしょうか。

川添 自分自身の人生とか生活については非常に先が見えちゃっているんだけど、文明全体についてみると見えなところがあるんだね。

坂根 それはありますね。それに先が見えてるといっても、本当に押ボタンの恐さとか

そうした恐さがいっぱいあるんですが、それを毎日いちいち気にしていたら生活が成り立たない。ですから皆がちょっと意識の外に置いて、普段は幸せそうな顔して、迷路ゲームを楽しんでいるわけですけどね（笑い）。だから本当は、もっと深刻に迷路について考えなければいけない。——話が飛んで、ちょっと宣伝めいて恐縮なんですけど、最近世界的に話題になっている『マスカレード』という絵本を訳したんですよ。これはまさしく全編ナゾ解きの絵本なんです。この絵本をぜんぶ解くと宝の隠し場所——イギリスなんです。が、判る。それを見つけた人はイギリスまでの往復切符とその宝がもらえる。射撃心を煽るとかいろいろいわれてるけど、宝の問題は別として、全体が迷路から成り立っている面白い絵本です。考えてみれば同じイギリスの『不思議の国のアリス』にしても非常に迷路的だ。やはり子供は迷路が好きなんです。どうですか、あなたは心理学の先生ですが、発達心理学的にいつて子供に迷路的な環境は役に立つんじゃないですか。

川添 それはよく判らない（笑い）。

迷路での滞留が生みだす創造性

坂根 つまり、迷路には冒険があるでしょう。失敗もしなければいけない。試行錯誤の連続ですよ。いまの社会環境が子供にとってよくない点は失敗させない。危険があつちやいけないとする風潮ですね。危険を乗り越えて進まなければ子供は成長しない。

川添 最初に述べたように、迷路というのは平面を全部道で占めてるわけですね。これを実際の建物で求めてみると、まず博物館、それにショッピング・センター、デパートなどがあげられる。要するに空間の中に出て来ただけたくさんの情報を詰め込んで、それを体験させようとする、迷路的な構造になるということですね。

坂根 僕はこのところ何回か展覧会を構成する仕事をしたんですが、おもしろい体験しましたよ。デパートなどで開く場合が多いんですが、デパートというのはなるべく人をたくさん入れたい。しかし、人が溜っちゃいけないんです。だから会場もなるべく線状に構成したがるんですね。そうすると後から人が押してきて一個所に立ち止まらなくなるわけだ。これはよくないですね。それと全く反対なのが、サンフランシスコにあるエキスポロ

ラトリウムという科学博物館です。自由に自分が本当に見たい所へ行つて、そこに何時間でも居られるという展示方法をとっている。現代社会の構造も滞留を拒否する姿勢が強いですね。受験コースのトコロ天式などその最たるものですよ。ところどころにエアポケットみたいなものを作って、そこに居たい人は一年でも二年でもいて好きなことをやっていいというような、そうした迷路的な人生を送り方をしないと、まず創造性にはつながらない。クリエイティブイが生まれてこない。

僕はエアポケットじゃないが、小学生のとき喘息で二年間落第しているんですが、家で寝ていてかなりの読書をしました。それがいまの栄養になってますね。だからぼくは落第だつて、そうした意味の落第ならいいと思うんです。予備校へ行つて受験勉強ばかりする落第というのは効果が無いでしょうけど。

川添 昔の教育制度というのは小学校からすぐ中学校へ行つてもいいし、高等小学校へ行つてから中学へ行く道もあった。それから専門学校から学部に行く方法もあるし、高等学校を出て大学へ進む道もある。いくつかの選択する道順があつたわけだ。それがいまは

ピラミッド型になつちゃつて、ラチスになつてないですね。

坂根 そうなんです。それはまったくよくないです。それが体制化社会の一番よくないところですね。人間の生き方にも、もつともつと迷路性をもつ。いろんなポケットがあ

つて、自由な、ある人は眠つて遊んでいてもいい。ある人は創造的なことに夢中になるような時期があつてもいい。そういうものを許すような社会になつてほしいという気がしますね。



●二十一世紀を担う若者の理想像を描くと……

徳性教育 社会連帯の意識を養い、日本人としての自覚と国際感覚を身につけ、開かれた愛国心を持つ。二十一世紀を担う若者はこうあって欲しい、と社会教育審議会が、「青少年の徳性と社会教育」についての答申を提出した。

この答申は、今日の青少年の特徴を「豊富な知識や情報を持つてはいるものの、心身のひ弱さ、連帯意識の低さなどの欠点が目立ち、社会性のある「個」の確立が遅れている」ととらえている。このため、新しい世紀を支える、心豊かな人間を形成するためには、幼児期、少年期、青年期のそれぞれの成長期に、

段階に応じた発達の目標が必要だ、と指摘する。

まず、幼児期には、親が子供を助けすぎることをやめ、失敗と成功を経験させて自立感を持たせ、少年期には野外・文化・奉仕活動に参加して自発性を養い、青年期には国際交流を通じ排他性でない愛国心を持つ自己の確立を目指すべきだ、と強調している。

この目標を達成するため、社会教育施設や青少年団体活動の奨励・援助、家庭・学校・地域の協力体制の整備などを、行政の重点とするよう訴えている。

●日本分州国での経済効率加速化ほどの程度か

道州制 臨時行政調査会で、広域行政によって経費節減、効率向上を図る道州制案が日商から提案され、各方面の議論を呼び起こした。

都道府県を廃止して、北海、東北、関東、東海、近畿、西海、九州の七道を設けようというもの。明治二十三年にできた現行の府県制は、交通の発達した現在では狭すぎ、水源の利用や公害・住宅対策などをたてるに際して足かせにもなり、府県と市の「重行政によるムダが多い」などがその理由としてあげられている。

日商の説明では、府県の事務は原則として道州に移すが、住民生活に関係深い部分は市

町村におろすことにし、このため、合併を含め市町村の力を強化することに努めるといふ。また、知事や道州議会議員は住民の直接選挙で選び、旧府県名は残し、国会議員の選挙区は当分現状のままにする、ことになっている。道州制は、昭和の初めに「州庁設置案」が出されたのが皮切り。戦後は、全国を七〜九の地方に分け、国が首長を任命する官治的な案、日商など財界が推進してきた経済効率向上のための府県合併統合の考えなどが出されていた。

●ゴルフ場がイモ畑になる、近未来SF……?

食糧安全保障 わが国の食物農産物の自給率は七三パーセント、穀物自給率だと三三パーセント、これも、一〇〇パーセントを超す米を除くと僅かに三・八パーセントに落ちる。先進国中で最低の水準だ。世界の食糧事情が窮迫の方向にあるうえ、国際紛争でもおこればたちまち輸入が途絶える恐れもあり、食糧安全保障への関心がにわかに高まった。

農林水産省はこのほど、穀物輸入がとまった場合の、わが国の栄養水準の確保についての試算を発表した。この試算は、輸入が減少したり、途絶する場合を、短期、長期に分けて計算している。

これによると、短期的に輸入が一割減つた程度なら一日二五〇〇カロリーの現状を維持できる。しかし、五割減の場合は三三〇〇カロリーで、昭和三十年代の水準になる。

長期的なケースの場合、牧草地やゴルフ場の耕地にし、イモ類など高カロリー作物中心の栽培に転換をはかり、魚類の飼料化をやめて直接たべるようにすれば、五割減で二五〇〇カロリー。ただ、輸入ゼロだと、やっと二五〇〇カロリーの確保にとどまる。

農政審は、この試算をタタキ台に、食糧安保の具体策を練る。

●日本人の国際感覚をテストする大学???

国連大学 国連大学の本部が、東京の旧都電青山車庫跡地に設置されることになり、十一月二日、披露式典が行なわれて建設計画が動き出した。国連大学は、一九六九年、当時のウ・タント国連事務総長の提案によって創設されたもので、「人間の生存・福祉・開発」などの課題について各国が協力し、研究する施設。

七三年の国連総会で、日本の首都圏への誘致が認められ、日本政府が土地・建物を無償で提供することになっていた。七四年に東京・渋谷のビルに仮本部を開設していたが、東京と横浜が候補地として名乗りをあげ、設置場所の正式決定が遅れていた。

国連大学は、これまで「世界の飢餓問題」「人間と社会の開発」「天然資源の利用と管理」の三つのテーマをすえ、研究してきた。しかし、これでは、進展する世界の動きへの対応が不十分であるとし、二代目のスジャヤモト学長の提唱によって「平和、安全、紛争解決、世界変革」「世界経済」「飢餓、貧困、環境」「人間と社会の発展と共存」「科学、技術とその影響」の五つのテーマを新しく決め、研究活動の幅を広げることになっている。

●幼稚園児が社会人になる頃に祭りも終わる

大阪四百年まつり 秀吉が大阪城の建設に着手したのが天正十一年（一五八三年）。再来年である四百年を迎えるのを記念して「大阪四百年まつり」が計画されている。「油断」の作家・堺屋太一氏の提唱に府・市・財界がつたもので、昭和五十八年秋から七十五年

にいたる十七年間に会期とする雄大な構想。「二十一世紀の産業文化の首都」をつくらうというのがキャッチフレーズで、産業と文化を対立するものと見ず、産業と文化は密着しているとの理念を打ち出している。従って、第一回国際デザイン・エンターテインメント展を皮切りに、衣料ファッション、ディスプレイ、ネオンサイン、グラフィックなどの国際ショーや

コンクールを中心にすすめる。このほか、主要行事の試案として、第二国立国会図書館の誘致、金取引所の設立、帆船パレード、クラシックカーパレード、国際映画祭、先進七カ国首脳会議、一日国連総会の開催などがあげられている。

きまつた会場にとらわれず、一般市民が生活し、産業活動が行なわれている町の中を舞台に、十七年間にわたり年間千件の行事をつつという、息の長い大事業で「大阪復活」をめざす。

●聞かザルを得ず、言わザルを得ないのだ

近隣公害 今世紀末には、都市の住民は耳せんをして外出することになりかねない。この学術会議の警告は、騒音公害の恐ろしさを再認識させた。

このごろ、騒音公害に代表される近隣公害への苦情が目立つてふえている。「公害紛争白書」によっても、典型七公害といわれる大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音・振動、地盤沈下以外に、最近では廃棄物、電波障害、日照権、通風など、都会の日常生活の中での公害が急増している。

これは、発生源からみても明らかで、町工場などよりも家庭生活と商店・飲食店による

ものが激増している。つまり、カラオケやワーナーなどの騒音への物言いが増加していることを裏付けている。三三開発など、都市の過密化が進む事態を反映しているわけで、「気分が損われる」という心理的な訴えが総被害の七八パーセントを占めている。

近隣公害の中でも最も問題の多い都市の実情をつかむため環境庁は、五十七年度に、東京・大阪の主婦五百六十人を選んで実態調査にあたる。二十四時間、計測器を身につけてもらい、人体が直接受ける騒音を記録して、対策の資料にするという。

●衣食足りると胃腸の働きも良くなるという話

カロリー・アップ 日本人の消化吸収率がきわめて高いため、食品のカロリー量表示が改訂されることになった。

科学技術庁の新しい測定によると、日本人の炭水化物の吸収率は精白米で一〇〇パーセント、胚芽精米九九・七。また、たん白質では精白米八七・八パーセント、胚芽精米八二・五、小麦粉九五・六となっている。炭水化物の吸収率は従来のデータとほぼ同じだが、たん白質については精白米で二パーセント、小麦粉は六パーセント高くなっている。

このほか、たん白質では、大豆が従来のデータの七八パーセントに対して九二・チーズ

は九七パーセントに対し一〇〇と吸収がよい。このように見直すと、各食品のもつカロリー量も変わり、一〇〇グラムの大豆は四三八カロリー（従来は三九六）、小麦粉は三六一（同三五九）、魚は一四九（同一四三）となる。また、コンニャク、しいたけ、海藻のように、

吸収率がゼロとみられていた食品も五〇〜六〇パーセントは吸収されていることがわかった。

このため、日本食品標準成分表は、来年にも改訂され、千二百点中、六百の食品がカロリー・アップされることになる。

●文明の行きつく果ては穴居生活時代か

空間高度利用住宅 地価の高騰による住宅需要の落ち込みへの対応策として、等価交換方式のマンションと並んで人気を呼びはじめたのが三階建て、地下室付き、屋根裏部屋付きなど空間高度利用住宅。

都会の町中では十分な土地の獲得はむずかしく、限られた敷地をうまく使うには上へ、下へと伸ばす以外には、よい方法が見当たらない。加えて、核家族から大家族への流れもあって、おじいさん、おばあさんから孫まで三代の家族が同居するため、かなりのスペースが要求されている。また、勉強部屋、書斎、作業室、車庫など、ゆとりのある部屋の配置

への欲求も見逃せない。

これに目をつけたのが三階建て住宅で、延べ面積一四八・六平方メートルの住宅を建てる場合、従来の二階建てに比べ、積水化学のハイムスカイワードでは、土地が二パーセントも節約される計算になるという。ミサワホーム、三井不動産も三階建てを発売、いずれも好調か。

一方、通産・建設両省が開発中の新住宅プロジェクトは、地下室の利用を検討課題としており、防音・恒温の利点をもつ地下室を、低コストで実用化する研究を進めている。

●物心豊かな生活は結局話し合いから生まれる

コーポラティブハウジング 住宅を建てた人が集まってグループをつくり、知恵と金を出し合って共同でタウンハウスをつくるコーポラティブハウジングが、新しい時代の住宅づくりとして注目されている。

地価の高い都会では一戸建ての住宅を建てようとしても、十分な敷地を確保するのはむずかしい。勢い、庭までは手がまわらず、ちまちましたマイホームになりがちだ。

欧米ですでに軌道に乗っているコーポ方式は、土地を「マ切れにせずまとまった形で共有にし、そこに住みたい人が二十〜四十人単位で集まって組合をつくり、専門家の助けを

かりながら、好みの集合住宅を建てる。おかげで、公園や集会所などの空間を生み出し、また、設計や工事費の節約が期待できる。全入居者が話し合いを進める過程で、よい人間関係を築くことができる、という長所もある。

一〇〇パーセント民間主導型のほかに、住宅公団や地方自治体も乗り出しており、プロの企画推進者も育っている。資金調達や意見の調整など、苦労は多いものの、通常の分譲住宅より安く、気に入った家が手に入れ、理想的なコミュニティをめざせるとあって、今後大いに普及していきそうだ。

●増えるべきか減るべきかの岐路に立つ日本人

合計特殊出生率 一人の女性が一生(十五歳〜四十九歳)に何人子供を産むかの平均値が合計特殊出生率。この数が二・一ないと人口の再生産はできない。日本では、昭和四十九年にこの線を切って二・〇五となり、以後減少を続け、五十五年は一・七四となったため、にわかに入人口の高齢化促進、将来の人口減少が問題視されてきた。

この原因の一つに有配偶率の低下がある。とくに二十歳から二十四歳の女性は、五十年には三〇・三パーセントが結婚していたのに、五十五年は二二・七パーセントとなる。この数字がそのまま「結婚しない女」の増加といえないが、結婚年齢が高くなってきている

のは事実。

一方、五十五年は史上最高の離婚件数となった。とくに中高年の離婚がふえている。その申し立ても、妻側から性格の不一致をあげる例が多く、男女の「家」に対する意識が大きく変わってきている、とみる向きもある。出生率の低下も離婚の増加も、欧米に比べればまだ少ない。また、社会習慣の違いから日本が同じ道を歩むことはあるまいと案外する見方も根強い。しかし、結果が数字に現われたときにはすでに手遅れの問題だけに、早い時期に見直す必要がありそうだ。

●貴女は酒に強くなったのか弱くなったのか

女性アルコール依存症 酒への欲求を絶ち切れず、周期的・継続的にアルコールを飲むのがアルコール依存症。かつて、アルコール中毒と呼ばれていたが、体に吸収されたために生ずる中毒症状と区別するため現在では、中毒と依存症を使い分けている。

最近目立ってきたのが女性のアルコール依存症患者。日本で二百万人といわれる依存症患者のなかでは、女性の占める割合は、まだごくわずかだ。しかし、女性の飲酒人口は五〇パーセントをこし、しかも十年で三倍増という勢いだけに案外は許されない。アルコール医学会で発表された女性アルコ

ール依存症患者の実態調査によると、育児が終わった三十五歳、子供が独立する五十歳が一つの危機だという。男の場合は大部分、二十代で酒の味を覚えるが、女性は、各年代へのばらつきが見られ、初飲から依存症までの期間が男性一六・九年に対し、一一・四年と短かいのが特徴。酒を楽しむ社交的飲酒の期間がほとんどなく、現実問題から目をそらすために、つい手にする傾向が強い。

働く女性、家事のわずらわしさから解放される女性が増える傾向にあるだけに、将来にわたって避けられぬ問題となりそう。

●法は作ったが心はどうやって入れるのかの問題

婦人差別撤廃条約 「婦人に対するあらゆる差別の撤廃に関する条約」が、国際条約として発効した。しかし、昨年夏署名したまま批准していない日本ではあまり拘束力がない。外務省は、一九八五年を批准の目標に置き、関係国内法の整備をすすめている。

その中で大きな検討課題は国籍法、家庭科の共修、雇用関係の三点。国籍法については、現在の父系優先血統主義から父母両系血統主義にと、改正へ向け動き出しているが、二重国籍や不正国籍取得など、なお、問題が残る。高校家庭科の共修については、来年度から男子も選択できることになる。しかし、「女子は必修、男子は選択」では「役割について

定型化された教育概念の撤廃」という一〇条に触れるのではないかとみる外務省と、あくまで女子の必修が必要とする文部省の間で意見が対立している。雇用に関しては、母性保護を重視したうえで、労働者の男女平等問題専門家会議が、来春までにガイドラインをまとめ、男女平等法の作成をすすめる。

しかし、最初に批准したスウェーデンでも、働く女性の半数は賃金の安いパートであるとか、家事負担は女性にかかっているとか、法だけでは解決のつかない難問をかかえている。

●金の切れ目が福祉の切れ目となる場合もある

武蔵野方式 老人の生活保障を有料で引き受ける武蔵野市福祉公社が発足、注目されている。相談員、看護婦が家庭訪問する基本サービスのほか、食事、家事、外出の付き添いなど、老人の希望に応じた世話をする。すべて有料で、現金を持たない人には、住居、土地などを担保に、市が生活費を融資する。

今年四月の業務開始以来、身寄りのない老人、将来を不安に思う老人の間で反響が大きく、契約者がふえている。現在は、担保の評価額以上に費用がかかった場合はサービス打ち切りとなるが、資産を残して死亡した契約者の遺贈分などを積み立て、福祉基金として救済に当てる計画もある。有資産者のための

福祉、福祉の切り売りとの批判は避けられないものの、同居率が低下し、また年金の充実で有産老人が増える現実がある以上、一つの解決策とはいえよう。

事実、財団法人「老人福祉開発センター」でも安い土地を分譲して老人天国にする「リタイアメント・コミュニティ」を計画している。アメリカでは、この種の「コミュニティ」を私企業が開発し、すでに、一、二、三、千カ所もあるといわれる。

●ますます縁遠くなる日本人と米の関係

二十一世紀健康メニュー 西暦三千年(昭和七十五年)の日本人にとつての健康メニューが、資源調査所の手でまとめられた。これによると、一人一日当たりの適切な食物摂取量は、米百八十グラム、砂糖十五グラム、菓子二十六グラム、油脂十八グラム、果物百八十六グラム、肉七十グラム、牛乳百七十七グラムなど。三年前の厚生省の国民栄養調査に比べると、米が二五パーセント減、牛乳が一〇パーセント増で、その他はほとんど同じ値になっている。従って、現在の日本人の食事は、かなりバランスがとれている、といえる。ただ、問題になるのは脂肪の取り過ぎの傾

向。昭和三十五年に比べ、五十二年には倍増し、この勢いでいくと七十五年には、エネルギー摂取量の三五パーセントが脂肪になる計算となる。こうなると欧米並みに心疾患、脳血管障害が増えることは避けられないので、脂肪分の割合を二二〜二七パーセントの最適量にとどめる必要性を強調している。一方、米を食べる量は年々落ち込んでおり、昭和三十年代の一〇三、五五グラムが、五十二年度には二〇三、四四グラムとなっているが、食糧自給、良質のたんぱく源という面からも百七十一〜百八十グラムの摂取が望ましい、としている。

●児童骨折にみる失われた生活の知恵の教訓

カルシウム添加食品 日本人はカルシウム不足という声が高まるにつれ、カルシウム分を強化した食品に人気が集まっている。すでに、みそ、豆腐、ヨーグル、即席めん、ビスケット、ソーセージ、ソフトクリームなどにカルシウム添加商品が登場している。

カルシウムは骨や歯をつくるために、成長期の子供にとつて欠かせぬ、というのが常識だが、大人にとつても大切な要素だ、との指摘がふえている。カルシウムが不足すると、疲れ、イライラや興奮など精神の不安定、不眠などの異常が現われ、これが進むと糖尿病や動脈硬化などの成人病、子供の骨折や骨異常などの症状がでるとされる。

日教組は昨年、「幼児の骨折はこの十年間で倍増、小・中学生の八パーセント、高校生の一六パーセントが骨折の経験をもつ」と発表、カルシウム不足が原因か、と取り沙汰された。

日本は火山国で、土中のカルシウム分が少なく、植物や水中にもその成分が少ない。このため日本人は海藻や小魚をよく食べて、その不足を補っていたが、食事の欧米化でこの知恵が失われてきている。成人一日の基準量は六百グラムとされているが、日本人は五百四十八グラムしかとっていない。

●熟年になつても学校と縁が切れない? 日本人

生涯教育 学歴をいたずらに重くみる風潮が行き過ぎた受験競争をもたらした、との反省から、「個人の向上への努力を正当に認める学習社会を目指そう」という生涯教育の意義が強調されはじめた。今年六月の中教審の答申を受け、文部省も本格的な事業に取り組み構えを見せており、また放送大学も六十年から学生を受け入れる方針を定めるなど、生涯教育はビジョンの段階から実行の段階へ動きはじめられている。

答申では、まず成人期の教育として、成人への学校教育の開放、学生入学、大学の通信教育、放送大学など開放型制度の充実、さら

に大学院や短大も活用し、専門的・職業的な技術を身につける場にするのをあげている。また、多くの人が学習に参加できるように、情報の提供、相談に応じられる組織を整え、さらに勤労者の職業能力の向上や技能再開発のために、企業は夜学や通信教育に参加できるように配慮する、などを提唱している。

これを受けて文部省は、来年度から、トレーニング室や研修室を備えた特別体育施設をふやし、新設される小・中学校の体育館にはミーティング室を設けるなど、「生涯教育センター」づくりにも乗り出す。

クウエート大使

今井隆吉

■ 特別寄稿 ■



■ 細部にこだわらずに大局の動きをつかむ

中東や石油について原稿の依頼がある
とまず考えるのは発刊日が何日かとい
点である。それによって何月何日のニュ
ースまで織り込めるかが決まる。今日書
いて二日が三日後に活字になる日刊紙や
週刊誌の論評なら別だが、書いてから読
者の目に触れるまで一カ月以上もあると、
現在の中東の目まぐるしい情勢の変化ぶ
りでは、その間に、何が起きて話が変わ
ってしまうかわからない。この稿を書い
ている十月二十九日、アメリカ上院は早
期警戒レーダー機AWACSをサウジア
ラビアに売る事を承認したとニュースが
流れている。遅かれ早かれそうなるだろ
うと思っただが票決は五十二対四十

八と接近し、それまで報道されていた常
識から言うところレーガン大統領の逆転勝ち
である。アメリカがサウジの軍事力増強
に何かと肩入れしている最近の状況から
すると、もしこの売却が成立しなかった
なら米側にとっては湾岸防衛構想の一步
後退になるし、何より米国内の親イスラ
エル勢力がそれほど強大なのかと言う事
で穏健派アラブ諸国にとっては中東和平
の将来の見通しは暗くなり、かつ長期的
にはアメリカ離れの促進につながったで
あろう事は間違いない。AWACSがサ
ウジに引き渡されるのは四年先の事だが、
売却承認はそれだけの象徴的意味を持つ。
今まで「金は出すが主導権はとらない」

建前だったサウジが、最近ではフアハド
皇太子の八項目提案で、イスラエルの生
存権を暗に承認する等積極的な動きを示
し始めた時に当たってのアメリカの立場
の明確化は、キャンペーン・デービッド合意
(CDAと略称される)以後の中東政策
新時代に一つの方向づけを与えた事にな
る。

逆に言うところ、情勢が日々に変化し、物
事の動きが激しく、かつある意味で情勢
過多の中東で個々の事件に着目し、その
たびに軌道修正していたのでは長期戦略
は樹てられない。十月二十九日はOPE
Cジュネーブ総会の日である。三十四
ルの統一価格は決まるだろうが、実際の

各産油国の売値はまた別問題である。十
一月十日はリヤドで湾岸六カ国の元首会
議で湾岸共通安全保障が議題と噂される。
十一月二十五日からはモロッコでアラブ
連盟首脳会議、十二月初めアブダビで再
びOPEC総会と続く。アラブEC対話
も予定に上っているし、パレスチナ自治
に関するエジプトとイスラエルの対話も
再開、一方スーダンとリビア国境には両
軍兵力が結集している。十一月半ばには
米国とエジプトの合同大演習「ブライ
スター」が予定されB52の米本土からノ
ンストップ爆撃演習の他、スーダン、オ
マンを巻き込んでRDF(緊急展開軍)
の大デモンストレーションとなる。いず
れも中東の将来とのかかわりは大きく、
一々それらの成果を待っていたのでは、
結局いつになっても「見通し」の原稿は

書けない事になってしまふ。もつと大きな「流れ」の見極めに努力を集中する事が、わが国の中東政策の基本としても必要であろう。

さらに加えて中東には「いずれは不可避」と言われながら、時期の指定はまっ

たくされていない「事件」がいろいろある。ホメイニ師没後のイランがどうなるかというのは典型的な例である。シリアとレバノンの関係、パレスチナ問題における Jordandan の役割、イラクとクウェートの関係等、嘘か本当かは事件が実

際に発生するまで確かめようは無いが、一見もつともそうな情勢や噂も山ほどある。サダト大統領暗殺もその意味では必ずしも予定外の事件ではなかった。ジョン未亡人が「いつ夫が殺されるのかそれほどばかり心配していた」と語り、米国が過

去数年に二千五百万ドルをサダト身辺警護に投入していたというだけで暗殺がまったく想像外の出来事ではなかった事は明らかであろう。問題はそのタイミングが中東の今後にどう影響するかである。

共通言語で結ばれるアラブ二十一国

故ナセル大統領の汎アラブ社会主義を棚上げし、ソ連との同盟を断ち切り、パレスチナ問題、特にヨルダン川西岸の解

決を二応二の次としてCDA協定によりイスラエルとの「単独講和」を図った。アラブ諸国の憤激は買ったが、東部戦線の不安が無くなって軍事支出は減少し、資本主義諸国との結びつきが強まって外資が流入するようになった。反面、国内経済の不平等増加とイスラム教条主義者たちの不満は強まり、去る九月五日には千五百人逮捕という強圧手段に出た。「エジプトをイランやレバノンのような分裂国家にしないため」と同夜のラジオ放送で説明している。結局のところ来年四月

のシヤール、サウジのファイサル前国王、北イエメンのガシム大統領等々。そう言えばイラクもシリアも政権交替は平和裏に行なわれたとは言いがたい。歴史的に見て専制的な君主が毒殺や刃刃に倒れたケースは何もイスラムの専売特許ではないが、アラブ・イスラム世界に例が多い事も事実である。そもそも暗殺者(assassin)の語源は、十一世紀にシリアやイランの山地の堅固な陣地に拠って要人達の生命を次々に奪ったアサシン教団から来ている。

のファティマ王朝の統治が長かった等、両派はアラブ世界の各地に住み、しかもそれぞれが多数の分派を持ち相互間のいがみ合いは歴史的にも激しかった。イランでイスラム教条主義の革命が成功した時にイラク、バハレーン、クウェート等多数のシリア派住民を抱え、支配者がスンニである国々が革命の輸出に著しい警戒の念を示したのはこのためである。実際問題として今日の中東諸国の国境の中には歴史的経緯で成り立っているものもあるが、大多数はオスマントルコ帝国崩壊後部族や宗教と無関係に列強の利害調整上恣意的に引かれたものが多い。イランを形成しているのはペルシヤに加えて東にバルチスタンの一部、北にトルコマン、西には本来アラブであるフゼスタン



●サダト暗殺直後の混乱状況(共同提供)

に予定されるシナイ半島全面返還を前に、敬けんなモスラムである大統領自身は教条主義者の集団であるモスラム同胞が団軍軍の中に浸透しているのを防ぎ切れずその兇弾にたおれたというのが今のところの通説である。サダト大統領が今後どのようなシナリオを描いていたのか、やりかけた仕事は瓦壊するのそれとも違う方向をたどるのかというのがこれからの問題である。

イスラム世界では目立った指導者が生命を全うし得なかった例は多い。イラン

アラブ人を強いて定義すれば「アラブ語を話し自分をアラブと思っている人々」という表現があるくらいで、実際には七世紀に始まった予言者モハメッドによる大征服、肥沃な三日月地帯(今日のシリア、イラク等)の住民、それに中央アジア草原から侵入して来たトルコマン、モンゴル等が混然一体となっている。民族的独自性と非アラブ言語を保ち続けたペルシヤは同じイスラムでもシリア派で他のほとんどの国がスンニ派であるのとは趣を異にする。ただしエジプトもシリア派

(一同産油地帯のほとんどがこれに含まれる)、クルドスタンの一部等である。各流のキリスト教徒、アラブ各派、パレスチナ人(一九七〇年にヨルダンから追放されたPLOを含む)の利害が入乱れ、国が幾つにも分裂しての内戦から「景勝の都」ペイルートを瓦礫の山と化してしまつたのがレバノンである。地図の上には国境線は引かれていてもヨーロッパや日本のような「国民国家」の概念は比較的

薄く、それよりも部族、宗教、「アラブの一体」の意識等が優先する事が多い。最近では多少変化しているが、アラブ人同

志なら他の国に行くのに入国査証は不要とか、アラブの元首が他のアラブ国訪問に正式儀礼を必要としないといった風習

であった。何といってもアラブ二十二カ国共通言語というのは大きい。

過剰防衛の強硬策を貫くイスラエル

サダト暗殺後を考えるには故サダト大統領の事業そのものを理解する必要がある、それにはこのようなアラブ世界への「侵入者」であるイスラエルとの抗争がいかに重大なテーマかという点から出発せねばなるまい。エルサレムは世界の三大一神教であるユダヤ教、キリスト教、イスラム教の共通の聖地であり、十字軍を例にとるまでもなく多くの抗争の焦点でもあった。近世に入ってからはお互の巡礼を妨げないという形で共存体制が成立っていたかのようにある。しかし十九

世紀末にフランスにシオニズム運動が起こり、三千年前のソロモンの王国、聖書に言う「ミルクと蜜の溢れる地」に復帰する事が全ユダヤ人共通の大目標となつて話は面倒になった。列強のそれぞれの思惑が働いたに違いないが、一九四七年国連決議でパレスチナを分割してユダヤ国家を作る事になった。その時点でのパレスチナ人口はユダヤ人五十万に対してアラブ人百二十五万だった事もあり、千年来ここに住み着いて居たはずのアラブ人にとってははなはだ心外であつたろう。

その後四回の中東戦争でイスラエルの占領地は拡大し、それに伴ってパレスチナ難民も国連に登録されているだけで百八十万人、湾岸諸国に住み着いている人をあわせると三百四十万人に及ぶ。この人々が「不当に占領された父祖の地」を武力にかけて回復しようとし、イスラエルの存在そのものを否定し、その絶滅を誓っている。モハメッド昇天の聖地回復と合わせて、これは「アラブの大義」であり、今日でもアラブ諸国はイスラエルと国名を呼ばず、「シオニスト集団」で

あるとして、アラブ圏で発行される地図には記載すらされていない。そのイスラエルがGNPの三〇%以上を軍事費に注ぎ込み三桁インフレに悩みつづ中東第一の軍事強国として周辺を威圧し続けてこられたのは、強国なアメリカの援助のお陰である。三十五年間も敵地の真中にあって生存を護り、それに失敗しなかったのナチス・ドイツの下でと同じ運命を辿ると信じ、攻撃は最良の防衛という事で、現状では公平に見ても過剰防衛の強硬策を繰り返している。

やはり鍵握るアラブの雄「エジプト」

サダト大統領がイスラエルと「単独講和」を結んだのがいかに破天荒な出来事だったかがわかるであろう。「裏切り行為」としてエジプトはアラブ連盟から除名され、十月十日の国葬は特別な関係にあるスーダン、オマン、ソマリアを除く全アラブがボイコットした。対イスラエル抗争は複雑なお家の事情をそれぞれかかえ、中東のイスラム世界を糾合する、極めて重要な象徴的テーマであるにかかわ

らず、アラブ最強国エジプトが抜けたのでは実際問題として戦勝の見込みは薄く、力による解決の見通しは立たなくなる。一九七三年の第一次石油ショックが、エジプトを主体とするイスラエル攻撃いわゆる第四次中東戦争に際して、アメリカに圧力をかけるべく、産油諸国が対米禁輸に踏み切つて始まった事は記憶に新しい。

アラブの群に再び呼び戻そうとする呼び掛けがあちこちから聴こえて来る。何しろ人口四千五百万、国軍二十七万の大國である。その上、アラブ圏の医師と教師の極めて多くがエジプト人の出稼ぎだと言われるほどのインテリであり、歴史的にも永年にわたつて国の形態を維持してきた「アラブ世界の雄」でもある。石油収入こそ巨大であるが、移民労働者を除いた人口は数百万に過ぎぬ湾岸産油国に

とつて、エジプト抜きの中東安定は困難であろう。千四百年にわたるイスラムの歴史を通じて、武力こそが真の力であり、カリフ（教主）はあつても実力は常に武人の手にあつた。ちょうど天皇の下に将軍があり、時にその下に執権が居たわが國の歴史と酷似しているが、違ふのは武人の忠誠は指導者個人の武名に対するものであり、常に、王朝内で武力闘争が繰り返されていた点であろうか。サダト大統領がエジプトの武名を挙げたのは、第四次中東戦争でスエズ渡河に成功し、緒戦でイスラエルを大いに破つた事であつ

た。空軍出身のムバラク新大統領は、軍の中のイスラム教条主義者の追放に乗り出したが、果たして軍を掌握し切るかどうか今後の鍵と見られている。サダト死後、アメリカはF16戦闘機四十、M60戦車四百等三十六億ドルの武器援助の引き渡しを急ぐ事を決め（実際には対パキ

スタンを始めとする多くのコミットメントがあつて兵器生産はとうてい間に合ひそうもない）、AWACS二機を貸与した。隣りには三千二百台の戦車と五千機の軍用機を擁し、ソ連との結びつきが深いリビアも居る事である。しかし一方、アメリカがあまりにもムバラク新大統領に肩

入れする事は、かえつて本人にとつて迷惑だろうという説もある。アラブの世界は複雑である。表向き断交はしていても、エジプトと他の国々の交流は実はそのまま続いているかのようだ。一方、パレスチナ問題がアラブの大義であると同時に、湾岸諸国にとっては重大な内政問題なの

は、これらの国々に移り住んだパレスチナ人が、それぞれ社会で重要な地位を占めるようになってきているからである。パレスチナ人の教育程度は高く、エジプトと共にアラブのインテリの供給源になっている。

中東進出の隙狙うクレムリンの首脳たち

いろいろな話題に触れたが、この小文の中で、中東情勢の複雑さをその歴史的背景を含めて論じつくす事はもちろん不可能である。ただ想像できる事は、サダト構想の基本が「力に頼らない」、パレスチナ問題の解決であり、その中にアメリカ

カと穏健派アラブ諸国を巻き込む事で、イスラエルをのっぴきならぬ立場に追い込み、かつソ連の介入をできるだけ排除する事にあつたのではなからうかという点である。アメリカが表向きはあくまでも否定しながら、あらゆるチャンネルを使って「PLOと話合う用意あり」のシグナルを送り始めたのは、この遺志に込めていられるようにも思われる。この説に従うとPLO傘下八軍団の中の過激派を押し立て、亡命政府としての穏健路線を打ち出してみせる事がアラファト議長の器量の見せどころという事になる。イスラエルとしても「是非善悪にかかわらず」、アメリカが全面的に支持してくれる時代

さに親物であろう。アラブの中にシリアやリビアのような強硬派があり、パレスチナ国家問題を手に扱おうと Jordans の存立にもかかわるだけに皆が慎重に構えてお互の次の出方を窺っている感がある。一つ間違えばソ連は、中東進出のチャンスを狙っている。今までのソ連中東政策はアメリカに比較してさえない器用で、多くの人員や兵器を投入した割に効果を挙げていない。今日ソ連が拠点と呼べるのはリビア、エチオピア、南イエメンぐらいで、イラクとシリアはアラブ内部抗争にソ連を利用しては過ぎない形跡がある。アラブ半島の産油国はクウェートを除いてソ連と外交関係さえ持っていない。それにしてもソ連という超大国が中東にちよつとも隙を見つけたら進出を図るであろうし、アメリカが慎重に行動するよう要望する声が強いのには中東を米ソの争いの場にしてしまったら（全面的軍事対決という事は両国の補給能力を考えるとほとんどあり得ないはずだが）、中東諸国の利害

は、本質的に無視されるだろうとの危惧の念から来ている。世界の石油埋蔵量の半分以上を持ち、しかもデリケートな不安定均衡にあるこの地域が、多少なりとも安定の方向に向かうのと、より大きな混乱の舞台になるとは大変な違いである。

辛いサダト暗殺直後各当事者は冷静に行動し、大事に到らなかつた。ムバラク新大統領もベギン首相も従来路線の継続を誓っている。しかし、サダト構想というようなものもあつたとしたら、この芝居はまだ筋書きの先も読めぬ中に肝心の狂言回しが突然舞台から消えてしまった事になる。ムバラク大統領に、アラブ諸国との協調を図りながらこの構想を引き継いで行く器量があるだろうか。レオン中東政策は「黒子」の役に徹し切れるだろうか。ベギン首相は国内を押さえ切るだろうか。サウジを始めアラブ諸国はそれを注目しているだろう。そこに隙がでるかどうかが、クレムリンの首脳たちは目を離さずにチャンスを探っているに違いない。



●イスラエル軍の閲兵式（共同提供）

が終わりに近づいたという事になると、今までの通り強硬姿勢だけで貫く訳にも行かない。イスラエル内部も複雑な人種問題を抱え（同じユダヤ人と言っても出身地によって考え方も属する社会層も違っている）、またシナイ半島を全面的にエジプトに返還する事には強い反対がある。ベギン首相がこれをどう捌くか、ま

どあり得ないはずだが）、中東諸国の利害

一九八一年十月二十九日記。なお本文は筆者の全くの個人的見解です。

正親見一氏に聞く

日本原燃サービス株式会社社長

エネルギーに半生かける

石油危機以来、「省エネルギー」の合い言葉は、官庁・民間を問わず、個人の家庭にも徹底し、「省エネタイプ」の電気製品、車などが当たりまえになったきょうこのごろ。しかし、それでも日本人のゼい沢への慣れを戒しめ、憂えている人がいる。

正親見一（おおぎけんいち）氏（六十九歳）。日本原燃サービス株式会社社長。

東京電力の役員でもある。

氏が現在、心血を注いでいる仕事こそ、日本のエネルギー確保の重要な鍵となる

「原子燃料の再生産」事業だ。

正親氏の半生は電気、つまり、エネルギーの歴史でもある。

「私が東電に入社した当時は、電気が売れなくて、セールスして歩いたものですよ。電気を売るには、電気製品をつくるといふことで、電気パン焼き器とか、いろいろ考案しました」

もちろん発電は水力発電。五燭（いまの五ワットぐらいの明るさ）の電球を、契約した家庭に配って歩いたという。昭和十年ころの話だ。

「あれよあれよという間に、電気が無ければ生活できないようになってしまった。発電も火力発電、原子力発電と移り変わり、当時を思うと隔世の感がありますね」

そして、エネルギー問題の解決なしに、国が生き延びることはできなくなっている。

「むかしは、経済成長に合わせて、エネルギー政策に合わせた経済成長ということが根本になるんですね。省エネルギーが徹底した理由は、ここにあるのではないですか」

経済も食糧も、つまり、日本の国民の将来は、エネルギー問題の解決によってしか約束されないということを、正親氏は強調する。

原子力エネルギーの確保こそ重要

しかも日本は、資源の乏しい国である。『限りある資源』から、いかにしてエネルギーを生み出し、安定した供給をしていったら良いか。

「これはもう、原子力エネルギーしかないんですね。日本は燃料を持っていないんですよ。したがって、原子力発電所がどんどん定着してきた——これはここ二十年で、国民にはその必要性が理解されたと思っっています。その原子力の経済性・安定性を確保するには、どうしたら良いのかということになりますね。それには、核燃料——われわれは原子燃料といいますが、それを再生産してリサイクルするしかないということです」

現在、東京電力・関西電力で、原子力発電所の占める割合は二〇〜三〇%であ

るといふ。その他の電力会社でも、原子力の占める比率は増えてきているのだ。

原子燃料の再生産を国産で

「原子燃料の再生産は、現在イギリスとフランスに委託しているんですよ。十年契約ですけど、その間に、どうしても原子燃料再生産の国内体制を確立させなければいけないということで、この日本原燃サービス株式会社を設立したわけです」

原子燃料の再生産とは、どのようなことなのか。

「つまり、使用済燃料にある有用なウラン、アルトニウムを繰り返し利用するんです」

順を追ってみると、

天然ウランの採鉱

製錬

濃縮

成型加工

発電

原子燃料再生産

というサイクルになる。そして再生産がその要というわけだ。

わが国では、東海村に「動力炉・核燃



料開発事業団”の再生産工場がすでに稼働し、ここでさまざまな技術が蓄積されている。

そして昨年、日本原燃サービス株式会社が設立された。昭和六十五年度完成を目ざしているわが国初の商業規模の再生産工場の課題はと水を向けると、「安全性の確保と環境保全の徹底的な追求、これにつきまます」といい切る。

世界最高の再生産工場に

「再生産の技術そのものは、二十年以上の実績があり既に確立されています。しかし、私はいまだ満足できない。安全性をより一層確実なものとし、稼働率を向上させること、そして、環境保全については、全力を傾注する。そのために、内外の最新最高の技術をどしどし取り入れて、世界最高の工場をつくりあげる決

意です。」

では、このように貴重なウランとブルトニウムを再生産した残り、つまり、現在高レベル放射性廃液と呼ばれているものの処理はどうするのだろうか。

「これは濃縮したあとガラス化剤を混ぜてガラス固化するなど、安定した形に処理する予定です。しかし、日本は資源の少ない国です。この高レベルの放射性廃棄物は稀少金属の宝庫ですよ。棄てちゃいけない。これから研究・開発して、利用法を商業化すべきですね」

電気の使いすぎを考えなくては

昭和十年、東京電燈に入社した正親氏は、「半世紀、みなさまからの電気代で給料をもらってきたんだ」と笑う。

「しかし、本当にみんなよく電気を使うなあ。夜、外に出ても、明るいんだからね。びつくりするよ」

日本人は、欲望を押しやることをしなく、とくに戦後世代はそうで、これだけエネルギーを使える生活がつづくと思うのは間違っていると、断固とした口調。

海外でも日本の原子力平和利用を説く

日本の原子力保有の必然を、国内だけでなく海外でも説く。

ウランの輸入元であるオーストラリア

でのこと。

「労働組合の連中と話したんですよ。核拡散になるから輸出はできないというんだな。核兵器にすぐ結びつける。核の平和利用に徹底していることでは、日本が一番ですよ。核の脅威にさらされたのも日本だけ。戦争を永久に放棄しているんだからと説明するんですがね」

「それでもね、貯蔵された原子燃料が不安だというんだよ。だから貯蔵することはない、すぐ発電に使う。もし少々の貯蔵が心配だったら、これは国際管理にすればいいんです」

もっと原子力について理解してほしい

日本人にもわかって欲しい。原発の問題、核の問題、少々勉強不足なのではないか、と。

「なんでもかんでも一緒にする。兵器としての核保有と、平和利用としての原子燃料の保有は違うんです。そして、原子燃料は決して危険なものではない。炭鉱の悲惨な事故を見ると、はやく原子力エネルギーを確立させなければなりませんよ」

二十歳は若く見える正親氏。信念に燃え、確実に階段を登ってきた人だけが持つ大らかなさを感じる。

趣味の囲碁やゴルフを楽しむ余裕は、まだまだなさそうだ。(記・土佐林真木)

天然ガス価格と石油価格

●日本エネルギー経済研究所

●一九八〇年の産ガス国攻勢

昨一九八〇年、世界の天然ガス貿易価格は大きく揺れ動いた。五月タイプ、六月アルジェでのOPEC総会と相前後して、アルジェリアを始めとするOPEC産ガス国は二度にわたって会議を開催し、天然ガス販売契約の統一化、天然ガス輸出フロア価格の設定問題を協議した。アルジェ総会では、「天然ガス価格を原油価格とリンクさせ、統一的な炭化水素政策を樹立し、天然ガス開発にインセンティブを与える」というコミニケが採択されるにいたった。

OPEC全体としての天然ガス価格についての意思表示がなされたわけであるが、天然ガス価格を一体どのレベルで原油価格にリンクさせるかは不明確なまま残された。この点が実は肝心なのだが、一九八〇年の天然ガス価格をめぐる天然ガス輸出国と輸入国の論争において焦点となったのは、CIFレベルなのか、FOBレベルなのかという点であった。両者の違いは、原油にくらべて約六倍といわれる天然ガス(LNG)の輸送コストを、どちらが負担するのかということであり、OPEC産ガス国の中では、アルジェリアがFOB段階での熱量換算原油等価の急先鋒であった。

アルジェリアの場合、イギリス、フランス、スペイン、アメリカと多様な輸出先を持っていることもあって、その強硬

な態度は広く注目を集め、多方面にわたる反響を引き起こした。もつとも端的な価格紛争はアメリカとの間に見られ、アメリカのエルパソ社向けのアルジェリアLNG(年間約七〇〇万トン)は四月以降、輸出停止となってしまった。フランス向け輸出も停止にまではいたらなかったものの、第二四半期は極端な低水準に落ち込んだ。

一九八〇年のLNG国際貿易量は、約二三〇〇万トンで、その七〇%を輸入した日本に対しても、積極的な価格攻勢が浴びせられた。アラスカ、ブルネイ、アブタビ、インドネシアいずれの場合も、若干のバラつきはあるもののCIF段階では原油等価の水準まで輸入価格は上

天然ガス価格をめぐる一九八〇年の目まぐるしい動きは、天然ガス輸出国、とくにアルジェリアにとっては、当初の目論見どおりの展開とはならなかった。エルパソ向けの輸出は依然停止したままであるし、小規模ではあるが、イギリス向けのLNG輸出も、長期的な価格条項の折り合いがつかず、九月末をもって停止してしまっただけの成果は、ベルギーからもたらされた。アルジェリアからベルギーのデイストリガス社への年二五〇

昇した。さらに、交渉の決着自体は一九八一年にズレ込んだが、インドネシアからの年六五〇万トンの増量契約(一九八三年以降)では、初めて天然ガス価格を原油価格とFOBレベルでリンクすることになった。

天然ガス貿易量では、LNGの約四倍の規模に達するパイプライン取引価格についても、強硬OPEC産ガス国の勢いに触発されたかのように、カナダ、メキシコ、オランダ、ソ連等の輸出国が、大幅な価格引き上げを求めて交渉に入った。以上のような産ガス国の価格攻勢は、一九七九―八〇年のイラン革命を契機とする石油価格の急騰を直接の要因としているのはいうまでもないが、一九八一年に入ってから石油需給の緩和、石油価格の低落傾向を見るにいたって、その勢いは目立って衰えた。

万トンのLNG輸出は、一九八二年開始の予定であるが、旧契約では一九七五年一月の基準価格を「三ドル/百万BTU」とし、ロッテルダム市場の石油製品価格の変動にしたがって調整することになっていた。両国はこの価格条項を、一九八一年一月の基準価格を四・八ドルとし、これをベルギーの輸入原油価格とLNG生産国の輸出原油価格にしたがい、熱量換算ベースで四半期毎にエスカレートさせることに改訂した。アルジェリアとして

●一九八一年の妥協

は、初めて原油価格をエスカレーション指標に導入してきた画期的な価格条項となつたわけであるが、一九八一年一月時点の基準価格四・八ドルについては、相当な譲歩を余儀なくされたものと見る事ができる。なぜなら、同時点のアルジェリアの原油価格四〇ドル／バレルをそのまま熱量換算すれば百万BTU当り六・七ドルとなり、この水準と比較するとアルジェリアの支払った代償は、かなりのものといえるからである。

とはいえ、アルジェリア、ベルギーの新価格決定方式はその後、追随者は現われていない。ベルギー向けの輸出規模が比較的小さいというのほかに、改訂契約にはアルジェリアが他の国とより穏やかな価格条項を締結した場合は、そちらの方を適用するという、いわゆる

“Most Favored Customer Clause”¹⁾が含

● 天然ガス価格と石油価格

アルジェリアを中心に一九八一年の天然ガス価格動向を述べてきたが、程度の差こそあれ、アルジェリアの妥協は世界の天然ガス貿易価格動向に一般的なものであった。カナダ、メキシコからアメリカ向けの輸出価格は、フオーミユラ上は当然上昇すべきであつたにもかかわらず、四・九四ドルで凍結された。アルジェリア同様、強硬な主張を展開していたソ連もある程度柔軟な姿勢に転じ、最終的な決着にはいたっていないものの、原油価格

まれているらしいことも一因と考えられる。

現在、一九八〇年のアルジェリア、アメリカ交渉と同程度あるいは、それ以上の耳目を集めているのが、アルジェリア、フランスのLNG価格交渉である、十一月に予定されている両国首脳会談までに二年近く延々とつづいてきた交渉にケリをつけるべく、精力的な折衝が行なわれているが、基準価格の設定レベルは別にして依然、原油価格とのリンクの可否がネックになつている模様である。両国とも、技術経済協力を含む多面的な二国間関係の枠組みの中の決着を考えているようであり、その意味では、政治的妥協の結果としての価格ということになりかねないが、今後の天然ガス貿易価格動向に、アルジェリア、フランスの決定が重大な影響を及ぼすのは間違いない。

に加えて石油製品価格をも含むエスカレーション指標の設定に向かつている。

以上のような一九八一年の価格動向は、アメリカの天然ガス需給・井戸元価格規制、ヨーロッパ向けソ連天然ガスパイプ

ラインプロジェクトに対する信用供与等の要因による部分もあるが、基本的要因は、石油需給の緩和と、その結果としての石油価格の低落といつてよいと思う。

極言すれば、石油価格が急騰した一九八〇年に圧倒的な攻勢をかけた産ガス国は、

一九八一年の石油価格状況を見るや途端に退却を始めたのである。

各種エネルギーの価格は、連鎖的に動く場合もあれば、比較的独立した動きをすることもある。一九七九年から一九八一年にかけては、石油、天然ガス、石炭価格の大幅な上昇期であり、かつ、調整の始まるの時期といえようが、天然ガス価格の場合、あまりにも石油価格の動きに密着しすぎているのではなからうか。

天然ガスと石油の場合、市場のかなりの部分が重複していること、比較的代替が容易なこと等の価格連関の強さを意味する特質を、互いに有していることは確かである。とはいえ、天然ガスの需給バランスをみると、アメリカとソ連の二カ国で世界の天然ガス生産の六五%、同じく消費の六二%を占めている。つまり、天然ガスの需給構造の中には、石油の場合ほど中東・OPEC的な資源の偏在が存在しないといふことができる。このことと、天然ガス貿易の所要資金の莫大さ、長期にわたる契約期間、取引相手の固定化という特質を十全に活用しないかぎり、天然ガス価格を石油価格から相対化することはできないと思われる。

(I・U)

新しい農村像を求めて

●政策科学研究所

農村整備がテーマに

歴史的に今日まで、さまざまなか

で「農村」なる言葉が広く使用されてきた。この農村は高度経済成長期にあって、人口流出、スプロール化、兼業化などの進行および農村居住者の生活様式、価値観の多様化のなかに大きな変貌体をとげた。農村は食料生産、良好な自然環境など国民生活へ重要な貢献を果たしており、今後、国民に食料を安定的に供給する役

「農村」対「都市」のあり方

戦後における農村を論ずるときに、農地改革、農地法があげられるが、今日において転換期とみなせるのは、農業基本法の成立である。これは農業・工業間の生産力格差是正という観点から、耕地規模の拡大、機械化などの近代化の方向の提示である。

この農業の近代化の進捗より、わが国の工業を中心とする経済成長は高く、都市部へ集中的な投資と、これに伴う人口増、地価高騰は、都市が抜きさしならぬ状況に追いこまれ、都市問題が激化する。

割は変化しない。農村は食料供給の場だけでなく、農村居住者の生活の場でもあるが、都市化の進展によりさまざまな問題を有している。

この農村が食料供給の充実、生活改善をはかっているためには、農村整備が重要な課題として提起されている。農村整備においては、その対象となる農村地域を明確にし、効率的・総合的に推進する必要があるが、農村地域のとらえ方はさまざま観点から論じられ、明確に規定されていないので、いくつかの論点から農村地域について述べてみたい。

一方、農村では労働力の大量流出、兼業化の急速な進行によって農村社会が崩壊の危機に立たされるという事態のなかで、「農村対都市」という問題意識は、新たに浮上することになった。

農村・都市問題を解決する統一的なとらえ方が模索され始めるなかで、一つの解答が全国的視点に立った「新全総」あるいは「日本列島改造論」であった。これは農村を都市並みの施設整備をし、交通、情報ネットワークで農村と都市の距離を縮め、農業を工業化することによって、問題を解消することになった。

すなわち、農村・農業を都市・工業の姿につくり変える、いわゆる近代化という方向で農村の未来の可能性をみる見方であった。しかし、この路線はニクソン

・ショック、石油価格の高騰を契機に、高度成長経済から低経済成長に移行するなかで変更を迫られ、農村・都市のあり方の新しい原理が求められることになった。

体系的な農村・都市論は、いままで出されていないが、地域主義、ムラ共同理論といった近代化批判の新しい思想的潮流は、一定範囲ではこれに答えるものであった。この両者の思潮にみる農村・農業の特徴をあげると、つぎの諸点が指摘される。

(一) 近代主義における農村・農業認識
① 農業発展の方向性を機械化・システム化に求める見方である。

② 農業の大規模化・システム化は、経営体として「イエ」ではなく、「個人」ないし「法人」を、その生産組織としては「ムラ」ではなく、システムの機能集団を志向する点である。

③ 対都市との格差解消あるいは調和的発展の方向性を、「農村の都市同質化」という点に求めている点である。

(二) ムラ共同理論、地域主義の農村・農業認識

① 農業を工業とは、異なった原理においてとらえようとしている点である。すなわち、農業は、自然の営みと人の働きによって生産するという点で、工業との差異を見出す点である。

② 「ムラ」の生活―生産共同体として再評価し、そこに農村復興の手がかりを見出そうとしている点である。

③農村と都市の統一、調和を追求するさ
いに、両者の文化、生活原理の固有性を

農村は空間的 領域

上述のような農村・都市関係論は、近代以降論ぜられてきたが、農村と都市の対立的側面が意識されるようになって、それは社会的・経済的側面を通じた課題としてとらえられていたのであって、農村・都市の空間的領域の問題としては、とらえられることが少なかったように思われる。

たとえば、農村・都市関係について、「対立」「連続」を論ずるときに、文化的側面における共質性を重視し、西欧諸国と異なった文化発展形態のなかで、農村と都市との間には均質性、相通性が維持されており、農村と都市との差は相対的なものであり、その間には、断絶を想定するのは事実にあわないとする考え方がある。これには、盆地にみられるような単位、水利用という媒体から流域という単位でとらえてゆく方向がある。

一方、都市を一つの実質的な空間であるという認識のもとに、市街地空間Ⅱ形態的都市空間を限定して把握しようとした公式上の統計的試みは、昭和三十五年度実施の国勢調査における人口集中地区(Densely Inhabited Districts)の設定

重視することである。

であった。

すなわち、これは戦後における急激な都市膨張に対応したというよりも、都市側の要請によって、都市の形態的領域を画する意味をもったといえる。これは、農村・都市関係が「対立」であれ「連続」であれ、文化的側面での連続と形態的な違いを踏まえただうえて、農村・都市関係をとらえてゆくことが必要とされよう。

計画論の発展こそ重要

このように、農村地域を想定してみて、現状の法制度におけるとらえ方をみるときに対象となるのが、「都市計画法」と「農業振興地域の整備に関する法律」である。

前者は、都市に主眼を据えた土地利用に関する事項を規定し、農業的土地利用については、基本理念のなかで農林漁業との調和という観点からのとらえ方である。後者は、農業の振興をはかる必要がある地域について整備するとあるが、都市計画法のように、都市的土地利用における諸関連施設整備を包括的に示したものではないため、農業的土地利用計画として成立していないと考えられる。

よって、農村地域とは、現在の状況から農業的土地利用が全体的に卓越的であって、集落をひとつの核単位として空間が組織され、かつ、都市との関連性において、機能的相補性をもって、ひとつの上位地域を形成しているような地域であることが必要となろう。したがって、単に同質地域の視点のみではなく、機能的視点から農村をとらえたとき、農村側からの機能的統合のおよぶ範囲をもって、農村の空間的領域ということもできよう。

また、農業振興域のとらえ方も、構想的レベルのものといえよう。しかし、農村地域の空間領域としては、基本的に同法の農業振興地域の規定が、農村地域の空間規定と同質な意味合いを法律技術的には有していると考えられる。また、

両法は、性格上土地に係る私的権利を調整する機能を有することも、行政区単位を一つの基準としていることになる。そのため形態的、本質的に農村・都市関係を分断することになるが、これには、広域計画として対処するとしているものの実態空間を反映できるものではない。これは、両法が行政計画法である以上、その行政空間領域を規定しなければならぬところの限界があるといえよう。したがって、農村なり都市なりの、実態的な位置付けとは異なる両法の地域のとらえ方が生じたものと考えられる。

しかし、農村・都市を現状のままで放

置することはできず、社会経済の変化に対応して、さまざまな施策を実施しなければならぬ。そのためには、計画論の発展が必要であり、農村のとらえ方と計画との資合性、妥当性の説明が重要となつてこよう。計画論からみてゆくと計画主体、計画内容、計画空間が定めなければ計画として機能しないことになる。

その意味で、行政区を地域のとらえ方の基本単位として位置付ける必要性はでてこよう。それは、行政サービス、日常生活の一部が行政単位で機能していることにあるが、わが国の行政区は中心地区を核とする広域的な地域であることが特徴となる。したがって農村地域の空間的機能である農業生産、農地、水利等の自然条件、農村居住者の生活空間のとらえ方を、いかなる単位にするかが課題となろう。

以上、いくつかの論点から農村地域について述べてきたが、新しい農村像は、農村・都市の固有の価値認識の明確化とその定着をはかることが最も重要であり、これを踏まえて農村地域としてのまとまりのある姿を形成していかなければならない。いま、農村・都市いづれにおいても、多様な価値が見出されつつあるなかで、思想、計画論等の深化が農村・都市の未来の可能性を約束してくれるであろう。

(義村利秋)

フォーラムズ・インタビュー

おじやまします

大山のぶ代さん
俳優・加藤秀郎部会

砂川 啓介さん
俳優・加藤秀郎部会

夫妻

部会唯一のカップル

「体操のお兄さん」で知られた夫は、お昼のワイドショウの司会者。妻は、いま子供たちに人気のある「ドラえもん」の声の出演者。お仕事が忙しいせい、スレ違い生活が多いというご両人。そんななかをおじやました。

お二人は、21世紀フォーラム設立以来ただ一組の夫婦メンバー。部会活動などに積極的に参加していただいています。

？ この会に参加されてどうですか。

砂川 正確にいうと、僕は一回ぐらいあとに入ったんです。

大山 そう。加藤先生からお誘いがあって、最初の部会に出たらすごく面白いんで、この人も引っぱり込んだわけ。部会で話した話題や会報、見学会のことで徹夜で話をしたこともあるんですよ。

砂川 スペースシャトルの時は大変だったね。

大山 ほんと。一カ月ぐらいはその話題でつきなかつたわね。科学的なことや物理的なものなんて、私達夫婦には畑違

いのことなんだけど、だからよけい興味を持ってしまふのね。友達がきた時なんかでも、やっぱりフォーラムで話題になったことなんか話し合うの。私はとっていい所に参加させてもらったと思っています。

なれそめは鉄火場？

？ そういつていただけると嬉しいですよ。ところで、平凡な質問なんですがお二人の趣味は。

砂川 共通した趣味はゴルフとマージャンかな。僕達がつき合うきっかけになったのがそもそもマージャンだったし(笑)。ゴルフは、こっちがついてきたって感じかな。

大山 時間があれば、二人でコースに行くわね。年に四、五回は行くかしら。ゴルフの腕は、主人の方が一枚も二枚も上よ。

？ ゴルフでは、砂川さんを中心とした「砂の会」というのがありますね。

砂川 僕が級長で、この人が風紀委員なんですよ。メンバーはだいたい両方の

友達が多いですね。もう百人を越えていますよ。この会には「十二の掟・二十八の誓」というのがありましてね。これは、僕が決めるんですが、堅苦しいもんじゃないんですよ。

大山 たえば、みんなでスポンサーにゴマをすりましようとか(笑)。親睦会のようなもので、年に一回、ファミリーパーティーをするんです。それをお子さんたちがすごく楽しみにしているんですよ。

？ 会長を級長といい、風紀委員がいるゴルフの会って珍しいですね。

砂川 僕らは、風紀委員をつくる気は全然なかつたんですよ。ところが、佐々木信也さんの奥さんとうちのがやるっていい出すもんで……。

大山 態度の悪い人に注意を与える仕事なんですよ。この会は品位がある会なんだからって(笑)。

？ それでは級長で、風紀委員がおそばにいるんではご主人は、模範生でしょうね。どうすればこんな楽しい会に入ることができるんですか。

砂川 会員二名の推せんと、僕の面接が決まります。女性はたいてい決まりますよ。男性の場合は、僕より二枚目だとダメですね(笑)。

ドラえもんの金時計

？ 女性には、甘い(笑)。ところで、砂川さんご自身の趣味はなんですか。

砂川 お面を集めるんですよ。十八ぐらいたいの時から集めています。踊りをはじめたころ、友達に一つ見せてもらって、いいもんだなって思ったんです。これがきっかけかな。それに、自分のお面を舞台で使ったら好評だったんです。だから、よけい離れられなくなつたんですよ。

？ 奥様のご趣味は。
大山 時計を集めるのが好きなんです



砂川 啓介

よ。いま、六〇個ぐらいかな。自分で集めたり、お誕生日のプレゼントや、おみやげなんかで買ってきてくれたり。

砂川 デイズニー時計でも嬉ぶんだか(笑)。僕もかなり持っていますよ。

? 今日はおそろいの時計ですね。大山さんの首のところに付けていらっしやるのは、なんですか。

大山 主人のお友達からいただいたんです。これ、世界に一つしかない時計つきのドラえもんパッチ。真正正銘の金なんです。

? まあ、すばらしい。ご主人は、奥様の服装にはうるさいんですか。

砂川 いわない、いわない(強調します)。

大山 それでも、ドレスでも靴でもビツタリのを買ってきてくれるんですよ。

砂川 一番大きいのを買ってあげたいわ(笑)。

大山 また、そんなこといって(笑)。私なんか外国にいったら、モア・スモール。っていうんだから(チラッとご主人をニラム)。

庭は果樹園付き?

? 今日もご主人からプレゼントされたジャケットを着ていらっしやいますがお似合いですね。ところで、お二人はアイデアご夫婦ともお聞きしていますか。

砂川 庭がもしろいんです。芝生

の代わりに人工芝、木のへいにはプラスチックのつたをわかせ、その間にリンゴやぶどうをぶらさげたりして楽しんでるんです。庭といっても狭いので、奥行きがあるように見せようと、舞台セットの手法を借りたんですよ。

大山 お台所も狭くしてあるの。カウスターを境に、うしろを向くだけでお料理や洗物ができるの。それにカウスターの下は、食器からお鍋からなんでも収納できるようにしてあるんですよ。だから台所には、冷蔵庫とガス台が見えるだけ。そのガス台もふたがついていて、しめると調理台なんです。「お宅の台所にはなんにもないね」ってよくいわれるんですよ。

30万部出た料理の本

? ご主人にいわせると無精をしているんだそうですが、奥様には機能的なお台所ですね。この春「大山のぶ代のおもしろ酒肴」が出版されましたが、好評ですね。

大山 ええ、おかげ様で、三十万部超しました。テレビ番組で毎週一品ずつ出していたのが好評になって、本を出すことになったの。料理の方は、わが家でおかずに出したのや、なんとなく作っておいしかったものを紹介したりしてラクなんだけど、名前をつけるのがたいへん。名前には、主人のアイデアもあるのよ。



大山のぶ代

とうふの真ん中をくりぬいて大根のせん切りを入れ上に、おカカを乗せて。男女混浴。ってつけたり(笑)。

? もうすぐお正月ですが、毎年決まった過ごし方はあるんですか。

砂川 三ヶ日は休むようにしています。ホテルでお正月を迎えるのが多いかな。でも、必ず成田山に初詣に行きますね。二人で。前は、高倉健さんや長嶋茂雄さんと僕。それに何人かとよく行ってましたね。最近といっても、ここ四、五年は、豊川稲荷・妙法寺・大宮八幡と近場を回って家に帰ってきます。

仲良しの同居人です

? 時間もたちましたので、最後に、

大山さんから見たご主人、それに砂川さんから見た奥様について、いかがですか。大山 うちの人、ものすごく電気に弱い(笑)。普通の家では、男の人がヒューズなんか取り替えるでしょ。でも、うちの人が、結婚して十八年間、一度も修理したことないんですよ。それに、最近でこそ灰皿ぐらいは動かしますけど、前はなんでもいうだけ。日本の女性は必要以上にご主人に任せすぎるんじゃないかしら。

砂川 好きなこといっちゃって(笑)。最近、ヒューズの取り替えはできません。でも、この人も仕事を持っているからたいへんなんですよ。女房としての務めができなくなる部分もあるでしょう。

大山 友達がいうんですけど、私達夫婦って夫婦らしくないんですよ。仲のいい同居人って感じだそうなんです。お互いに、所帯じみていないからでしょうね。努力をしていますが、それを努力と思ったりダメですね。

妻でもあり、仕事を持つ女性でもある大山さんをよく理解していらっしやるご主人の砂川さん。お互いを理解することが夫婦円満の秘訣ということでした。

(記・斎藤みな)

部会 報告

第6回 大来佐武郎部会

昭和56年9月28日

今回は、朝日新聞社論説委員の松山幸雄氏が「日本の国際化時代をどうするか」というテーマをもとに講演した。

氏は、わが国の国際社会における地位の向上は、応分の役割について責任を持つべきことを期待されている。しかし、まだわが国の発言が、国際情勢に大きな影響を与えるには、残念ながらいたっていない。従来の日本外交の特質は、比較的安定した国際環境におけるなかで、内外に対する適応型の外交という点にあったが、国際化社会の多層化、複雑化に、どれほど適応していくことができるかが、

今後の問題であると強調。

最後に、「桃栗三年柿八年、梅梨りんごが十八年、みかんのばかやろう二十年、ゆずのろまが二十五年、国際感覚四十年」のたとえを例にひいて、戦後三十数年たっても、いまだに実がならない。したがって、国際感覚、外交感覚は、四十年でも危ないのではないかと指摘もしていた。

なお、今回の出席者は、大来佐武郎氏、河合三良氏、北原秀雄氏、木田宏氏、小林陽太郎氏、滝田実氏、中根千枝氏、ロペール・J・バロン氏。



フォーラムズフォーラム

先生を迎えて、「エネルギーシステムにおける電池の役割」をテーマに講演が行われた。氏の主な講演要旨は、つぎのとおり。

電池は大きく分けて、化学反応を使う化学電池と、物理的現象を使う物理電池とがある。化学電池の方はさらに、いったん使い切ると終わる一次電池、充電できる二次電池、燃料電池がある。

そこで最近、電池をエネルギーのシステムの中に組み込むという話がでてきているが、そのもっとも盛んなものが、燃料電池の研究である。これは、燃焼エネルギーを熱としてではなく、電気エネルギーとして利用しようとする考え方である。水素、ヒドラジン、亜鉛等を燃料に酸素、空気等を酸化剤に用いるもので、熱効率が高く、機械部分が少ないので騒音も少ない。そして、大気汚染物質の放出が少ないことなどが大きな特徴である。

しかし、水素をいかに安く手に入れるかが、これからの課題であるが、すでに、アメリカの人工衛星船ジェミニやアポロの電源として実用化されている。そして、この研究は各国で盛んに行なわれているが、日本でも東京電力が研究プラントの建設を進めている。

今回は、茅誠司氏、尾関通九氏、富節孝夫氏、橋口収氏、松根宗一氏、村田浩氏、が出席された。(記・斎藤みな)

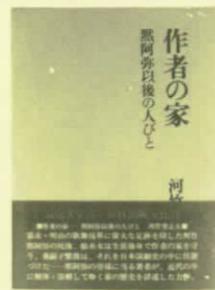
第14回 茅 誠司部会

昭和56年11月16日



第十四回目を迎えたこの部会では、東京大学工学部工業化学科教授の笛木和雄

2001年文庫



『作者の家』

黙阿弥以後の人びと

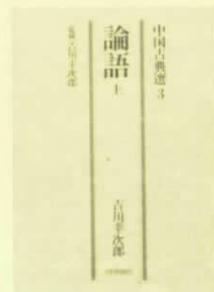
河竹登志夫著／講談社

「とてもよく書けているから読んでらん」と父から手渡された時は、こんなぶ厚くむずかしそうな本、果して読み切れるかと案じたが、読み進むうちにすっかりとりこになってしまった。著者の河竹登志夫さんはよく存じ上げている方だし、御存命であれば父と同じ九十四、五歳になっておられるはずの父君の繁俊氏も父の友人で私もお目にかかった事があり、又、逍遙が河竹家の養子縁組の労をとった間の事情もくわしく書かれていて、私の個人的な興味が増したせいともいえるが、そればかりではないと思う。この本の舞台となっているのは勿論、河竹黙阿弥が成した「狂言作家の家」であり、それに歌舞伎という言わば我々一般の者

には馴染みやすい特殊な世界が織りなされている訳だが、その背景の中で、黙阿弥の娘系、その養子になった繁俊、やがて迎えた妻みつの三人三様の姿が実に生々しくいきいきと描かれていて読む者の心をとらえる。生涯独身で、父親の残した家を守る事を一生の仕事とした男勝りの糸女——乳癌のシコリを麻酔なしで呻き声一つ上げずに手術した程の勝気で気むずかしい養母にただひたすら孝養を尽し、背中をさすり足をのみ、むずかしい好みの食事の世話をし、御気嫌伺いをし、内

では忍耐一途、外にあつては「作者の家」の当主としての大仕事をなし河竹の名前を守られた繁俊氏——身内が描く場合、えてしてどこかおもねるところが出るものなのに、登志夫氏の筆は淡々と何の衒もなくまことに爽やかな印象を与えてくれる。母君みつさんの抜群の記憶力に助けられ、足で集められた正確な史実をもとに冷静な、俯瞰でとらえた著者の確かな目がそこにある。関東大震災の描写がその最たるもので、生れる以前のこの大惨事を体験者が描くにも勝る迫力で記され圧巻である。坪内逍遙という偉大な祖父、その膝元で喜び苦しんだはずの父……、同じような状況の下にあつても、私にはこれだけのものを書いて残す事は、どう逆立ちしてみても出来ない。男と女の違い、能力

の差をつくづく感じさせられた一冊である。——坪内ミキ子——俳優／加藤芳郎 部会



『論語』

孔子

最近読んだものといつても本当の雑読ですし、繰り返し読むものも少なくありませんから、どれを挙げたらいいのか迷います。が、まず論語。いつも書棚の手の届くところに置いてあり、気が向くと手に取って開いたページを読みます。論語のよさは、何度読んでも飽きがこず、読むたびに新鮮な読後感があることです。わが家には、論語が幾冊もあります。四十歳代後半に入ってから以後は、論語のほか、老子と荘子にも魅力を感じます。荘子に対しては、青年の時代には「一代の大詭弁家」という見方をしていましたが、近ごろは「教わることが多い」という受け取り方になりました。もつとも、老子については「まだ理解できない」というのが実感です。

詩集も、寝室の枕許に置いてあつて、ふとんに入ってからよく読みます。与謝野鉄幹、同品子、それに土井晩翠のものなどが中心です。詩を読むと自体が楽しいという理由のほか、これによって自分の文章をリズム感の豊かなものにした。私の場合、そんな願いも加わっています。

読んで理屈抜きに興味深いと思つたのが、十八史略と三国志です。これらも、かつて読んだのを近ごろ改めて読んだのですが、広大な中国大陸を舞台上に幾多の英雄豪傑が活躍し、かつ、数多くの国家あるいは王朝が興亡を展開する様は、いわば世界史を凝縮してみせてくれているかのような感があります。単におもしろいだけではありません。国と国、人と人とが権謀術数を織りまぜて繰り広げる壮大なドラマは、どこか現代の国際社会の実相と相通するものがあります。国際問題についての認識と理解にも役立ちます。もちろん、忘れかけていた古語のいわれを思い出すという効用も軽視するわけには参りません。ほかに、山本周五郎の一連の時代小説。作者の人の影の投影でしょう、江戸時代におけるそこはかとない下町の人情や情緒がたぐい、心洗われる思いが致します。——尾関通允——著述業・自由学 園講師／茅誠司部会

FORUM, S FORUM



●七キロもやせました●

高原須美子さん

評論家／茅誠司部会

出版社の女性社長との三年越しの約束をようやく果たし、「女は三度老いを生きる」という著書が十一月から本屋の店頭に並びました。男性方は、「自分は妻にみとられて死ぬと思っておられ、老後について楽観的です。ところが、女性は、

親の老後、夫の老後、そして自分自身の老後と三度も老後に直面せねばならず、深刻にならざるを得ません。私はかねがね、「女は三度老後に直面する」といい、この自説をまとめたのですが、女性社長の手によって、「女は三度老いを生きる」という文学的女性的なタイトルになりました。

大学教師という十年一日の如き職業を持つ者には、御報告するほどの「近況」もありませんが、折角ですから、この頃興味をもっている十九世紀末日本の経済

老後と年金が切り離せないのははじめ近年、家庭の主婦も、経済に無関心ではいられなくなりました。この本も、マクロの経済とミクロの家庭を結びつけたものですが、マクロとミクロの接点というのが、最近の私の役割のようです。主婦向けに『ミセス経済学入門』の講義をし、消費者向けに、「経済とくらし」といった講演をしたりしています。

私自身、親の老後に取組む一方で、自分の老後の準備中です。まず、老後を健康に過ごすため、かかりつけの医師と水野さんのいいつけをきいて、三月から半年間で、六〜七キロやせさせました。

えは、銀本位制だったということができません。ところが、まえから金本位制だったイギリス以外の、独、米、仏などの諸国は明治五年から八年までに皆金本位制に移行しました。日本はそれに二十年余遅れたわけですが、その遅れのおかげで、明治二十年代の経済成長ができたらしいのです。

東京大学教養学部教授／小松左京部会
成長のからくりのお話をしてみようと思
います。
明治三十年に、日本は金本位制を採用
しますが、それまでは、外国の關係でい

●時折の小さな喜び●

中村隆英さん

東京大学教養学部教授／小松左京部会

大学教師という十年一日の如き職業を持つ者には、御報告するほどの「近況」もありませんが、折角ですから、この頃興味をもっている十九世紀末日本の経済

東京大学教養学部教授／小松左京部会
成長のからくりのお話をしてみようと思
います。
明治三十年に、日本は金本位制を採用
しますが、それまでは、外国の關係でい

また、仕事ばかりの生活では、老後の準備に不十分です。月に一度、わが家と称するパーティを開き、楽しんでいます。新聞記者、弁護士、歯科医、染色家、カメラマン等々、さらにサラリーマンはいろいろな業界にわたり、多様なメンバーです。話題は豊富です。料理は私の手作りを中心であり、ミクロの家庭の管理についても空論ではなく、実践していることを実証しています。

決してふとり過ぎだったとは思わないのですが、ほとんど同じ時期に、医師からも水野さんからも、二〇〜二五歳ころの娘時代の体重が標準であるといわれ、一大決心をして、食べもののセーブだけで、軽量化を果しました。美人？に戻りましたので、久しぶりにお会いする方は見間違えのないよう……。

明治二十年代の経済成長ができたらしいのです。
欧米諸国がこの時期に金本位に移行し

私の近況
私の近況
私の近況



たのは、カリホルニアの金ブームで、世

界の金ストックが急にふえたためでした。

その結果、従来、通貨に使われていた銀

が不用になり、世界的な銀価格は、この

二十年余にジリ安になり、とくに明治十

八年ころからは暴落して、明治初年に十

六対一だったのが、二十七年ころからは

三十対一以下におちてしまったのです。

これは日本の手のとどかないところでの

出来事です。

しかし、そのために、円の為替相場は、

銀の値下がりにより比例して継続的に落ちて

ゆきました。そこで、当時の輸出品だつ

た生糸や茶をはじめ、多くの商品の価格

は、円で見ればあがりますが、国際的に

はなおやすく、輸出が急に伸びたのです。

この好景気のなかで、鉄道が敷かれ、工

場が建てられて、日本の近代化は急に進

んだのだといつてよさそうです。

人間に運不運があるように、国家にも

運不運があるのでしようか。そして、こ

の事実が、今までほとんど論じられてい

なかつたことに気がついて、小さな論文

を書いて悦に入っている私もたぶん幸運

なのでしよう。十年一日の如き職業の人

間にも、たまには小さな喜びが訪れるこ

ともあるのです。

●救命救急センター入院●

中村 貢さん

朝日イブニングニュース社長／茅誠司・大来佐武郎部会

午前三時に、42度の高熱——といった

ハブニングにどうしたか、を報告したい。

風邪が抜けきらず、抗生物質を飲んで

いた。熱も下がった。明日は社へと思っ

て、風呂に入り、ビールを片手に、テレ

ビデスカラ座のオペラ「シモン・ボッカ

ネグラ」を楽しんだ。寝ようとすると、

英国ウエントワースからのゴルフ・マッ

チプレー（青木vsブレイヤー）の衛星中

継が流れている。水割りをかさね、午前

一時までつきあってしまった。

ひと寝入りしたろうか。猛烈なふるえ

に目が覚めた。かたわらの女房を起こし、

計ってみたら42度。体温計の天井にとど

いている。でも、意識は割にはつきりし

ている。

川崎市の北部・多摩区王禅寺に、私は

住んでいる。都内の主治医Y先生（慶応

病院）にたのもうにも、いかにも時間が

悪い。救急車を呼べば川崎南部にまでタ

ライまわしされかねない。

近くの聖マリアン大医大病院はどうだ

ろう。娘が二人ともお産でお世話になり、

三人の孫を世に出してもらった病院だ。

家内が娘に電話し、娘が産科のA先生に

たのんでくれた。「救命救急センターに

話した。すぐ行くように」となった。

老妻の運転でたどりつく。午前三時半

だった。当直の若い先生が直ちに胸部X

線撮影。待つ間もなく現像されて「肺炎

です。入院」——

頭も両脇も大きな氷枕で冷やされ、た

だちに大量の点滴作成がはじまる。

完全看護の、広い四人部屋だった。五

階から落ちた人、吐血のあげく胃の緊急

手術をした若者など、まわりは重傷患者

ばかりだった。私だけは二日後には熱も

下がり、まるで場違いの感じとなった。

そして四日後には「十日から二週間の徹

底的自宅療養と通院」を条件に退院させ

てくれた。救命救急センターの回転は早

い。

「命びろいしたね。お嬢さんのおかげ

だぞ」と、悪友たちから冷やかされ続け

ている。

21世紀フォーラム／部会メンバー

発起人

- 内田 忠夫 東京大学教養学部教授
 加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
 加藤 芳郎 漫画家 漫画家協会理事
 茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員
 小松 左京 作家
 東畑 精一 東京大学名誉教授(財)政策科学研究所顧問
 中山伊知郎 (故人) 政策科学研究所顧問
 松本 重治 (財)国際文化会館理事長
 向坊 隆 原子力委員会委員長代理 前東京大学総長
- 加藤秀俊部会**
 テーマ＝日本の村の将来
- 加藤 秀俊 学習院大学法学部教授
 川喜田二郎 筑波大学教授
 宮田 登 筑波大学助教授
 宮本 千晴 近畿日本ツーリスト(株)日本観光文化研究所所員
 米山 俊直 京都大学教養学部教授
- 加藤芳郎部会**
 テーマ＝日本のサーバイバル
- 加藤 芳郎 漫画家 漫画家協会理事
 青空うれし テレビタレント
 青空はるお テレビタレント
 天地 総子 歌手 タレント
 大山のぶ代 俳優
 大和田 獏 俳優
 岡江久美子 俳優
 加治 章 NHKアナウンサー
 川野 一宇 NHKアナウンサー

- 小島 功 漫画家
 砂川 啓介 俳優
 鈴木 義司 漫画家 漫画家集団所属
 田崎 潤 俳優
 檀 ふみ 俳優
 坪内ミキ子 俳優
 富田 純孝 NHKディレクター
 中田 喜子 俳優
 轟目 良 俳優
 水沢 アキ 俳優
 三橋 達也 俳優
 ロミ 山田 歌手 俳優
 渡辺 文雄 俳優
- 茅 誠司部会**
 テーマ＝明日のエネルギー
- 茅 誠司 東京大学名誉教授 日本学士院会員
 有澤 廣巳 東京大学名誉教授 (社)日本原子力産業会議会長 日本学士院院長
 生田 豊朗 (財)日本エネルギー経済研究所所長
 稲葉 秀三 (財)産業研究所理事長
 内田 忠夫 東京大学教養学部教授
 大島 恵一 (財)工業開発研究所所長
 岡村 和夫 NHK解説委員
 尾関 通允 著述業 自由学園講師
 金森 久雄 (社)日本経済研究センター理事長
 木元 教子 放送キャスター
 五代利矢子 評論家
 齊藤 志郎 日本経済新聞社アジア総局長
 三枝佐枝子 評論家 商品科学研究所所長
 高原須美子 評論家

- 富舘 孝夫 (財)日本エネルギー経済研究所研究部長
 中村 貢 朝日イブニングニューズ社代表取締役社長
 永井陽之助 東京工業大学教授
 橋口 収 公正取引委員会委員長
 深海 博明 慶応義塾大学経済学部教授
 伏見 康治 名古屋大学・大阪大学名誉教授 日本学術会議会長
 松根 宗一 大同特殊鋼相談役 (社)経済団体連合会常任理事
 村田 浩 日本原子力研究所顧問
- 小松左京部会**
 テーマ＝大正文化研究
- 小松 左京 作家
 河合 秀和 学習院大学法学部教授
 中村 隆英 東京大学教養学部教授
- 大来佐武部会**
 テーマ＝世界の中の日本
- 大来佐武部 内外政策研究会会長 (社)日本経済研究センター理事・顧問
 江藤 淳 評論家 東京工業大学工学部教授
 河合 三良 (財)国際開発センター理事長
 北原 秀雄 前駐仏大使 (株)西武百貨店顧問
 木田 宏 国立教育研究所所長
 小林陽太郎 富士ゼロックス(株)社長
 篠原三代平 成蹊大学経済学部教授
 滝田 実 アジア社会問題研究所理事長
 堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストアー社長

- 中根 千枝 東京大学東洋文化研究所所長 国際人類学民族学会副会長
 中村 貢 朝日イブニングニューズ社代表取締役社長
 林 雄二郎 (財)未来工学研究所副理事長
 松山 幸雄 朝日新聞社論説委員
 ロベール・J・パロン 上智大学比較文化学科学教授
- 松本重治部会**
 テーマ＝二十一世紀における日本人の生き方
- 松本 重治 (財)国際文化会館理事長
 川喜田二郎 筑波大学教授
 永井 道雄 朝日新聞社委員論説委員 学名譽教授
 中村 元 東方学院院长 東方大学名誉教授
 本間 長世 東京大学教養学部教授
 前田 陽一 (財)国際文化会館専務理事 東京大学名誉教授
 横 文彦 東京大学工学部教授
 武者小路公秀 国連大学プログラム担当副学長
 村上 兵衛 (財)日本文化研究所専務理事
 柳瀬 睦男 上智大学学長
- 国際交流研究部会**
- 遠山 一 ターク・タックス 歌手
 喜早 哲 ターク・タックス 歌手
 佐々木 行 ターク・タックス 歌手
 高見沢 宏 ターク・タックス 歌手
 石井 好子 歌手
 小林 道夫 チェンバロ奏者
 佐賀 和光 建築家

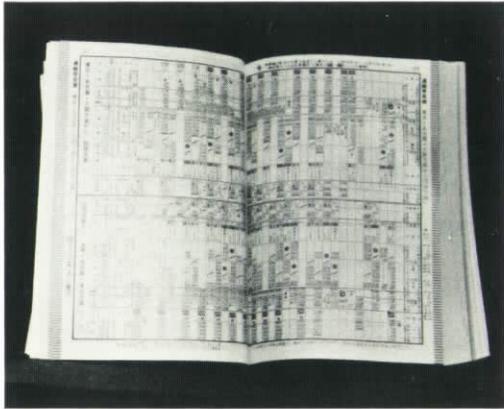
- 佐々木信也 スポーツ・キャスター
 千 宗室 裏千家家元
 堤 清二 (株)西武百貨店会長 (株)西友ストアー社長
 富田 勲 シンセサイザー作曲・演奏家
 服部 克久 作・編曲家
 松原 秀一 慶応義塾大学文学部教授
 三村 忠良 日本国有鉄道職員局労働課長
 ミルトン・L・ラドミルビッチ アメリカ公立アメリカンスクールビジネスマネージャー
 村上 兵衛 (財)日本文化研究所専務理事
 山城 祥二 芸能山城組組頭 筑波大学講師
 吉川 光 NHK整理部担当部長
- 事務局**
- 笠井 章弘 (財)政策科学研究所理事
 生田 豊朗 (財)日本エネルギー経済研究所所長
 依田 直 東京電力(株)取締役企画部長
 山田 嗣 (財)政策科学研究所主任研究員
 齊藤 みな (株)二十一世紀企画
 浜岸 薫 (株)二十一世紀企画
 村野 京一 (株)二十一世紀企画
- (各部会とも五十音順)



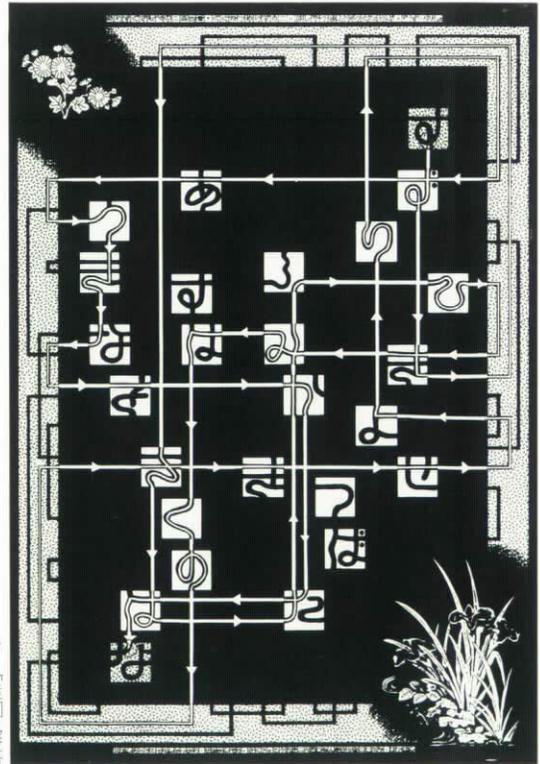
▶ 知恵の輪



◀ 唐皇模様



▶ 時刻表



▶ 「迷宮」解答

21世紀フォーラム 第十一号
 発行 一九八一年十二月三十一日
 発行人 笠井章弘
 発行所
 21世紀フォーラム事務局
 東京都千代田区永田町二一〇
 一 二 秀和永田町TBR六〇一
 (株)二十一世紀企画内
 電話〇三・五〇八・二六二五

編集
 21世紀フォーラム事務局
 印刷
 (株)東京印書館

クロイワ・カズ／ミノタウロスの顔